タロットの死神

刹那

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
タロットの死神

【Ｎコード】
Ｎ７２６６Ｑ

【作者名】
刹那

【あらすじ】
２０代後半の働きざかりの主人公は、仕事帰りに一枚のタロットカードを拾う。描かれたものが『＜？？？＞　死神』であったために不吉に思い、それを捨てようとするが、その瞬間彼は異世界に召喚された。生贄として…。

生贄（前書き）

一方で書いているのが二次創作で、気分転換にオリジナルも書いてみようと思い立ち、書いてみました。本作品はＳＷ２．０等のＴＲＰＧ、ドラクエ等の名作ＲＰＧに多大な影響を受けています。

生贄

『??　死神』

そのカードを男が拾ったのは偶然だった。駅のホームで電車を待っている間、手持ち無沙汰であった為に新聞を読もうと取り出そうとして、うっかり落としてしまったのだ。新聞を拾い上げた際に下にあったのが、裏になったそのカードだったのだ。男はそのカードに興味をもち、ついそれを拾い上げてしまった。それが異世界への一方通行の切符とも知らずに…。

男は裏になったカードを拾い上げて、何が描かれているか確認した。そのカードはトランプにしては大きく、また装飾もこっていたので、それゆえに男の興味を惹いたのかもしれない。しかし、興味に対して得られたものは不吉であった。カードの表に描かれていたのは鎌を持つ骸(むくろ)の姿であり、それは容易に男に死神を連想させた。実際、己の連想どおりそれはタロットカードにおける大アルカナ『??　死神』であることを、男は過去に付き合った占い好きの女性から教えられた記憶から思い出した。

「確か意味は…『停止・損失・死と再生』だったかな?うわ、再生以外はどれもろくでもないな。それにこの再生も破壊からの再生だった覚えがあるし、やっぱりろくでもないな…」

しかも、男が表にしたとき、タロットは正位置であり、逆位置（上下逆）ではなかった。つまり、逆位置なら「再スタート、新展開、上昇、挫折から立ち直る」などの反転したいい意味にとれるのだが、正位置である以上、そのまま本来の悪い意味をとらねばならない。それは「終末、破滅、離散、終局、清算、決着、死の予兆」である。

誰がどう考えてもいただけない不吉なものである。男がすぐにタロットを捨てようと考えたのは、無理もない事であった。だが、男にそれを捨てる機会は永遠に訪れなかった。捨てようとした瞬間に男はこの世から消失したからだ。

別名金砂の国といわれる天恵国家アルクレイア。その王城の一室で、国を治める重鎮達がある不幸に震撼していた。それは『天恵』たるかの国の姫ラナリスの突然死であった。『天恵』は豊穣を呼び、国家を富ませる国家の根幹であった。にもかかわらず、その根幹が思いもかけぬ事故で死んでしまったのだ。『天恵』は血によって受継がれ、『天恵』は『天恵』の子供から一人しか生まれない。先代の『天恵』であった王妃はすでに亡く、今代の『天恵』であるラナリスは僅か１０歳で初潮も始まっていない少女だった為に当然子供もいない。すなわち、天恵国家の根幹『天恵』の血筋が絶えてしまったのだ。己の財と権力を支えてきたものがなくなり、彼らは絶望に震えていたのだ。

「なんということだ！天恵国家の象徴たる『天恵』が死んでしまうとは…、護衛は一体何をしていたのだ？！」

「そうだ、連中がへまをしなければ、『天恵』は失われなかった！連中を即座に斬首に処すべきだ！」

二人の重鎮が護衛の怠慢（たいまん）をあげつらう。「そうだそうだ」と次々に同調する声が上がり、護衛達の処刑は決定的なものになりそうであった。しかし、それを止める声が上がる。

「やめよ、見苦しい。護衛達に何ら落ち度はなかった。誰があのようなこと予想できよう。もし、落ち度がある者がいるとすれば、それはラナリスのわがままを許した我々にあるだろう。
それに今考えるべきことはそんなことではない。我らが考えるべきは、『天恵』なしで民をどう養えばいいかということだ！」

厳然たる口調で断言する国王ゼルビスの言に重鎮達は口を噤(つぐ)む。王の顔には疲れと苦渋(くじゅう)の色が見える。愛する娘を失いその深い悲しみと怒りから、何かにあたりたいのはほかでもない彼自身であったが、国王であることの矜持(きょうじ)と責務からそれを自制していた。それに今は誰の責任かをあげつらう暇などない。国家の危急存亡の秋(とき)なのだから。

金砂の国の別名どおり、砂漠が実に国土の6割を占める天恵国家アルクレイアは天恵がいたからこそ存続できたといっても、過言ではない。砂漠から吹く乾いた風と少ない雨の為、3割の耕作地域ではろくな作物が取れない。幸い海には面している為、水と塩には困らないが、穀物などは絶望的であった。かつては困窮国家と呼ばれていたアルクレイアは、千年以上の伝統ある独立国家でありながら、その貧乏さ、土地の不毛さゆえに誰も欲しがらないという有様で、王族ですら他国の庶民と同様の生活をしていたのだ。一方で、彼らは慎ましい生活をしながら、敬虔(けいけん)であり神々への感謝を忘れる事はなく、その信心深さで知られていた。神々がそれを哀れに思ったのか、かの国にはいつからかそこにいるだけで恵みをもたらすという豊穣(ほうじょう)の力をもった女性が生まれるようになった（最初の頃は天恵は同時に何人も存在し、血によって受継がれるものでもなかった）。その女性がいる場所は、自然の恵みにあふれ、生物が大地が活性化する。どれほどその力が凄いかと言えば、一月もあればオアシスでもなんでもない砂漠に花が咲き、水が湧き出すという神がかり的な

ものであった。
いつしか人々は、その女性を『天恵』と呼び敬い、大切にするようになった。困窮(こんきゅう)していた王族はこれに飛びつき、妻とすることで絶対的な権威を手に入れると共に『天恵』の保護と独占を図ったのだった。これが天恵国家アルクレイアの成り立ちである。

時が経つにつれ、人々は『天恵』の恵みになれ、神々への感謝を忘れ、その恵みを当たり前のものと甘受するようになっていた。人々は緩やかに堕落していったのである。
まず、耕作する者がいなくなった。当然だ、己が耕作しても、ろくな作物がとれず、『天恵』がいる地からは耕作する必要もなく、実り豊かで極上の物がとれるのだから。これにより、砂漠の耕作地化は止まってしまい、耕作地化に成功した3割の砂漠も耕すことを放棄された為に、砂漠に逆戻りした。
次に、商人となる者が増えた。なにせ『天恵』がいれば食うには困らないのである。農業以外で金を稼ぐ必要があったからだ。しかも、天恵の恩恵は彼らの商売にも及び、彼らは不思議と損をしなかったのだ。これにより多くの人材が流出し、同時に有り余る資金を手に入れた彼らは肥大化し、贅(ぜい)の限りを尽くすようになった。
その堕落が極まったのが、近世のアルクレイアであった。庶民ですら、他国の貴族並の生活をする程の富を持っており、彼らは他国民を見下すようになっていた。そして、彼らは他国民を潤沢(じゅんたく)な資金をもって買い取り奴隷として扱い、その有り余る資金力を背景に国家間の対立を煽(あお)って、わざと戦争を起こさせてそこから利益を得るなど、死の商人とも言うべき所業を日常的に行うに至っていた。いつしかアルクレイアは皮肉をもってこう呼ばれるようになった。『金砂の国』と…。
無論、他国も黙っていたわけではない。諸国はこぞって『天恵』の奪還を試みた。しかし、アルクレイアは『天恵』の重要性をよく

理解しており、彼女にけして他国の土を踏ませなかった。重鎮達に処刑すべきだと言われていた護衛達も、アルクレイア国民のみで構成された選りすぐりの精鋭中の精鋭であり、他国の奪還の試み全てが失敗したといえば、どれだけ精強であるか理解できるだろう。護衛達はアルクレイア国民であるからこそ、『天恵』の重要性を理解し、彼らはけして買収や裏切りに応じなかった。逆にそのことを理由にペナルティをかせられることになった国すら存在するのだから、その厳格なありようは押してしるべしである。

また、死の商人のようなあり方に不満を唱えた国も少なくなかったが、その圧倒的な財力によって、たちまちに経済的に困窮・破綻ささられた。そういった所業を繰り返すうちに、いつしかアルクレイアに文句をつける国は存在しなくなった。いや、つけられる国はというべきだろう。

いわば繁栄の極致にいたわけだが、彼らのありように神罰が下ったのか、全ての根幹たる『天恵』はいつからか一人しか生まれなくなり、またその血統以外からは生まれる事がなくなったのであった。アルクレイアの者達はその血統が絶えることを恐れ、慌てて疎(おろそ)かにしていた神の祭祀(さいし)をさかんにし、崇(あが)め奉(たてまつ)った。

しかし、そんな即物的な祈りが効果を表すわけがなく、『天恵』が二人以上現れることはなかった。しかも、『天恵』による恵みが減ったにもかかわらず、贅沢になれた民はその生活水準を落とす事をよしとせず、彼らはその為に借金すらするようになった。潤沢な資金と『天恵』の恵みで支えられた経済大国であったアルクレイアは、一転して借金大国へと転落したのだった。それでも、どうにかこうにか今日まで国家として存続できたのは、『天恵』が一人とはいえ、存在したからである。

そして、とうとう終わりの日が来てしまった。豊穣の女神の化身

とも言われた『天恵』の血統はついに途絶えてしまったのである。それも、誰にもどうしようもない事故によって…。今代の『天恵』たるラナリスは、唯一の『天恵』とあって、それは大切に育てられた。現王ゼルビスに他に子がいないせいもあって、その寵愛を一心に受けた。しかも、彼女は歴代の『天恵』が持ち得なかったある特殊な能力をもっていた為、誰も彼も彼女を甘やかし、肉親から怒られる事すらなかった。その結果、善悪の区別なき天真爛漫（てんしんらんまん）な少女として育った。

だが、結果的にその善悪関係ない無邪気さが彼女の命を奪うこととなった。彼女はあろうことか聖獣である蠍（さそり）を飼っていたのだ。ちなみに、この世界の蠍は頭がよく、人間を襲ったりせず、逆に害獣をその毒でしとめてくれる事から、益虫扱いであった。特に砂漠の国であり、多くの蠍がいるアルクレイアでは、ラナリスの飼っている蠍は聖獣とされていた。ゆえにラナリスがその蠍を飼う事も別におかしい事ではなかった。

だが、その猛毒は誰もが知るところであり、そのようなものを大切な『天恵』のそばに置くなど正気の沙汰ではないと、父である王や重鎮達はこぞって反対した。

しかし、悪い事にここでラナリスのわがままが炸裂した。飼おうとした蠍の種類が聖獣であり、その性状が大人しく人間を襲う事はないということがそれを後押しし、最終的に彼らはラナリスの希望を叶える他なかった。ラナリスは機嫌を損ねると『天恵』の力を止めてしまうことすらしたのだから、彼らが最終的に折れたのはやむをえない事であった（ラナリスの特殊能力は、天恵の力の対象を指定及びＯＮ／ＯＦＦできることである）。

しかも、普通に飼うだけなら問題なかったのだろうが、あろうことかラナリスは自身に諫言（かんげん）する気に食わない侍女をその餌食にしていたのだ。それが明るみに出たのは、彼女自身の死によってであっ

た。自分の周りから気に食わない相手を排除した彼女は、思うが侭に振舞った。彼女のすることに口を挟む者はいなくなったのだから、それは自明の理であった。そして、それは同時に蠍の餌となる者もいなくなったということであり、当然飼育の心得などない彼女は餌を与えることを怠った。蠍がラナリスに従っていたのは、一潤沢な餌（人間）を与えてくれたからであり、けして主として認めているわけではなかった。

それでも、本来ならば蠍がラナリスを襲う事はないはずであった。その蠍は野生の害獣を主食としていたのだから。しかし、彼女は人間を餌として与えてしまい、蠍にその味を覚えさせてしまったのだ。もし、代替の餌を与えていればまだ話は別だったのだろうが、さらに餌を与える事を怠ってしまった（彼女が蠍の餌食にした最後の侍女が蠍の飼育係だった）。この時点で彼女の運命は決していたと言っていいだろう。結果、彼女は久方ぶりに入ってきた気に食わない侍女を蠍の餌食にしようと、飼育箱から蠍を出そうとして、飢餓の極みにあった蠍に毒針を一閃され、侍女ではなく己が餌食になってしまったのであった。

はっきり言ってしまえば、事故でもなんでもない己の所業の結果が積み重なった自業自得であった。実際、ラナリスの犠牲によって難を逃れた侍女は己が殺されるところだった事を知り、彼女を助けることなく上司に事のあらましを報告した。いくら『天恵』とはいえ、自分を殺そうとした者を命がけで助けるほど、その侍女はお人好しではなかった。ましてや、彼女はラナリスにかつて仕えていた姉（蠍の飼育係だった侍女）の死の真相を確かめる為に王城に出仕したのであり、その真相が見え、かつ今また自分をも殺そうとした姫を助ける義理などこれっぽちもなかったのだ。

突然の『天恵』の死に王や重鎮達は頭を抱えた。しかも、殺され

る所だった侍女をかわきりにラナリスの王城内での悪行の数々が出るわ出るわ。『天恵』の恵みを絶たれることを恐れ、口を噤んでいた者達も、ここぞとばかりに言い立てた。彼女の所業が許容あるいは黙認されたのは、『天恵』だからこそであり、恵みをもたらす存在であったからに過ぎない。それが無くなった以上、彼女の為に口をつぐむ必要などないからだ。次々と明らかになる娘の所業に、ゼルビスは否でも応でも、己が娘の育て方を間違ったことを悟らざるをえなかった。そして、彼は苦肉の策として、即座に城門を閉じさせた。城に人を入れぬ為ではなく、人を出さない為に…。

このまま『天恵』の死が国民に伝われば、混乱は必至である。しかも、王宮内だけでもこれだけの問題を起こしていたのだ。外出した際に城外でも同様のことを起こしている可能性は高い。であれば、王城内と同様に娘を糾弾（きゅうだん）する声が責任を追及する声があがるであろうことは想像に難くない。

確かに娘の行動に問題はあろうが、元を辿れば自分達が甘やかすだけで善悪の区別をしっかり教え込まなかったことが原因なのだ。死者に鞭打つような真似は親としてさせたくないのが、ゼルビスの正直な心境であった。

さらにいうなら、唯一の直系の王位継承権者が死んだのだ。今、この王城から人を出せば、王位継承権を持つ者達がこぞって王位簒（さん）奪（だつ）に動かないとも限らない。なにせ、王家の権威の最大の根拠となっていた『天恵』はもういないのだから。『天恵』が一人しか生まれないようになって、国民（貴族・平民共に）に対して与えられる恵みは明らかに減り、人々は借金をすることで生活水準を保つ始末である。王家への不満は日増しに強まっているのだ。有力貴族が我こそはと言い出しても、なんら不思議ではないのだ。そうなれば、泥沼の内戦へと一直線である。それだけはなんとしても避けねばならない。

結局、喧喧囂囂(けんけんごうごう)たるゼルビスと重鎮達との話し合いはまとまらず、とりあえず日を改めて議論し直すことになった。そんな中、私室に戻るゼルビスは途方に暮れていた。明日になったところで、解決策など見つかるはずもなかったからである。経済大国であったアルクレイアが一転して借金大国へと転落しても、財政破綻せずどうにかやってこれたのは、王家には天恵という不変の枯れない恵みが存在したからである。近世の所業によって、近隣諸国から嫌われているアルクレイアは『天恵』という究極の保証人・担保があって、借財を可能としたのだ。それが失われた今、破綻は目前に迫っていた。

『天恵』に依存しきった故の終わりであった。

「このままでは全てが終わってしまう。『天恵』に依存し、その力を独占する事に執着して、血を濃くした挙句の結末がこれとは笑い話にもならんな…。」

自嘲(じちょう)するように言うゼルビス。そう、天恵が一人しか生まれなくなったのは、けして神罰などではない。王家がその恵みを独占せんとし、そのことごとくを娶(めと)り、権威の根拠・象徴と化したからに他ならない。血を濃くするために近親婚すら積極的に行った結果が、その集大成ともいうべき能力を持ったラナリスの誕生であったのだ。

実際、ラナリスが王家にもたらした恵みは歴代の『天恵』を遥(はる)かに凌(しの)いだ。王家は安泰だと考えていた矢先にこれである。ゼルビスは、それを招いた遠因である己や先祖の考えの浅はかさを笑わずにはいられなかった。

「２０００年の歴史を持つアルクレイアもこれで終わりか…。よりにもよって、この俺の代で！」

王家がいずれ滅ぶのは仕方がないことだとしても、よりにもよって己の代で滅びようとは露程も考えていなかった彼は、亡国の最後の王となる屈辱（くつじょく）に全身を震わせた。

「そんなことはこの爺がさせませんよ、ゼルビス様」

そんな彼の苦悩を引き裂くように声をかける者がいた。青のローブに身を包んだ初老の男性だ。名をメフィラといい、手には杖を持ち、いかにも魔法使いぽい人物であった。実際、彼は宮廷魔術士であり、その長を務める者であった。ゼルビスの幼少の頃の教育係であり、現在は知恵袋的存在である。そして、王であるゼルビスを唯一未だに名で呼ぶ事を許されている者でもあった。

「爺か？何の用だ？俺は一人になりたいのだ。放っておいてくれ」

「ゼルビス様の苦悩を晴らして差し上げようというのに、随分つれないではありませんか？」

「俺の苦悩を晴らす？はは、無理なことを言うな爺。唯一の『天恵』であるラナリスが死んでしまった以上、解決策などあるものかよ。王城にいつまでも重臣達をとどめていられるわけでもない。せいぜい2，3日が限度だ。そうなれば、『天恵』が失われた事が明らかになり、この国はお終いだ…。それとも、お前が『天恵』を新たに作りだす事でもできるというのか？」

メフィラの言葉につまらない慰（なぐさ）めはいらないと、出来もしない事を言うなと言葉を叩きつける。

「流石に神からの賜り者である『天恵』を作りだす事は、人であるこの身には不可能でございます。しかし…」

「そらみたことか！出来もしない事を…「ラナリス様を確実に『天恵』のまま蘇生させることはできます」…なんだと？！」

いらぬ希望を持たせようとした事にさらに文句をつけようとして、ゼルビスは驚愕の言葉を聞いた。『天恵』たるラナリスの蘇生というありえない言葉を。

「確かに『天恵』であるラナリスが力を維持したまま生き返れば、全ての問題は解決できるが…、そんなことが本当にできるのか？」

「できます。正確に言えば、この爺めには不可能ですじゃ。しかし、それを可能とするものが我が国はございます」

「そ、それは一体なんだ？言え、すぐにでも用意させよう！」

確信に満ちた様子で語るメフィラにゼルビスは縋るように叫ぶように問うた。

「落ち着いて下さい、ゼルビス様。まずは、このカードに見覚えはありませんかな？」

せかすゼルビスを宥めながら、メフィラは懐から一枚のカードを取り出した。描かれているものは『？　魔術師』。占いに長けた者なら、タロットの大アルカナを構成する一枚であることに気づくだろう。但し、それはただのタロットカードではありえなかった。なぜなら、それは強大なマナを内包し、光り輝いていたのだから。

「これは王家の至宝『神創のタロット』か？だが、王家が所蔵するものとは絵柄が違うようだが…。それにそもそもあれは、動かす事を禁じられたはず。爺、このカードをどこで手に入れた？事と次第によっては爺といえど、容赦はせぬぞ」

ゼルビスはそれが王家の至宝として伝えられているものの一つと同じものである事に気がついた。それは、絶対不可侵と伝えられている物であり、建国の時からその位置を不動のものとして、地下神殿に安置されているはずのものである。いくら幼少の頃からの付き合いとはいえ、王家の至宝に手出しされて黙っているわけにはいかない。彼は語気を強めてメフィラを詰問（きつもん）した。

「落ち着いて下さい、ゼルビス様。この爺が、王家の至宝に手出しなどするはずありましょうや。ゼルビス様のおっしゃるとおりこれは『神創のタロット』ですが、王家所蔵のものとは別物です。王家のものは『？？　死神』、私がもっているのは『？　魔術師』です。描かれたものが異なるのはそのためです」

メフィラのしっかりした説明に、嘘はないとゼルビスは判断する。それに確かに、彼の記憶にある王家所蔵のカードはメフィラの持つカードとは異なるものが描かれていたからだ。

「そのカードが『神創のタロット』であり、爺の持つものが王家の至宝ではないことは分かった。しかし、それがどうラナリスの蘇生と結びつくのだ？まさか、そのカードには死者を蘇生させる力でもあるのか？」

「いえいえ、私めのもつ『？　魔術師』は魔術の神『ラウザーク』の御力を宿し、その持ち主である私の魔術師としての能力を増大させてくれますが、流石に死者の復活は不可能ですじゃ」

「では、我が王家の至宝の方が？」

「はい、そのとおりです。王家の至宝『？？　死神』は、生と死を司る闇の大神『ルナフィア』の御力を宿していることが、私の研究により分かっております。そして、このカードは唯一、何の副作用なく即座に完全な蘇生が可能とすることも！」

この世界において蘇生魔法は存在しないわけではない。しかし、それは多大な時間と労力を必要とし、莫大な金がかかるのである。しかも、たとえ蘇生がうまくいったとしても、副作用で何かを失うことは珍しくないのである。それは記憶であったり、魔力であったり、才能であったりする。せっかく蘇生させた大魔術師が、肝心の魔力を失っていたということもあったのであった。ゼルビスが蘇生を考えなかったのは、財政的にも時間的にも不可能であること以上に、蘇生させたところで肝心の『天恵』を失っていては意味がないからであった。

「それは本当か？！もし、そんなことができるならば、この国はまだ滅びなくてすむ。ラナリスさえ、『天恵』さえいれば、全ての問題は片付くのだからな！」

喜色を満面に浮かべて叫ぶゼルビス。だが、一方で気にかかることもあった。

「だが、あれは建国以来２０００年間、一度たりとも触れられたことのない不動の至宝だ。俺ですら、即位の時に親父からこれにだけは手を出すなと見せられただけだからな。そんなものに手を出してよいのだろうか…。
それに、あれがそのような力を持っていたとしても使える者がいる

のか？」

ただ一度見ただけにも関わらず、ゼルビスがカードの事を覚えていたのは、放蕩三昧（ほうとうざんまい）だった先王である父が、珍しく真剣な表情で彼に言い聞かせたからである。そんなものに手をだしていいのか、正直、気がひけた。その上、そもそも使える者が存在するかどうかも疑問であった。

「ゼルビス様の心配はごもっともですが、あの至宝『神創のタロット』は描かれたものに対応した神の御力が宿っているというだけで、他には非常に優れた魔導器であるという機能しかないことが、私自身が持つ『？　魔術師』と、他二枚を研究した結果判明しておりますのでご安心を。王家が建国以来、『？？　死神』を封じてきたのは、二大神の『ルナフィア』の御力を宿していることに加え、蘇生という魅力的過ぎる力に手をだすことを戒（いまし）め秘匿（ひとく）する為でしょう」

「なるほど、分かる話だ。確かに知っていれば使いたくなるだろうし、諸国も欲しがるだろうな。だが、肝心の使用者の方はどうだ？」

「使用者についても問題はありません。『？？　死神』は特殊なカードなのです。そもそも『神創のタロット』は、本来この世界で作られたものではなく、異界より流れてきたものだそうです。それを拾われたのが技芸の神『サリューン』で、彼はそのカードが偶然にも自分達神と同じ数あり、かつ象徴する絵が描かれていることに気づきました。そこで彼は考えました。描かれたものに対応した神の力を宿してみようと。彼は元々善悪に囚われる神ではなかったので、正邪関係なく神々の協力を求めたそうです。そうして生まれたのが、この『神創のタロット』というわけです。

そして、数あるカードの中でも別格の一枚『？？　死神』は、その力の性質上、この世界の者を使用者にするのは不適格だと『ルナフ

ィア』は考えました。なにせ、人の生死を左右できるのですから、この世界の者ではどうしても血縁や情に左右され、公正な使用は望めません。そこで、『ルナフィア』はカードと元あった異界との縁を用い、その異界より使用者、主となるものを選び出し、召喚する機能をつけたのです。つまり、封印を解放すれば、カードの方で勝手に使用者足りえる異界の者を選び出し、こちらのいずこかへと連れて来てくれます」

「ふむ、しかし、我が国に召喚されるとは限らないのではないか？」

メフィラの説明になるほどと首肯するゼルビスだが、使用者がどこに召喚されるかは不明だと問題を指摘する。その言葉に出来のいい教え子に満足する笑みで頷くと、メフィラは解決策を提示した。

「よい指摘です、ゼルビス様。ですが、心配はご無用です。『？？？　死神』は我が国の至宝として、２０００年間同じ場所に安置されていました。すなわち、明確な縁が存在するのです。『？？？　死神』の召喚術は縁を利用したものですので、この爺めが『？　魔術師』の力を用い、縁をつなげ召喚場所を地下神殿に指定いたします。さすれば、後は使用者に蘇生をさせるだけです」

「しかし、召喚された者が協力的だとは限らないのではないか？」

やはり、死者蘇生は普通の人にとっては望めないものだし、宗教的に禁忌（きんき）とするものもある。つまるところ、死者蘇生は抵抗がある者が少なくないのだ。それもあかの他人となれば、なおさらだろう。ゼルビスの問は当然のものであった。

「ご安心を。元より召喚された者の意思など関係なく、蘇生させる方法を考えてあります。それに元より使用者が、こちらの希望を聞

いてくれることはないでしょう。なにせ、己の命を代償とした蘇生術なのですから…」

「なんだと?!それはどういう意味だ?」

使用者の意思など関係ないというメフィラに、愕然として問いただすゼルビス。

「ゼルビス様、何の副作用もない完全な蘇生が何の代償もなく行えるとお考えですか?そんなことはありえません。如何に神の力を宿したカードとはいえ、使用するのは人です。当然それなりの代償が必要となります」

「…蘇生の代償はなんだ」

「ゼルビス様も、もうお分かりではないですか?一人を蘇生するならば一人の命を捧げよ。つまり、術者の命が代償です」

震える声で問うたゼルビスに、メフィラは酷薄(こくはく)な声で答を告げる。

「馬鹿な!爺は、ラナリスを蘇生する為に何の罪もない者を生贄(いけにえ)にしろというのか?!そんなこと許されるわけがない…」

「ならばどうします?!ラナリス様の蘇生以外に打つ手があるのですか?」

叫ぶように否定するゼルビスに、メフィラは他にてがあるのかと迫る。

「そ、それは…」

言葉をなくし、これからのことを思い顔を蒼白にするゼルビス。彼には最早打つ手などなく、『天恵』なしではどうにもならないところまでこの国はきていたからだ。

「ゼルビス様、全てこの爺にお任せを。なに、犠牲になるのは異界の者にございます。元よりこの世界の人ではありません。そんな者を殺(あや)めたところで罪にはなりませぬ。それとも、護るべき多くの民を見捨て、何の関係もない一つの命を優先されますかな？」

メフィラの言葉が猛毒となって、ゼルビスの心を揺さぶる。そうだ、異界の者など人ではない。己が護るべきは自国の民だと。それはまさに悪魔の囁きであった。そして、王たるゼルビスがその声に耳を傾けるのに、そう時間はかからなかった。

「全て爺に任せる。よきにはからえ」

「ありがたき幸せ。このメフィラ、身命を尽くして事を成し遂げましょう！」

そして、決定的な一言が王からとうとう放たれた。それを満面の笑みで受託する老魔術師。救いのない物語の幕が上がることが決定した瞬間であった。

生贄（後書き）

気分転換と書きましたが、こっちはこっちで真剣に書くつもりなのでよければ読んでやってください。感想・批判・意見、どれでもご遠慮なくお願いします。

捧げられる魂

不吉なタロットを捨てようとした男は、その瞬間にどこかに飛ばされた。男の目には、見慣れた駅のホームではなく、石畳がひかれた宮殿いや神殿が映ったのだった。

「なっ！どこだここ？」

慌てて周囲を見回す男であったが、次の瞬間、その意識は途切れることとなった。まるで、電化製品の電源を切った時のように唐突に男はそのままの姿勢で動きを止めたのだった。目も開けたまま、虚ろな表情でかなり気持ちが悪い。

「ふう、流石は別格の『＜？？＞　死神』といったところか？まだ、成り立てだろうに、俺の『＜？＞　皇帝』の支配の力が浸透するのに、若干の時間がかかったぜ」

その彫像のように固まった男の姿を見ながら、『＜？＞　皇帝』のカードを持つ青年は嘆息した。

「成り立てとはいえ、異界より選りすぐられた適格者じゃ。多少なりとも、『＜？？＞　死神』の力を身内に取り入れてたとしても不思議はないわい。まあ完全に適応しておったなら、主の支配はそもそも効力を発していなかったはずじゃ。とにもかくにも第一段階はうまくいった。次へ行くぞ、クリューク！」

そう言って、取りあえずの成功に胸を撫で下ろしたのはメフィラであった。彼は、主君であり息子同然のゼルビスの為に、その全霊をもって召喚の儀をなしたところであった。そのせいか、心なしか

顔色が悪い。まあ、儀式の前に姫の死を直接的に知る者達の記憶操作まで行っていたのだから、その顔色の悪さは無理もないかもしれない。いや、むしろ一般の魔術師からすれば、その程度で済んでいる事の方が異常であった。流石は神の力を宿すという『神創のタロット』というべきだろうか。

しかし、この場で驚くべきはもっと他にあった。それは『神創のタロット』の持ち主が異界から召喚された男を含めて、この場には4人もいるのだから。『＜？？＞　死神』の男と『＜？＞　魔術師』のメフィラ以外の所持者は、一人は気の強そうな自信に満ち溢れた生まれのよさからくる傲慢さを宿した顔立ちの身なりのいい『＜？＞　皇帝』の青年である。今一人は、クリュークと呼ばれた『＜？＞　運命の輪』の少年で、気の弱そうな穏やかな顔立ちで、それでいて身なりもみすぼらしかった。並外れた魔導器であり、自ら所持者を選ぶといわれる『神創のタロット』が一箇所にこれだけ集まるというのは、作られて以来、初めてだと言っていい椿事（ちんじ）であった。

「分かっています。ですが、本当にこんなことが許されるんでしょうか？何の罪もない人を生贄にするなんて…」

この蘇生の儀式において重要な役割を負う茶髪の『＜？＞　運命の輪』の少年は、未だ迷いを拭（ぬぐ）えないでいた。

「今更何言ってるんだよ、クリューク。お前だって、納得して引き受けたはずだろ？お前は金の為に、俺は名誉の為に、爺さんは王の為に。今更、善人ぶって、迷ってるんじゃねえよ」

その迷いを乱暴にも一蹴するのは、輝くような金髪を持つ『＜？＞　皇帝』の青年であった。だが、彼の言う事は正しい。すでにクリュークはこの儀式に協力することで得られる報酬の一部を受け取

ってしまっているのだ。今更、拒否は許されない。

「よさぬかライザー。クリュークの迷いは当然のものだ。わしとて心が痛まぬわけではない。
しかし、クリュークよ。分かってはくれぬか？これはこの国が存続する為に必要な事なのじゃ。そして、ひいてはお前の弟妹達の為なのじゃ。辛いとは思うが、協力しておくれ」

メフィラはライザーを窘(たしな)めながらも、クリュークに痛ましい顔をしながら、穏やかに協力を求める。それでいてクリュークの急所をついて、拒否をさせないようにしているのだから、この老人中々に業が深い。

「そうですね、国の為、そして何より弟や妹の為に！僕はやるしかないんだ！」

メフィラの言葉に、すでに受け取った報酬（充分な食事と安全な住居）を思い出し、そして彼にとって何よりも大切な弟妹達の顔を思い浮かべ、迷いを振り切るように叫ぶ。

「うむ、そうじゃ。お前達家族の為にものう。では、始めよ。そやつの時を姫様と同じ１０歳まで戻すのじゃ」

クリュークの叫びにメフィラは満足そうに頷き、念押しの一言を加えると共に、やるべきことを指示する。

「分かりました、メフィラ様。では、やります。運命を司る女神『アーライナ』よ、我が時と引き換えにこの者の時をあるべき時になせ！」

クリュークが『＜？＞　運命の輪』を掲げ叫ぶ。カードがまばゆい光を放つと共に、クリュークと男を包み込んでいく。そして、一瞬の後に光が晴れると、そこには劇的な変化が訪れていた。まず、男の方は２０代後半でどこからどうみても成人男性だったはずなのに、黒髪黒瞳こそ変わっていないが、そこにいたのは明らかに少年であった。そして、クリュークも髪が伸び、身長も高くなっている。

「ふむ、成功したようじゃの。流石は『＜？＞　運命の輪』、見事なものじゃて」

「半信半疑だったが、凄いもんだな。あのおっさんがただの子供になっちまったよ…」

感嘆するメフィラとライザー。

二人が感嘆した現象こそが運命を司る女神『アーライナ』の力を宿す『＜？＞　運命の輪』を用いて、クリュークが使える能力であった。すなわち、時間操作である。生物・無生物を問わず、彼は万物を老いさせ、また若返らせることができるのだった。但し、代償は彼自身の時間である。操作した時間の十分の一の時間を奪われるのである。老いさせれば若返り、若返らせれば老いることとなる。これだけ聞くと、何回でも使えそうな便利な能力に思えるが、真実支払っているのは、「使用者の生きている時間＝寿命」である。要するに、使えば使うだけ死に近づくのである。外見をいかに戻そうと失われた時間は戻らないのである。このことをクリュークやライザーはしらない。メフィラは知っていたが、あえて教えていなかった。

「はあはあ、これで僕の役割は終わりですよね。すいませんが、休ませてもらいます」

そう言って、すぐ側に用意された寝台に突っ伏すクリューク。その能力の行使は余程疲れるようである。非常に強力な能力であるから無理もないかもしれないが。

「うむ、ご苦労じゃった。ゆっくり休むがいい。目覚める頃には、全ておわっているじゃろうて。
さて、待たせたのうライザー。お前の出番じゃ。今こそ、その支配の力で蘇生をこやつに使わせるのじゃ！」

メフィラは優しげにそれを許すと、一変して興奮したようにライザーに最後の役目を果すように命じる。

「分かっているさ、爺さん。だが、最後にもう一度だけ確認させてもらうぜ。これが終われば、俺の家の名誉を回復し、貴族として復興を許してくれるんだな？」

「うむ、嘘はいわぬ。それどころか元の伯爵ではなく、侯爵にしてやろう。じゃが、あくまでも蘇生がうまくいけばの話じゃ」

ライザーの最終確認に、真摯な表情で頷くメフィラ。今更、ここで降りられては何もならないので、ダメ押しとして与える報酬を吊り上げておく。大体、『天恵』が蘇らなければ、報酬もくそもない。『天恵』なしでは、この国は明日にでも崩壊するのだから…。ゆえに、元貴族だった平民を貴族に戻し、その地位を伯爵から侯爵にするぐらいなんでもないことなのだった。さらに言うなら、ライザー、クリューク共に『神創のタロット』の所持者であり、重要な駒であった。メフィラは蘇生の秘密を知っている彼らを逃がすつもりなどないし、これからもアルクレイアの為にその能力を使うつもりであったから尚更である。報酬はしっかりと両者に支払うつもりであっ

た。

ちなみにクリュークは孤児院の出身であり、そこの最年長者であった。孤児院の院長が急死し、大勢の弟妹を抱え食うにも困っていたときに、彼は『＜？＞　運命の輪』を手に入れ、それを用いて捨てられた生ゴミの時間操作して食料を得たり、壊れてうち捨てられた物を時間操作してそれを売り払って金を稼ぐなどしていたところを、メフィラに見出されて拾われた。彼への報酬は、言わずもがな。彼の住む孤児院の衣食住の保証である。これはすでに実施されており、半分は支払い済みといってもいいだろう。後はこれからの継続的な支援が報酬となる。

そして、ライザーは元々この国の貴族、それも『天恵』を輩出したことすらある伯爵の家系の生まれであったが、彼の祖父の代（天恵が一人しか生まれなくなった頃）で『天恵』の恩恵を受けることができなくなり没落した挙句、生活に困窮し、最終的に貴族位を金で裕福な商人であった娘婿に売り渡してしまったのだ。おかげで、彼と彼の父は生活にこそ困らなかったが、継ぐべき爵位を失い、名誉と誇りを金で売った恥知らずとして、白い眼でみられることになったのだった。それゆえにか、物質的には満たされても、精神的に満たされる事がなかった彼は、常に他者の上位であることを望んだ。支配欲というべきそれが極まったのは、爵位を継いだ伯父の息子に見下されて、貴族と平民の差ゆえに一方的に殴られた事であった。その際に彼は、『＜？＞　皇帝』を手に入れた。その支配の力で自分を馬鹿にした伯父一家を屈服させ、衆人環視の中で伏礼させた。その噂を聞きつけたメフィラに見出される事となった。ゆえに彼への報酬は、爵位の回復であった。

「侯爵…俺が？……はは、あははは！最高だ！最高だよ、爺さん。このカードを手に入れてからは、いい事ばっかりだな。よし、じゃ

あやるぜ！」

半ば信じられない様子で呆然と呟くライザー。そして、それは幾ばくかの時をおいて歓喜の叫びへと変わった。それを内心で冷ややかに見つめながら、メフィラは実行を促す。

「うむ、その為にも役目を果すがよい。さあ！」

「俺の命令に従え、下僕！お前の『＜？？＞　死神』に命を捧げ、ラナリス姫を完全な形で蘇生させろ！」

ライザーから命令が発せられるとと同時に、『＜？＞　皇帝』が光り輝く。

彼が至聖神『エルディアード』の力が宿る『＜？＞　皇帝』を用いて使用できるのは支配の力。彼を中心に半径１０メートル以内の視認したもの（本来生物・無生物を問わないが、彼自身の思い込みによって生物にしか通用しない）を支配することできる。強力無比の能力に見えるが、基本的にカードの所持者には効果がない。正確には、ある程度の効果はあるが、完全に支配することはできないし、熟練した者（メフィラなど）には効果がない。男に効いたのは、男がカードの所持者になって１０秒とたっていなかったからだ。カードは時を経るほど、使用すればするほど所持者に馴染むのだ。彼自身は代償がないと思っているが、実際には存在し、支配した数・時間の百分の一（ライザーはクリュークよりカードとの親和性が高い為、彼より代償が軽い）彼に向けられる感情を失う。最終的には、全ての情を失い、他者から何とも思われなくなり、己の感情すら失う。この代償についてもメフィラは知っていたが、あえて秘している。

ライザーの言葉に従い、男は目の前の寝台に安置されているラナ

リスの遺体の胸に片手をおき、もう一方の手に持っていた『＜？？＞　死神』を自身の胸に当てる。そして、機械的にたどたどしく言葉を紡ぐ。

「ワガ魂をサ捧げ、このモノノタ魂を呼びモドサン」

その言葉が終わると共に『＜？？＞　死神』は光り輝いた。次の瞬間、男は夜よりも暗き闇に包まれ、ラナリスの遺体は光輝に包まれた。そして、その闇と光が晴れた瞬間、男は倒れ臥した。それを確認したメフィラは、急いでラナリスの遺体を確認する。そこには遺体はなかった。いや、遺体ではなくなっていた。血の気を失って蒼白だった肌は、赤みを帯び生の色彩を取り戻していた。触れれば死後硬直による硬さと冷たさはなく、少女特有の肌の艶と体温が感じられる。そして、顔の方に目をやれば、胸はかすかに上下に動いており、呼吸していることが認められ、穏やかな寝息が聞えさせする。すなわち、少女は蘇ったのだ！

これこそが男が持つ生と死を司る闇の大神『ルナフィア』の力を宿す『＜？？＞　死神』の能力…といいたいところだが、男が使用したのは、彼がそれを用いて使える本来の能力ではない。いわゆる裏能力といわれる所持者なら、誰でも使う事のできる裏技的な能力であった。それは完全なる蘇生術である。『一つを捧げ、一つを戻さん』が原則であり、一人を生き返すなら、一人を犠牲にしなければならない。ここで重要なのは一人であって、術者である必要はないということである。ゼルビスに対し、メフィラはさも術者が命を捧げなければならいかのように語ったが、真っ赤な嘘であった。正確には同じ年齢の者であれば、誰でもよかったのである。

だが、メフィラはあえてその事実をゼルビスに秘した。なぜなら、ゼルビスが問うたように『＜？？＞　死神』の所持者が協力的であ

るとは限らないし、協力的であったとしても、秘密を知る者が増えるのは好ましくないからだ。蘇生を禁忌（きんき）とする者が少なからずいる以上、王族にして『天恵』たるラナリスが一度死に蘇生したことは、絶対に公にされるわけにはいかないのだ。そういう意味で秘密を知る者を増やさず、生贄となる者を用意しなくていい『術者に魂を捧げさせる』という案は、一石二鳥の良案であった。幸いにも、生贄としての年齢の問題は『＜？＞　運命の輪』が、『＜？？＞　死神』をどうやって行使させるかの問題は『＜？＞　皇帝』が解決できた。

さらに、『＜？？＞　死神』は別格のカードであったからである。彼が知りえた能力だけでも、十分過ぎるほど脅威であり、『＜？＞　魔術師』『＜？＞　皇帝』『＜？＞　運命の輪』では、対抗できるかすら怪しい。せめて、『＜？＞　戦車』『＜？＞　力』等の戦闘に特化したカードや同じく別格のカードの所持者がいれば、話は別だったが、現状では手駒にするには危険すぎたのだった。

「ふはは、やったやったぞ！ゼルビス様、爺はやり遂げましたぞ！今、朗報をお持ちしますからな！」

満足するだけ、ラナリスの生存を確かめたメフィラは、今にも駆け出しそうに喜色満面で叫んだ。

「待てよ、爺さん。俺達の報酬はどうするんだよ？生き返ったから、もう用はないし、もう知らんじゃ困るぜ」

そんなメフィラに水をさしたのは、ライザーであった。彼の顔には報酬をなかったことにされるのではないかという疑念と警戒が浮かんでいた。

「安心せよ、報酬はきっちり支払う。大体、お前の報酬は王にお頼みせねばならぬものだ。今すぐと言うのは不可能よ。お前達には、

この国の為にこれからも働いてもらわねばならぬし、約束を反故にしたりはせぬよ」

せっかくの歓喜の感情に水をさされ、些か気分を害したメフィラであったが、彼はそこで怒る程子供ではなかった。むしろ、ライザーとクリュークの重要性を考えて、優しい声で真摯(しんし)に答えて見せたのだった。

「そうか、それならいい。俺もなぜだか知らないが普段より疲れた。悪いが休ませても…ら…う…ｚｚｚ」

メフィラの態度に嘘はないと思ったのか、ライザーは脱力し、クリュークの横に倒れ臥すように眠りについた。普段、彼が支配を使用してもこんなことはないのだが、やはりカードの所持者に力を使うのはそれだけ負担がかかるのかもしれないと、メフィラは要注意事項として、心中に記した。

「さあ、早くゼルビス様を呼んでこなければ！きっと大喜びされるに違いない！」

メフィラは再び喜色満面に笑みを浮かべると、息子同然の主君が喜ぶ顔を想像しながら、王の私室へと急いだ。彼は、ラナリスの為に魂を捧げた男のことなど気にも留めなかった。死んでいるかすら確かめず、放置したままであった。あるいは彼がここで、男を丁重に弔(とむら)っていたら話は変わったかもしれない。

しかし、現実にはメフィラは遺体を確認せず、簡易にすら弔うことせず、放置した。結果、彼が王を連れて戻ってきた頃に地下神殿には、未だ眠りから目を覚まさない姫と『＜？＞　皇帝』の青年と『＜？＞　運命の輪』の少年が眠りこけているだけであった。犠牲

となった男は、遺体ごと消失していたのだった。ただ一つ残されたのは、死神が描かれていたであろう白紙のカード一枚だけだった。

捧げられる魂（後書き）

次でようやく主人公の出番となります。５話くらいまではこっちを書くつもりです。それ以降は、二次創作の方を優先して書きます。感想・批判・意見、なんでも遠慮なくお願いします。

意図せぬ不本意な達成

「よくぞ来た、我が子よ」

死んだはずの男の意識が覚醒(かくせい)したのは、そんな一声がきっかけだった。その声は力強さを感じさせながら、涼やかで穏やかな響を持っていた。男はその声に導かれるように覚醒し、そして見た。夜の闇より暗い何かを身に纏(まと)い、目前の虚空に悠然と佇(たたず)むなにかを。

それは絶世の美女でありながら、人ではない何かだった。大体にして、なんの支えもなく虚空に座るように存在しているのだから、その時点で人ではない。だが、男が人ではないと判断したのは、その存在の大きさゆえだった。身長的には、１７５ｃｍの自分とさして変らないはずだというのに、まるで雄大な自然（大海や山脈など）が広がっているかのように感じられるのだ。それが細身の美女に集約されているのだから、その言葉の意味も問う事はできず、男はただただ圧倒されるほかなかった。

「ふふふ、そう怯える事はない我が子よ。お前は最早人のくびきを解き放たれた、最も我に近い者だ。確かに、本来であれば私を直視することなど無礼極まりない事ではあるが、お前は別だ。ふむ、といっても成り立てでは、我の威は辛いか…。許す、力を抜いて楽にするがよい」

男の様子に楽しそうに笑うと、美女の姿をとったなにかは、男を許した。それだけのことであったにも関わらず、男は感じていた圧迫感が急速に減退するのを感じた。

「あんた、いや貴女様は何者ですか？俺、いえ私は神など信じた事

もございませんが、御身はもしや神でいらっしゃいますか？そして許されるなら、御身の言葉の意味をお教え願えるでしょうか？」

ようやく言葉を発するだけの余裕ができた男は、なにかの正体と言葉の意味を問うた。自然と言葉は敬語にしていた。もし男に肉体があったなら、姿勢を正し態度も丁重なものへと変化していただろう。男は墓参りや神社に参拝こそすれ、生粋の無神論者であった。しかし、そんな男ですら、もし神というものが存在するならば、目の前にいる者こそそれにあたるのではないかと思わざるをえない程に、目の前の存在は圧倒的であった。

「然り、我は人が神と呼び崇(あが)める存在よ。この世界メームリージを創生せし片割れだ。…確か、人は我を生と死を司る存在として、闇の大神『ルナフィア』と呼んでいたな」

なにかは神であることを当然の如く肯定した。そして、思い出すかのように、その名を告げる。しかし、男にはもっと気にかかることがあった。

「（この世界を作った？メームリージ？闇の大神『ルナフィア』？聞いたことがない…。）
失礼ですが、御身は地球という言葉、日本という国をご存知ですか？」

男は生来の読書好きもあって、メジャーな神話についてはそれなりに知っている。にもかかわらず、どれだけ記憶を紐解いても、覚えのない世界、神の名であった。しかも、神が世界を創造したと言っている。そんな御伽噺は、とうの昔に科学的に否定されるというのに。だが、目の前の存在が言う以上、嘘ではないような気がする。というか、それぐらいやってのけそうな感じがするのだ。とてつも

なく嫌な予感に襲われた男は、一縷(いちる)の望みをかけて尋ねた。己の故国と世界（星）の名を。

「ああ、知っているとも」

気分を害することなく、ルナフィアはこたえる。男はその答に胸を撫で下ろした。たまたま、己が知らないような神だったのだと。どこかは分からないが、言葉通じる以上、己は地球の日本にいるのだと。その安心を続く言葉が木っ端微塵(みじん)に粉砕(ふんさい)した。

「このメームリージと隣り合う世界、裏と表の関係にある神なき世界、地球。そして、日本とは我が子よ、お前の故国のことであろう」

あろうことか、ここが異世界であるとルナフィアは告げたのだ。当然男は慌て狼狽(ろうばい)した。

「お、お待ちください。ここは私の生まれ育った地ではないというのですか?!それどころか、世界すら異なるとおっしゃられるのですか?」

「そうだ」

そんな男の様子にも限らず、ルナフィアは短く確信のある声で答える。男には、その言葉に嘘はないように感じられた。しかし、それでも男は恥も外聞も投げ捨てて、一縷の望みに縋(すが)った。いや、そうするほかなかった。

「国どころか世界すら異なるというのなら、なぜ、言葉が通じるのですか?御身は私を謀っており、やはりここは日本なのではないのですか?」

「我がお前を謀って何の利益を得るというのだ、愚か者め。我にあらぬ疑いをかけし非礼、お前が我が子でなければ、本来なら八つ裂きにしているところだぞ！」

だが、その疑いはルナフィアの怒りをかった。たちまちに先刻感じた圧迫感が復活し、そしてそれ以上の不可視の圧力が男を襲う。その凄まじさは、命はおろか存在すら抹消されかねないものであった。

「まあ、よい。我は久方ぶりに気分がよい。特別に許してやるし、お前の疑問にも答えよう。
言葉が通じるのは、何も不思議なことはない。お前は我が子であるし、何よりも今のお前は魂のみの存在であるからな。肉体による言語の縛りなど存在せぬよ」

ルナフィアが怒りを収め、再び圧迫感から解放されて、徹は脱力した。その意識は受けた圧力によって朦朧（もうろう）としていたが、それを吹き飛ばすかのような衝撃を伴った言葉を男は聞くことになった。

すなわち、今の男が肉体を持たぬ魂だけの存在である事に気づかされたのである。そもそも、本来ならば、もっと早く気づくべきであったのだ。虚空に存在するルナファイアと対峙している以上、己も虚空に存在しているということだ。どうやって、己が虚空に留まっているか気づくべきだったのだ。そして、己に肉体がないことに。もっとも、ルナフィアの存在感に圧倒されて、男には現状把握が精一杯で、己のことに気を回す余裕がなかったのだから、今の今まで気づかなかったことで男を責めるのは酷かもしれないが…。

「なっ！こ、これは……俺は、俺は死んだのか？」

己の状態をようやく認識し、絶句する。肉体すら存在しないというあまりの衝撃に、敬語を使うことすら、忘れて問う。

「何をいっておる？そんなこと当然であろう。お前は、我があのカード、お前の世界ではタロットカードというのだっか？に宿した力を使い、自らの魂を捧げる事で、一人の人間の魂を呼び戻し蘇らしたのではないか」

「なんだよ、それ？！そんなの俺は知らない！」

全く記憶のないことを言われ、男は驚愕と共にそれを否定する。

「ふむ、知らぬとな。これは異なことを言う。あれは所持者しか使えぬもの。ましてや、我のタロットは数あるタロットの中でも別格中の別格。外部からの操作など、到底不可能のはず。だが、お前の様子を見る限り、嘘とも思えぬ」

知らぬはずのない事を知らぬという男にルナフィアは疑問を覚える。大体、魂だけの存在である男は、嘘偽りを申せば、それが魂に色となって現れる。他の神ならまだしも、生と死を司り、魂の管理者たる彼女がそれを見誤るはずがないのだから、男は嘘を言っていない。

「ふむ、お前の肉体年齢と魂が経た年月に差があることは、その記憶の欠落に原因があるのやもしれんな。どれ…」

ルナフィアは少し考え込むと、虚空に手を一振りした。次の瞬間に１０歳前後であろう少年の肉体が、虚空に現れたのであった。

「なっ！こ、これが俺の肉体？」

驚愕の連続で、最早どれだけ驚かされるたのか分からない男であったが、ある事実に今まで以上の衝撃を受けざるをえなかった。

「そうだ。しかし、その様子だと、やはりお前の認識する肉体と齟齬があるようだな」

男の驚愕の様を見て納得するように頷くルナフィア。

「あ、ああ。俺はこれでも２０代後半のいい大人だったんだ。身長も１７０を超えるし、がっちりした体型だった。間違っても、こんなひょろっちくない。あれじゃあ、まるで１０歳の頃の俺みたいだ…」

確かに顔に面影はあったが、それがとても己の肉体とは男には思えなかった。中学に入り、身長が急速に伸び、病気がちだった体も頑丈になった男にとって、イジメすら受けていた幼少の頃の小さく痩せて少年の様は思い出したくもないものだったからである。

だが、一方で男はその少年が自分である事を認めざるをえなかった。肉体各所に見受けられる縫合痕は、怪我も多かった男の証拠であったし、その位置は記憶にあるものと完全に一致したからだ。記憶と齟齬があるところといえば、１０歳以降の怪我のものが見受けられないくらいであった。

「ふむ、１０年以上の差異とは普通では考えられぬな。少し調べてみるとするか」

男の言葉をきき、調査の必要性を感じたルナフィアは、少年の肉

体の顔隠すように手で触れた。

「どうするんだ？」

「なに、簡単なことだ。魂が何らかの原因で記憶をもっておらぬなら、一部始終を見聞きしていたであろう肉体に聞けばよい。このようにな…」

男の疑問に答えながら、ルナフィアは少年にあてた手に力をこめる。すると、その手から生じた闇の粒子のようなものが、少年の肉体を瞬く間に覆いつくし、一瞬後に再び手の中に戻っていく。

「なんと、そういうことか。道理であの条件が達成されたわけだ…。しかし、ふざけた事を。大体、あのタロットが何の為にあそこにあったことを分かっておるのか？愚か者共めが、目先の利益に囚われ、大いなる災いを…「おいっ！」…」

一人納得するように呟くルナフィア。真実を知りたいが為に、邪魔をしたらまずいと黙っていた男であったが、終わらぬ独白に痺れをきらし、声を上げた。

「一人で納得していないで、俺にも説明してくれよ。一体何がどうしたっていうんだ？！」

「おお、すまぬ。許せよ、我も些か想定外であったがゆえにな。しかし、このような裏があったとは…。お前にはすまぬことをしたかもしれぬ。いや、今更言ったところで詮無いことか。我が説明するよりは、真実は己が目で確かめるがよい」

ルナフィアは一瞬痛ましい表情をするが、それを振り切るように

男に向けて手を差し伸べた。そして、再び放たれる闇の粒子。それは瞬く間に男の魂を覆い、男に真実を見せつける。

記憶にある神殿、寝かされた金髪の少女、魔術師らしき老人とそれに従う茶髪の少年と金髪の青年。交わされた言葉。そして、行われた蘇生の儀式。魔術師に促され、男を少年へと変える茶髪の少年、さらに金髪の青年のいうままに、己の魂を捧げる男。そこで、映像も音も途切れた。

「なんだ、これは…。なんなんだよ、これは！」

「お前の死の真実、お前の死の理由。お前は望まぬまま魂を捧げ、あの少女の魂を呼び戻したのだ」

あまりの事に喚き散らす男に、ルナフィアは淡々と事実を語る。

「なんだよ、それ？俺はどこの誰とも知らない赤の他人の為に命を捨てたっていうのかよ？！」

「そうだ。そして、お前がここにいる理由でもある」

「なんだと、どういう意味だ？」

「お前が所持者として選ばれた『神創のタロット』はな、それぞれ描かれたものに対応した神の力を宿している。お前の持っていた『＜？？？＞　死神』もその一つであり、私の力を宿していたわけだ」

「それがなんだっていうんだ？」

「話は最後まで聞け。そもそも、『神創のタロット』は神使を作り

出す為に作られたものなのだ。我々神々は、基本的に下界への手出しを禁じられている。だが、その当時、人の力では到底対抗しえない世界を破壊せんとする脅威が存在したのだ。ゆえに、我々は正邪の関係なく協力し、『神創のタロット』を作り上げた。直接的に神使を生み出せば、大きく力を減じるし、生み出された神使も世界より大きな制限を受けるからな。そこで神々の力を扱える者を自動的に選び出し、間接的に神使を作り出すことで、世界の制限を受けず力を振るえるようにしたのだ。しかし、結果的に言えば失敗であった。」

「なんでだよ？それがうまくいけば脅威を排除できたんだろ？」

「脅威の排除自体は問題なくうまくいった。問題なのは、それをなしたのがタロットによって神使となったものではなく、タロットの所有者であったということだ」

「うん？いまいち意味がわからないんだが？神使じゃなくて所有者？タロットの所有者＝神使じゃないのか？」

「そのとおりだ。タロットの所有者に成りえたからといって、神使となりえるとは限らん。当然であろう。神使となれば、絶大な力を発揮できるのだから。我々は当然、それぞれのタロットに神使になる為の試練・条件を課した。
しかし、今日に至るまで誰一人として、その試練・条件を達成した者はおらなんだ」

「なんでだよ？そんなに難解で、厳しい試練・条件だったのか？」

「無論、それがないとは言えぬ。しかし、本当の理由はそこにはない。タロットの所有者が神使とならなかったのは、その必要がなか

ったからに他ならん」

「はい？」

「我々はタロットに力を篭め過ぎたのだ。要するに、神使にならずとも十分過ぎる力を所有者は振るえたのだ。よく考えれば、ただの人を神使へと変える程の力を宿すのだ。当然といえば当然であろうな」

自嘲するように語り、一旦言葉をきるルナフィア。その顔には幾分かの疲れがかいま見えた。

「脅威を排除してからは酷いものだった。その絶大な力を用いて、タロットの所有者は争いを始めたのだ。人の身には過ぎる力に酔った彼らは、その命が尽きるまで世界に破壊と死を撒き散らした。それは排除した脅威よりはましであったが、それでも多くの血が流れ、世界が傷ついたことは間違いない。

我々は神々の世界への介入がこれを招いたのだと反省し、『神創のタロット』を滅することにした。しかし、うまくいかなんだ。邪神どもは己の力を間接的にとはいえ、振るえる媒体であるタロットを失いたくなかったのだ。それに加え、一概にタロットの所有者と言っても、千差万別でな。正しい目的の為に用いている者も、少数ながらいたのだ。ゆえに、そういったタロットに力を宿す神々も、反対に回ったのだ。

そして、とうとう神々同士の争いとなってしまいそうになった。流石に見過ごせなんだ我と片割れは、神使とならずにタロットに宿る神の力を使う者には、相応の代償を求めることにして、争う神々を納得させたのだ。お前が使った我の蘇生術に、生き返らせようとする者と同年齢の肉体を持つ魂を捧げねばならんようにな」

「…なるほどな。タロットが作られた理由と今に至るまでの経緯と変遷は理解した。だけど、それがなんで俺がここにいることと関係してくるんだ？」

ルナフィアの長い語りを聞き終えた男は理解を示しながら、疑問を呈する。肝心の己がここにいる理由について。

「なに簡単なことだ。言ったであろう？今日に至るまで誰一人として、その試練・条件を達成した者はおらなんだと」

「…過去形？まさか！」

先程の言を繰り返すルナフィア。その言い方に何か不吉なものを感じながら、唐突に男は思い至った。我が子というルナフィアの言もそれならば納得がいってしまう。

「そうだ、我が子よ。お前こそ、我が課した試練を初めて達成し、『神創のタロット』によって、初めて神使となった者だ」

男の心中を見透かしたように、ルナフィアが男にとって最悪の答を告げる。死して尚、得体の知れない者にされる恐怖を男は感じていたのだ。

「ま、待ってくれよ！俺がいつ試練なんてやったんだよ？！それとも、この世界に来る前に達成したとでもいうのかよ？」

慌てふためく男。どうにか否定しようと言葉を連ねるが、ルナフィアの答はにべもなかった。

「安心せよ、あくまでもタロットを拾ってからの行動だ。そして、

お前は確かに試練、いや条件を達成しているのだ」

「な、なんだよ！その条件って？」

悲痛な叫びをもって問う男に、ルナフィアはダメ押しの答を与える。

「我が、我が神使となる条件として課したのは、『縁も所縁（ゆかり）もない赤の他人を自らの魂を捧げて、蘇生させること』だ。いやはや、絶対に達成されることはないと考えて作った条件だったのだがな。まさか、こんな形で達成されることになろうとは夢にも思わなんだぞ」

そう言って、愉快そうに笑うルナフィアと対照的にテンションだだ下がりな男。しかし、男はまだ諦めていなかった。

「ま、待ってくれよ。俺は操られてそれをなしたんだ。自分の意思じゃない。それじゃあ、やっぱり駄目だろ？」

「安心せよ、そんな狭量なことはいわぬ。元より達成できる者などいないと考えていたからな。本人の意思はどうあれ結果的に成した以上、十分に資格はある。それに…」

「（狭量でいいんだけどな…）それに？」

「…もう遅い」

その言葉と共に男の少年時代に戻された肉体が闇の粒子に再び覆われる。いや、覆われるどころの話ではない吸収していく。その量は次第に増え、最終的には凄まじい奔流（ほんりゅう）となって体全体を呑み込んで行く。

「こ、これは…」

男の呆然とした呟きに、ルナフィアが答える。

「肉体が神使のものへと作りかえられているのだ。実のところ、お前がここに来た時点ですでにそれは始まっていたのだ。お前が、魂を捧げた時点で条件は満たされていたからな。その瞬間にタロットに篭められていた我の力は、全てお前の肉体と魂に流れ込んでいたのだ。

大体、ただの人の魂が我と言葉をかわせるはずがあるまい。普通の魂であれば、我の姿を見る事すら叶わぬわ。それに最初こそ敬語であったが、今のお前は普通に話しているのがその証左だ。驚愕で我を忘れたこともあろうが、その実、お前自身の魂の格が上がり、我が神威に対抗できるようになったからこそだ」

言われてみれば、すっかり敬語を忘れていることはもちろん、弱まったとはいえ感じていた強大な圧迫感を今は感じない。男はその事実に愕然とした。いつの間に、己が得体の知れない者に変えられていたのかと…。

「そう、怯えることはない。我が神使だからといって、我はお前に何かを強制してやらせようと言うわけではない。多少の仕事は頼むかもしれぬが、それとて強制はせぬ。なにせ、お前には世界からの制限はなく、我が直接生み出した神使でもないからな。

むしろ、お前にとってはいい話だと思うぞ。かつてとは比べものにはならぬ力を手に入れて、再生するのだから。お前に死を強制した者達に復讐することも容易だぞ」

ルナフィアは男に優しげに語る。その表情は子を見守る母の顔で

あった。

「…元の世界には戻れないのか？」

復讐より何より、生き返られるのなら男は元の世界に戻りたかった。恋人は生憎と今はいなかったが、大切な親兄弟、親友があちらにはいるのだから。

「残念ながら、それは不可能だ。隣り合う表裏の世界とはいえ、あちらへの扉を開ける者は神々でも極少数だし、仮に開けたとしても、お前の魂は我に捧げられた時点でこの世界に括られてしまっている。戻る事はできない。…すまぬな」

沈痛な表情で言うルナフィアに、流石に文句を言うことはできなかった。ここでルナフィアにあたったところで、それは八つ当たり以外のなんでもないことを理解していたからだ。それに本当に憎むべきは、あの４人であり、それを許したこの世界の人だ。

「いいよ、貴女のせいじゃない…。それより、今言った事は本当だな。本当に復讐していいんだな？」

「ああ、構わぬよ。忌まわしき力にそそのかされたとはいえ、あの国の人は驕(おご)りが過ぎた。果ては、本来の役目を忘れ、我が力を我欲の為に使うとは、最早許すことはできぬ。お前がやらねば、我が罰をくだしてやるところだ」

確認するように問う男に、遠慮なくやれと告げるルナフィア。それに男は満足そうに頷いた。

ルナフィアと話しているうちに肉体の作り変えは終わったのか、

闇の奔流は治まり、そこには１０歳の少年の肉体だったものがあった。その肉体は今や、ひょろっとした矮躯（わいく）ではなく、歳の割にはがっちりとして長身となっていた。そして、顔も基本は男のものであったが、美少年と言っていいレベルに色々変化していた。そんな様子に思わず男は言った。

「おいおい、いくらなんでも変わりすぎだろ？というか俺、こんな美形じゃなかったはずだが…」

精々、いいところで２．５枚目、まあ見栄を張らずに言えば平凡な顔立ちであった男からすれば、違和感ありまくりであった。

「我の神使が平凡な顔立ちというのは些か問題であろう。神使といえば美形というのが相場に決まっているのだ。原型はお前の顔だし、文句を言うな」

なんとも俗っぽいことを言われ、微妙な気分になる男。そりゃ確かに平凡な顔だったかもしれないが、他人から言われるのは腹が立つものである。

「平凡言うな！あれはあれで味のある顔だったんだよ！」

「ほう、ものはいいようだな。お前とて、内心では平凡と認めとるくせに文句を言うな」

「あっ、てめえ。もしやとは思ってたが、心読みやがったな！」

「当然だろう。そのくらい容易い事だ。我を誰だと思っている？」

「はいはい、偉大なるルナフィア様でしたね…」

ふてくされた様子で言う男に、ルナフィアは少し考えると口を開いた。

「ふむ、我が子よ。せっかくだから、我に名をくれないか？ルナフィアは、この世界の人がつけし呼び名。お前が憎悪する者から、つけられた名で呼ばれるのは嬉しくないからな」

この突然の要求に男は困った。

「おいおい、そんな簡単に名を変えていいのかよ。大体、名前をつけるって神々に限らずかなり凄いことだろ？」

男の心配は当然のものであった。名付け親は、現代においてはそれ程の影響力はもたないが、かつては相応の影響力を名づけた者に持っていたからだ。この世界において、神に名をつけることがどんな影響を及ぼすか知れたものではない。

「安心するがいい。別に我の本質の名が変化するわけではない。ルナフィアとて、我にとってはお前で言う渾名のようなものだ。我と我が子といっていい神使であるお前との絆として、名を欲しただけに過ぎぬ。せいぜい、お前が己が持つ力以上に我の力を使おうとした時に役立つくらいの効果しかない」

「いや、それって結構凄いことだと思うんだが…まあ、いいか。う～ん……、じゃあ『華夜（かや）』で」

「ほう、どのような意味なのだ？」

思案に暮れた男が考えに考えた末、思いついた名を言う。その言

葉の意味を問うルナフィア。

「闇だから夜、そしてそこに咲き誇る華。それが貴女だ。だから華に夜で華夜さ」

「なるほど、良い名だ。これからは我をそう呼ぶがいい」

満足げに宣言するルナフィア改め、カヤ（↑登場人物の名前は基本的にカタカナ表記の為）。

「うん？そういや俺の名前を教えていなかった」

その様子を満足げに見つめていた男だったが、思い出したように言った。本当に今さらである。

「ああ、そんなことはとうの昔に知っているぞ」

が、カヤはご存知だったらしい。まあ、記憶探ったりしていたから当然かもしれない。

「いやいや、せっかくだから自己紹介させてくれよ。俺の名は、水無…いや、神無月　透だ」

それにもめげずに自己紹介する男。一旦言いかけた名を改めて言い直す。

「ほう、姓を改めたのか。なぜだ？」

カヤの当然の疑問に男改め、トオルは答えた。

「神無月とは、故国の１０月の出雲以外での古い呼び方だ。俺が飛ばされたのも１０月だったし、ちょうどいい。それに俺の世界には神はいないんだろう。だから、それを皮肉る意味、象徴する意味で神のいない月さ」

「…そうか」

それは皮肉気な表情で語られたが、カヤは実のところ、名前に飛ばされた月を含め、また自分は神のいない世界に属する者であるという意思表示であり、故郷を忘れないという郷愁と望郷の念が多分に含まれていることを感じ取っていたが、あえて何も言わなかった。彼女が何をいったところで慰めにはならないからだ。

「では、トオル＝カンナヅキよ。汝、我が神使となりて、魂の安寧（あんねい）と輪廻（りんね）の安定に尽くさんことを！」

生じた迷いを振り切るようにカヤが叫ぶと、虚空に漂っていたトオルの魂が準備の完了した肉体に宿る。

「うう、いきなりかよ。心の準備くらいさせてくれよ…おっととと」

突然肉体に宿らせられ、虚空に浮かぶ肉体の制御に四苦八苦するトオル。どうやら、虚空に留まる術はそんなに容易なものではないらしい。

「すぐ慣れる、というか慣れろ。弱音は聞かぬ。さて、裸のままは色々とまずいであろうからな。それと武器もサービスしておいてやろう」

容赦のないことを言いながら、何気に甘いカヤ。意外に親馬鹿な

のかもしれない。彼女が手を振ると同時に闇がトオルを覆い、一瞬後に晴れた。その時には、彼は漆黒の長衣に身を包み、右手には背丈を遥かに越える真紅の大鎌を持っていた。

「うわ、まんま死神だ」

自身の得物と格好を確かめて、ぼやくトオル。

「生と死を司る我の神使なのだ。死神が相応しかろうよ。それにその格好はお前の抱く死神のイメージを元に再現したものだ。なにせ、お前の考えるような死神はこの世界には存在しないのでな」

「あ、そうなんだ。へー（某少年誌の死神の方じゃなくてマジで良かった。ナイスだ、俺！）」

神の名からして西洋系の文化世界であろうこの世界において、さすがにあの時代劇の侍が着るような死白装は勘弁して欲しいと内心で思いながら、相槌をうつ。

ちなみに、トオルがそっちにならなかったのは、己の死の直前に死神のタロットを見たせいで、深く印象付けられ、西洋風の死神が頭にあったからである。もし、彼が絵柄を見ずに飛ばされていたら、毎週読んでいる少年誌の死神が再現されていたかもしれない。

「どちらも我が作った神器だ。まず壊れたりすることはない。万が一壊れても勝手に直るから安心しろ。さて、こんなものか」

「はっ、何が？」

トオルの様を見て満足げに頷くとカヤは用はすんだとばかりに踵（きびす）を返した。

「ではな、達者でやれよ我が子よ」

「えっ？！」

カヤの別れの言葉と共に足場のようなものがなくなることを感じるトオル。慣れてない彼が曲りなりとも虚空にいれたのは、彼女が補助していたからだったらしい。それがなくなった以上、当然彼は落ちた。

「ちょっ、待てや。心の準備をって。今更遅いか…、うおおおおこのクソババア！」

上空１０００メートル以上の高さから、フリーフォールする羽目になったトオルはサクヤに対する罵詈雑言（ばりぞうごん）を喚き散らしながら、真っ逆さまに墜ちて行く。

「あ、そんなことを言うこと言う子は、我は知らぬな」

墜落している真っ最中だというのに、なぜだかはっきりとカヤの涼やかな声が響く。

「ああ、ごめんなさい。神様、仏様、カヤ様。お願いですから助けて下さい！このままだと、生き返って早々に死んじゃいます！」

無神論者のくせにこういう時は都合よく神仏に祈るトオル。どこまでも典型的な日本人な男である。まあ、実際に神と会ったので、案外宗教観が変わったのかもしれないが。

「う～む、そこまで言うなら助けてやろう。我に多大な感謝を捧げ

るように（別にそれぐらいでは死なぬ、いや、死ねぬがな）」

「はい、心から感謝しますから何とかして下さい！」

心からの叫びにカヤが応じたのか、トオルの墜ちる速度は急速に減少した。

「よっしゃあ！助かった（できるなら最初からやれよ！）」

地上まで後１０メートル程で、歓喜の声を上げるトオルだったが、内心で文句をつけたのがまずかった。

足から下に落ちていたにも関わらず、突如上下逆になり、落下スピードが上がったのであった。完全に気を抜いていたトオルがこれに対応できるはずもなく、１０メートルの高さから地面へダイビングヘッドする羽目になった。

「…ゴフッ、あの性悪女神。また、心よみやがったな。イテテ、首の骨が折れていないのが奇跡だな」

結構洒落になってない勢いで突っ込んだにも関わらず首が痛むくらいで済んでいる辺り、神使の頑丈さは半端ではない。まあ、顔は土塗れの髪は葉っぱ塗れという、どう見ても神々しさは感じられない風体ではあったが…。

「何か言ったか？」

そんなトオルにまた再び虚空から、カヤの声が聞えてくる。

「いえ、なんでもありません！助けていただき心から感謝しております！」

思わず姿勢を正し、軍人のように気を付けしてしまう。１０００メートルのフリーフォールと１０メートルの高さからのダイビングヘッドは、かなり薬になったらしい。

「ふむ、いい態度だ。その態度に免じて、案内役をつけてやろう」

その言葉と共にトオルの前に夜の闇より暗い闇が生じ、そこから透明な羽をもった白銀の髪を持った女性（とはいっても人間にしては小さすぎる）が現れる。

「妖精？」

どこか信じられない心地で、それを見るトオル。

「名はお前がつけてやると良い。こやつを通して、我はお前に連絡をする。お前の神使としての能力や役割についても、こやつが知っているので説明を受けるがいい。では息災でな、我が子トオルよ」

言うだけ言うと声は去り、妖精と土と葉っぱ塗れのトオルだけが残される。二人はお互いに顔を合わせると苦笑した。ちなみに妖精の彼女の最初の仕事は、神使としての能力や役割の説明ではなく、精霊魔法でトオルの汚れを落とすことだったそうな。

意図せぬ不本意な達成（後書き）

今回はようやっと主人公の出番。そして、また改名ネタ。我ながら二番煎じなのは理解しているのですが、不思議とやりたくなってしまいます。主人公の元の名が二次創作の方と同じなのは、特に意味はありません。全く別の人物です。あちらは職人・技術者系、こちらはサラリーマン・セールスマン系です。

今回の主人公にはモデルがありまして、幼少の頃から大怪我ばかりしていたにも関わらず、絶対に大事には至らないという悪運の強い人物です。なんというか、本当に死神に憑かれているような人物で、本人の言うところによると縫った数は、全部あわせると１００針を超えるとか、トラックと正面衝突して、全身打撲にこそなったものの骨や内臓には全く異常がないとか、いろんな意味でありえない男でした。ちなみに小中と一緒でしたが、高校からは別なんで、もしかすると今ではもっと増えているかもしれません。ちなみに名前は一文字もかすってませんし、性格も全然違います。

死霊の森

「マスター、２時の方向から3体、続けて１０時の方向から４体です」

肩に乗った白銀の妖精ミユキの声に黙ったまま頷くことでトオルは応え、一方で真紅の鎌で目の前を漂う死霊達を薙ぎ払う。言うまでもなく、絶賛戦闘中であった。

こんなことになったのは、体の汚れを落としてもらい、トオルが妖精の白銀の髪から、雪を連想して、美しい雪で『美雪（みゆき）』と名前をつけ、改めてお互い自己紹介を済ませた直後であった。唐突に虚空より現れ、生者への恨みと妬（ねた）みを喚（わめ）き散らしながら、襲ってくる死霊の姿にトオルは驚き慌てふためきながらも、どうにか真紅の大鎌を呼び出し、戦闘態勢に移行する事に成功していた。

「というか下りてそうそうこれかよ！あの性悪女神、少しは考えて降ろす場所を選べよ。というか、そもそもここどこだよ？」

襲い来る半透明の死霊達を当たると幸いに無我夢中で切り払いながら、悲鳴に近い叫びを上げるトオル。対死霊に効果があるのか、真紅の大鎌は絶大な威力を発揮して、その刃に触れた死霊達を問答無用で切り裂いていく。実戦経験ゼロの典型的な平和ボケした日本人である彼が、曲りなりにも戦えているのは、神使としての圧倒的な能力と神器の力、そして何より傍らにいるミユキの存在が大きかった。すなわち、彼は孤独ではないということが、最大の力となっていた。

「ここはヴェルム大陸最北端にある人族が『死霊の森』と呼ぶ死霊

の巣窟(そうくつ)です。さらに6時から7体！」

そんなトオルに対し、冷静に答を返し、かつ索敵もこなすミユキ。そのメンタリティは元一般人のトオルとは比べものにはならないようだ。その声や態度に全く恐怖(きょうふ)は感じられない。それが、妖精とはいえ女性であり、かつ己より小さな存在に無様は見せられないという反骨心と見栄をトオルに張らせた。

トオルは襲い来る死霊達とその声に怯(おび)えて逃げだしたい己の心を叱咤(しった)しながら、軽口というか言葉を交わすことで、肩にのせているミユキの存在をより強く感じながら、どうにか戦闘態勢を保っているのだった。先のカヤへの文句も疑問も怯えを紛(まぎ)らわす為のものに過ぎない。しかし、聞き捨てならない言葉を聞き、尋ねずにはいられなかった。

「ちょっと待て！死霊の森だと？！何を考えて、カヤの奴は俺をそんな所に落としやがったんだ！」

降ろすではなく落とすになっている辺り、この地へきた時の出来事はトオルの心中深くに刻まれているらしい。意外に根にもつ性質(たち)のようだ。まあ、今回ばかりは彼の言い分は全く正しかった。いきなり死霊の巣窟に放り出されれば、悪態の一つもつきたくなるだろう。

「この森は元々あの御方の神域でした。しかし、闇が濃く死の気配に満ち魂を安らがせるこの地は、死霊達にも居心地がよかったようで、いつからか死霊達の吹き溜まりとなったようです」

「ああ、なるほど。神域だから、カヤが出てこれたわけだ…。だが、よりにもよってそんなところで作業するなよ！こんちくしょーめ」

ミユキの解説になるほどと首肯するトオル。カヤが神々は基本的に世界への介入はできないと語っていたのを覚えており、疑問に思っていたからである。
だが、それにしたって、よりにもよって死霊の巣窟となっている神域で、己の再生作業をすることはないだろうにと文句を言うのは仕方のないことだろう。

「ああ、それはその通りだと私も思いますが、御方様の言われるところによりますれば、『復讐の行きがけの駄賃に、神使らしく私の神域を浄化していけ』とのことです。つまり、マスターに課せられた役目の一環というわけですね」

どこまでも冷静に説明してくれるミユキ。その冷静沈着ぶりはトオルの心を安らぐのに大いに寄与してくれたが、語られた内容は彼をいらつかせるものばかりであった。

「あの性悪女神！強制はしないとかいってやがったくせに！これじゃあ、強制されているのと変わらないつうの！」

いかに神域とはいえ、死霊の巣窟のど真ん中に放り出されては、喜べるはずがない。神域に満ちる力と空気によって普段は安らいでいる死霊達だったが、生者がいれば話は別だ。しかも、それが闇と死に満ちた神威を放っているのだから、生者に対する恨み妬みに加え、魂の救済を求めてトオルに殺到した。強制はしないといっても、これでは拒否してやり過ごすことなどできようはずもなく、トオルはなし崩し的に戦闘に突入したというわけである。

確かにこれでは、自由意思もくそもあったものではないと、主に同情を禁じえないミユキであったが、一方でかの御方の御心も理解

しているので、内心複雑であった。

「しかし、これはいい経験になると思われます。次はまた3時の方向から8体！マスターは実戦経験がありませんから、今後の事を考えるならば必要な事であったと愚考します。次は4時から3体です！」

せめてもの主に対する慰めと、かの御方に対するフォローになればとそのメリットを強調するミユキ。主思いのいい娘であった。

「確かにそうかもしれんが…」

平和ボケした日本人であるトオルに積極的に命をかけて戦えというのは、無理がある話であった。彼が経験したことがあるのは精々喧嘩か命に支障はない試合くらいしかないのだから。それを考えれば、強制的にでも実戦経験を積ませるのは悪い話ではない。

しかも、トオルは知らない（ミユキはあえて黙っている）が、実際のところ、この森の中で戦う限り、いつでもカヤが介入できる為、トオルの命に危険はない。創造神の片割れにして、生と死を司る闇の大神は、存外に過保護な性質のようである。それを考えれば、むしろこれは、至れり尽くせりの訓練ともいうべきものであったが、そこら辺を理解していないトオルにとっては、初めての実戦であり命がけの戦いであるから、感謝しろというのは土台無理な話であった。

そんな主の内心を読み取ったのか、ミユキはかの御方のフォローをさらにすべく、言葉を重ねた。

「それに今やっている死霊の葬送（そうそう）をはじめ、死者の魂の葬送はマス

ターの役割であると同時に、マスターの御力を増大させることに繋がります。今のマスターは神使といっても、成り立てで使える御力も少ないですが、積極的に御方様の神使としての役割を果していけば、マスターの成長はそれだけ早くなりますし、その使い方にも習熟することができます。次６時の方向５体です！
確かに、強制といって差し支えない戦闘ですが、けしてマスターのマイナスにはならないと思われます」

「そうか、なるほどな…。まあ、だからと言っても感謝する気にはなれんが…な！」

ミユキからメリットの数々を聞いて、一応の理解を示すトオル。しかし、納得して感謝できるかといわれれば、話は別である。迫り来る死霊達を薙ぎ払いながら、その複雑な心境が表情に出ていた。

「そうですか…。仕方がありませんね。気を散らすようなことを言って、申し訳ありませんでした。これより戦闘に集中します！」

少し残念そうに言うミユキだったが、すぐに気を取り戻す。主の言い分はもっともだったし、やれるべき範囲で最大限の努力はした。それに何より、今は主の戦闘を助けるべき時であるのだから。

「おう、頼むぞ！次はどっちだ？」

「８時の方向から４体、少し送れて１０時の方向から７体です！」

「了解！」

漆黒と白銀の主従は、時を経るに連れて息を合わせていき、トオルは恐怖に慣れるというか麻痺していき、次第にその葬送はスピー

ドを上げていった。夜が明ける頃には、主従を感知できる範囲内にいた死霊達は、この世から姿を消し、常世へと魂を送られていたのだった。

ちなみにトオルは夜が明けると共に色んな意味で精神が限界に達し、疲労困憊（ひろうこんぱい）で気を失いぶっ倒れたのだった。

死霊の森（後書き）

主人公はチートのようで、中々に微妙な強さです。簡単に言えば、レベル１にして、究極の職業についており、初期ステータスも半端じゃなく高いですが、レベル５０の戦士とかと戦えば、普通に負けます。なにせ実戦経験も力の使い方も、皆無と言ってよく、あったもんじゃありませんから。

案内役の妖精は、主人公がこの世界の人を信用していないということから、必要不可欠の存在でした。彼女のコンセプトは裏切らない絶対的な味方、そして主人公の戦う理由となりうる者であり、その結果、従順で冷静な異性の従者、保護欲をそそる妖精としたわけです。彼女は主人公が見栄を張る理由であり、逃げ出さない為の理由でもあります。異性の前で無様を見せたくないのは、男なら当然ですし、主従関係的にも、主として従者には無様は見せられませんからね。そして、普通の人間より小さく脆弱に見える妖精ですから、護らなければという意思が湧くわけです。ここまでやらないと、なにせ典型的な日本人なんで、勝てないと思ったら問答無用で逃げると考えた為です。そもそも、戦いたくないでござると言った感じですから。誰かがいるから、嫌われて孤独になるのが嫌だから、人は見栄を張り、その虚勢を真実にする為に努力できるのだと思います。この話における主人公はまさにそれで、逃げたい心を必死に押し留めています。右も左も分からない異世界で、何よりも頼もしく力となるのは、裏切らない味方ではないでしょうか。

また、復讐こそしたいと考えていますが、本気で殺せるかも現状では微妙なところです。心底憎悪しているのは確かですが、殺人を犯す覚悟があるかといえば、やはり現状では口だけと言わざるをえません。

断章：妖精への密命

「この体たらくで、この先やっていけるのでしょうか？」

夜を徹して死霊達の魂送（魂の葬送のこと）を終えて、疲労困憊（ひろうこんぱい）で地に倒れ臥した主（トオル）を見つめながら、妖精（ミユキ）は一人ごちた。己を創造した母なる大神から、争いとは無縁の世界から来た一般人とは聞いてはいたし、彼女自身大神の傍らで、主の様子や記憶を覗いていたのだから、それは理解しているつもりであった。

しかし、現状を見るにそれは甘い認識であったという他ない。死霊の突然の出現に驚愕し慌てふためく様は、滑稽を通り越して哀れですらあった。なにせ、主には死霊をはじめとした霊や魂を察知できる能力があるにも関わらずである。主の為に生み出されたミユキといえど、己の主の今後に不安が生じるのは仕方のないことであった。

「ですが、主のこれまでを思えば上出来でしょうか」

一方で、ミユキは主に対して一定の評価も与えていた。

まず、最初こそ逃げ腰であったが、生命の危機にあって彼女という存在を強く認識したのだろう。彼女の声を聞く度に腰が定まり、戦う者としての姿勢が見られた。まあ、途中から慣れというか、感情が麻痺していた節があるので、次も同じようにできるかといえば、疑問は残るが。

次に、彼が弱い己の精神を認識しながらも、必死に己自身を叱咤（しった）し、とんでもないとこに放り込んだ大神に対して文句こそ言ってはいたが、一度も弱音を吐いたりはしなかった。まあ、一言でも弱音

を吐いた時点で、自分が戦えなくなることを理解していたからなのかもしれないが。

また、彼が次第に己の力について理解し、機械的に魂送するのではなく、浄化と哀れみの念をこめて鎌を振るっていたことは特筆に価する。死者への哀れみと浄化の念はかの大神の力を使うにあたって、重要な要素である。まあ、最初のうちは死霊達の声を無視して、無慈悲に機械的に刈り取っていったのだから、これも手放しには褒め辛い。

最後に、彼は最後までやりきったということだ。これを何よりミユキは評価する。死霊の吹き溜まりと化していたこの森にいた死霊の数は１００や２００ではきかない。それこそ１０００単位である。彼女が感知できる範囲だけでも、１０００以上の死霊が存在した。その範囲外からも、闇の中に一筋の灯火に集るかのように来たのである。救いを求めて主に襲いかかった死霊達は、実に２０００を超える。それを主は、尽く大神の御許へと送ってみせたのだから大したものである。たとえそれが、神器と神使の能力によるところが大半だったとしても、彼は彼女の感知できる範囲から、死霊達がいなくなるまで、休むことなくそれを成し遂げたのだ。血生臭い荒事と無縁である元一般人の彼にとって、それは偉業といっていいだろう。

「マスターは御方様の危惧するような存在になりえるとは思えませんが…」

そんなことを思う一方で、ミユキは母なる大神より与えられた密命を思い、胸が痛むのを感じざるをえなかった。彼女の得た密命、それはいざという時の主の抹殺であった。

かの大神は、主はあくまでも被害者であり、全ての責は彼を贄と

したこの世界の人にあるといった。そして、同時に己もまた加害者であると語った。己が、恣意的に感情的に力を用いらねぬようにつけた適格者たる異世界人の召喚機能が、彼を死に至らせる原因となったのだから。しかも、死した後も、神使となったことでこの世界に括(くく)られてしまい、元の世界の輪廻(りんね)に戻ることすらできなくなったからだ。

ゆえに、大神は主に対し、どんな強制もするつもりはないと語った。最低限の仕事はさせるかもしれないが、それは彼の能力なら片手間にできるものであったし、行動を制約するものではない。どんなふうに彼が生きようと力を奪う事もしないと彼女は語った。むしろ、特別な名を用いる事で、さらなる力を貸し与えることすら認めたのだから、破格の扱いであると言えよう。もっとも、ミユキは知らない事だが、『神創のタロット』に篭められていた大神の力は４０００年のうちに独立・変質し、取り上げることも叶わないのだが…。

そう前置きした上で、母なる大神はミユキに命じた。主が世界にとっての害悪となりし時には、その命を奪えと。その為に、彼女は作り出されたのだと。

そもそも、ミユキは妖精としてはその出自からして、別格の存在であった。この世界の妖精は、妖精神によって生み出された妖精姫によって、生み出される。つまり、神から直接生み出されるというのは、それだけで妖精姫と同等ということであり、一妖精としては異常である。さらに言うならば、妖精神を創造したのは、母なる大神である。すなわち、与えられた力こそ比べくもないが、ミユキは生まれだけをいえば、妖精神とは姉妹の関係にあるのだ。それも、妖精姫を超える力を持つといえば、彼女がいかに尋常ならざる存在であることが、よく分かるだろう。

それだけの力を与えられて生まれてきたには、当然の意味があった。すなわち、主となるトオルの殺害である。『神創のタロット』によって、初めて世界による制約を受けない神使となったトオルがどのような力を持つのか、どのような影響を世界にもたらすのか、創造神の片割れにして、生と死を司る闇の大神であるカヤでさえも、全くの未知数であり予想できなかったからだ。加えて、トオルがこの世界に抱く思いは憎悪とか、そういったネガティブな感情である可能性が高い。ゆえに最低限の保険は必要であると、彼女は考えたのである。

その結果生まれたのが、ミユキという妖精姫以上の力を持つ神創の妖精であった。彼女が母なる大神より与えられた名は『神無（かんな）』。トオルの世界において神が無いことを意味する言葉であることをトオルの改姓に際し知ったカヤは、あえてそれを妖精へと与えた。それは彼女の目論見どおり、皮肉にも異世界の言葉であったからこそ、トオルの神使としての力を中和・無効化する力を妖精に与えた。この名を一度ミユキが唱えれば、彼女はトオルの神使としてのありとあらゆる力を中和・無効化し、容易に殺害することが可能となる。いわば『カンナ』は、トオル専用の神殺しの妖精なのだ。

だが、大神とてそうなることを望んでいるわけではない。カヤにとって、あくまでもトオルは被害者だ。できる限り、力になってやりたいとは思う。それに、『我が子』と呼んだのは伊達（だて）や酔狂（すいきょう）ではない。大神である彼女に比べれば遥かに弱いが、初めて己と同様の力を宿した存在である。『我が子』と言っても差し支えない近しい存在であることも、事実なのだから。ゆえに、あくまでも『カンナ』は保険である。その名が解き放たれない事を彼女は願っていた。

そして、それはミユキにとっても同様であった。トオルの為だけ

に生み出されたといっても過言ではない彼女にとって、唯一無二の主人を己が手で殺さねばならぬなど、悪夢でしかないからだ。まだ共に過ごした時間は一日も満たないが、嫌悪を感じるような人物でもなかったし、主足りえない人物とも思わなかった。些か、精神面の弱さが気になるところだが、これまでの境遇を考えればいたしかたのないことである。それに、昨夜のことを鑑(かんが)みれば、その成長は十分に期待できるだろう。

「私を『ミユキ』のままでいさせて下さいね、マスター」

眠りこけている主の周りを結界で囲い、その暢気(のんき)な寝顔を見ながらミユキは呟く。誰も聞くものがいない森の中に響いたそれは、彼女の心からの切実な願いであった。

断章：妖精への密命（後書き）

何から何まで都合のいい話など存在しません。権利があるから義務がある。大きな力をもってば、それに対するメリットだけではなく、デメリットもついてくるわけです。今回は、そういう表に対する裏の話でした。

実は何気に主人公に対し、嘘をついてるカヤ様。蘇生の代償として捧げられるだけだったら、元の世界に戻れたんですが…。結構、利用する気満々だったりします。ミユキも単なる案内役ではなく、実は主人公に対する最終兵器だったり。

世の中、そう甘くできていないというお話でした。

ミユキの授業

トオルが目を覚ました時、その目に映ったのは闇夜にはえる白銀の髪であった。それが自身の従者である妖精と気づく前に、彼はそこに闇夜より暗き6枚の羽を持った白銀の髪の女性を幻視した。

「マスター、お起きになられたのですか？」

しかし、その幻像はかけられた声によってすぐに霧散し、目の前には白銀の髪を結った透明な2枚羽を持った妖精の姿がある。いつもながらの変わらぬ従者の姿に、トオルは幻視したものを振り切るように頭を振り、その声に応える。

「ああ、今起きた。今、何時くらいだ？」

未だはっきりしない意識を、言葉を紡ぐ事で覚醒を促す。見たところ、もう日が暮れているようだが、正確な時間を把握する為に、ずっと起きていたであろう従者に尋ねる。

「マスターの時計に従うならば、午後6時といったところです。こちらで言うならば、土の刻限になったところです」

ミユキは預けられていた懐中時計をトオルに返しながら、そう答えた。

この世界における時間は、幸いにも一日２４時間であった。但し、1時2時とは言わないし、厳密な２４時間というわけではない。火、風、土、水の四大属性に擬えて、刻限を表す。２４時間制で言うと、日が昇る6時から火の刻限が始まり、日中の昼、つまり１２時から

風の刻限となる。そして、日が完全に沈む１８時から土の刻となり、寝静まる深夜２４時からが水の刻限となる。つまり、ミユキの言葉に従えば、ちょうど完全に日が沈んだところというわけである。しかも、これらは元の世界のように厳密ではなく、日が昇る時刻が早くなり、日が沈むのが遅くなる夏場には、火の刻限と風の刻限が長くなり、相対的に水の刻限と土の刻限が短くなるという具合に、季節によって変化するそうである。すなわち、この世界にも季節の変化があるということである。

ちなみに、なぜ時計など持っているかといえば、トオルが背広の胸ポケットに入れていたからである。同様に万年筆も持っている。彼がこちらに来た時、持っていたのは服とこれだけだったらしい。服の方はもうサイズが合わないので、カヤに預けたままだが、これらは役に立ちそうなので返してもらったのだ。特に時計はありがたかった。彼のそれは懐中時計であり、祖父の形見である。今時、珍しい手巻き式なので、電池切れ動かなくなる心配は無いので、余計にである。戦闘時には、この時計の文字盤を元に自分を中心に索敵してもらい、方向を指示してもらうなど、非常に役立っていた。東北、北北西などと指示されても、すぐには対応できない為、これは彼が思っていた以上にいい案であった。睡眠時間の管理や戦闘時間の計測などにも非常に有用であったし、何よりも元の世界との数少ない接点であり、祖父の形見であることも手伝って、彼の心理状態を安定させるのに重大な役割を果していた。余談になるが、この２つの物品はカヤによって魔改造されており、懐中時計の方は万が一にも壊れぬように、万年筆は同様の効果に加え、インク切れを起こさない&どんなものにも書き込めるという効果が付与されていることをトオルは知らない。

「そうか、大体６時間半ちょっと眠っていたのか…。だんだん、必要とする睡眠時間も、魂送にかかる戦闘時間も短くなっているし、

これなら明日には森を出られるかな？」

「そうですね、この分なら明日には神域を出られるかと思われます。ですが、油断は禁物です。神域から出るということは、御方様の力が及ばない地に入ることとなります。そこには神域には入れない程に穢れ（けがれ）た魂達が、救いを求めて彷徨っているでしょう。彼らの獰猛（どうもう）さ、凶暴さはここにいる者達とは比べものになりません。マスターには加護があるとはいえ、ゆめゆめ油断なされませんように」

トオルの言葉を肯定するミユキであったが、釘を刺す事も忘れない。この森に放り出されて、早五日がたち、夜毎に訪れる死霊の群を魂送することにも慣れが出てきたのは、彼女も認めるところではあるが、同時にそれが慢心へと繋がらぬように戒（いまし）める。

確かに、日を追う毎にトオルの手際がよくなり、戦闘技術の向上も認めるところではあったし、最初と違い疲労困憊（ひろうこんぱい）で意識を失うようなこともなくなったが、未だに精神的な危うさは、完全には払拭されていないことを彼女は知っていたからだ。加えて、神域内にいる死霊達は、トオルが手を下さずとも、神域に満ちる力でいずれは魂送される者達であり、外にいる死霊等とは異なり、基本的に人を襲ったりすることはない。トオルが襲われたのは、一重に彼が神使だったからである。それにしたって基本的に魂が安らいでいる彼らの襲撃はぬるいと言ってもいいレベルのものであった。大体にして、彼に与えられた浄化の役目は、神域内の浄化ではなく、神域周辺の浄化である。つまり、本番はこれからであったからだ。

「そんなに違うのか？」

「はい、神域内にある魂は明らかに安らいでいますから。本来ならば、人を襲うような者達ではないのでしょう。私も実際に神域外の

者達を目にしたことはありませんが、これが域外の癒しなく荒ぶる魂であれば、その攻撃性や穢れは比べものにならぬものと愚考します」

ちょっと不安を覚えて再度確認するトオルに、ミユキはにべもなく答えた。彼女は、主が慢心せず、気を抜くことなく緊張してことに望むことを望んでいたので、自然と脅威とその危険性を強調するような言い方になる。

「脅かすなよ。釘を刺さなくても、気を抜いたりしないって。俺なんて、ミユキがいなかったらとうに野垂れ死んでるんだろうからな」

その真意を見抜き、勘弁してくれと言うトオル。彼の言葉は間違うことなき真実である。彼からしてみれば、この世界は右も左も分からない未知の世界なのだ。気を抜きたくても抜く事ができるはずがない。そんな彼がどうにかこうにか戦い、その疲れを癒す為に眠ることができるのは、一重に白銀の従者のおかげであった。そのせいか、ミユキと話していると、自然と口が軽くなってしまう。要するに、トオルは彼女と話している時は安心しているのだ。孤独ではないことに…。

「それならばよいのですが。マスターは、些か死霊達を甘く見られているように感じられたものですから…。無礼を承知で諫言させて頂きました。申し訳ありません」

主の言葉に意気消沈した様子で、己の無礼を詫びるミユキであったが、トオルはこれに慌てざるをえない。

「待て、謝る必要は無いって。確かに、気は抜いていなかったけど、連日の戦闘でどこか死霊達を甘く見始めていた事も事実だ。ミユキ

の指摘は的確だったよ」

気こそ抜かず一定の緊張を保っていたトオルであったが、心のどこかで死霊達を甘く見ていなかったのかときかれれば否であった。なにせ、彼の真紅の大鎌にかかれば、死霊達は鎧袖一触（がいしゅういっしょく）であったし、彼自身の現状での身体能力や戦闘技術を把握しつつあったから尚更である。

「そう言っていただけますか…。よかった、無用な事をいって主を煩わせてしまったかと思いましたから」

「そんなことはないって、本当に助かったよ。これからもよろしく頼む」

「承知しました。これからも、遠慮なくいきますね！」

先ほどとは打って変わって、満面の笑みで応じる白銀の従者に嵌（は）められたと思わないこともない漆黒の主であったが、まあこれくらいの方が己にはあってるのかもしれないと苦笑して流す事にする。それに状況は、彼らをいつまでも待っていてはくれなかった。

「マスター、今夜も死霊達が救いを求めて集って来ています。私の感知範囲内だけで、すでに５００を超えています」

救いを求めて襲来する死霊達をミユキが早々と感知したのだ。

「ああ、俺にも分かる。今夜も負けず劣らず、中々の数だな」

それを僅かに遅れて感知したトオルもそれに応える。最初こそ、感知する能力がありながら、感知できず奇襲すら許す体たらくであ

ったが、夜毎の襲撃を経るに連れて、彼はその感知を身に着けつつあった。無論、彼自身の経験だけでなく、ミユキからその方法について教授されたことも大きかったが。

「そうですね、今日はいかがしますか？」

主の成長を内心喜びながら、？(おくび)にも出さないミユキ。冷静に此度の対処を尋ねる。

「9時から3時までの索敵は俺がやる。ミユキには、全方位の索敵を頼むが、基本的に俺の担当以外の索敵を頼む。俺の担当については、俺が感知した数を声に出すから、間違っていた時だけ指摘してくれ」

「了解しました」

索敵をミユキに完全に任してしまえば、魂送に集中できて楽なのだが、今後のことを考えれば、索敵も自身できるようになければまずいので、半分は己で担当する。とはいっても、流石に全方位の索敵をやるほどの余裕は無いし、取りこぼしや誤認はまずいので、ミユキに補完して貰う。彼女の索敵精度は己とは比べものにもならないからだ。それでも、索敵を一端とはいえ自身で担当できる余裕ができたことを褒めるべきであろう。

「最初は6時から7体、来ます！」

「了解！さあ、今夜も死霊達を冥府へと誘ってやるとしようか！」

白銀の妖精の警告に応えて、今夜も漆黒の死神が森を奔(はし)る。彼らが通った後には、彷徨える魂はなく、ただ清浄な空気が流れるので

あった。

この森に来て以来、毎夜襲来する死霊達を魂送し続けて、早5日。実にその総数はなんと万に届かんとしていた。正直、どんだけ溜まっているんだと文句をつけたくなるトオルであったが、ミユキからこの神域である森には、本来魂だけの存在となったものしか入れないそうであり、輪廻（りんね）へ戻る為のかの大神の御許へと通じる道という重要な役割がある為、仕方の無い事だと言われ、声には出さず内心で文句を垂れるに止めた。一方で常時万以上の魂が吹き溜まっているの方が通常であり、これだけやっても1年ともたず元通りになるだろうと聞いて、限がないとげんなりせざるをえなかった。

トオルは魂送を終えた後は、森の出口に向かって歩きながら、ミユキにこの世界『メームリージ』の政治・文化・文明・地理・歴史をはじめとして自身の能力・責務等も含めた様々な事をミユキから教わっていた。今後のことを考えれば、最低限の常識・知識は必要不可欠であったからだ。案内役としてカヤが寄越しただけあり、彼女は非常に聡明で優秀な教師であった。

政治・文化・文明については、問題なく理解できた。幸い殆どの国家の政治体制が基本的に王制であり、貴族や奴隷が存在すること等の身分制度や人権の制限を除けば、常識はそれ程違和感のある突飛なものではなかったからだ。文化も先に予想したとおり、やはり西洋文化が主体であり、極一部に東洋文化系の匂いを感じ取れるくらいのものであり、まあ生粋の日本人であるトオルとしては些かの寂しさを感じないわけではなかったが、理解自体は容易であった。文明のレベルは元の世界における中世に毛が生えたというレベルで

あったから、イメージしやすく理解も容易であった。ただ、科学ではなく、『魔導機学』という科学と魔法（魔術）を組み合わせたようなものが存在し、それについては中世を遥かに超越したレベルの技術が実用化されていることには、些か戸惑った。ちなみにその動力源は電気ではなく、『万物（マナ）の根源たる力』と魔力であった。

対照的に難解であったのは、地理と歴史である。これはトオルの認識に問題があった。メームリージは神によって創造されているという根本から異なる世界だというのに、元の世界における現代人としての自身の常識をあてはめた為である。まあ、現代人が神話でもないのに、正史に神罰やら天罰という単語が頻出し、果ては神やら悪魔、魔神に魔王なんてものまで登場するのだから、それを受け容れろというのは酷な話であろう。地理についても同様で、前述した神話的なものによって、国家の成り立ちや、地形の変化があり、そのれによって島や湖、山までもができたり、月が二つある等、現代人にとっては、リアルとして受け容れがたいフィクションにしか思えないのだから、無理も無い。

はっきり言ってしまえば、トオルの許容範囲を超えていたのだ。ゆえに、彼はもはや科学的考察や理論を放棄することに決めた。この世界においては、そういうものだと理解することにしたのだ。なぜ、そうなのかとは最早考えない。考えれば、いくらでも疑問が湧いてくるのだから賢明な判断と言えた。まあ、思考放棄と言ってしまえばそれまでだが、そこは言わぬが花というものである。

そんなわけで、この森での最後になるであろう魂送を終えたトオルは、今日も今日とてミユキに教えを請うていた。本日の主題は、彼の神使としての能力、及び責務についてであった。

「マスターは、生と死を司る闇の大神たる御方様の神使ですから、

それに準じた強大な能力を行使できます」

「ふむ、まあ名前からして、まんま神の使いだからな。その神の力を使えるというのは予想がつく。知りたいのは、具体的にはどんな能力が使えるのか、その詳細だ」

「マスターの御力を分かりやすく説明するとなると、闇を扱えることは言うまでも無いですが、そうですね…。マスター、マスターはこの森に吹き溜まっていた死霊達の姿が見えましたよね？その声も聞えましたよね？」

ミユキはトオルの質問にしばし考えた後、そんなことを確認した。

「ああ、確かに見えたし聞えた。それが俺の能力と何か関係あるのか？」

「はい、この森の死霊達が実はマスターの魂送を必要とせず、神域に満ちる力による葬送を待つ存在であることは、先に説明したとおりです。本来、このレベルの死霊達は、常人では視認することはおろか知覚する事すら困難なのです。常人でも視認が可能な死霊は、人に積極的に害なすレベルで相当の穢れを纏いし者達に限ります。マスターは、それにも拘らず彼等を視認し、声を聞き、最終的には遠距離にいる者すら感知するに至っていました。それこそが、マスターの第一の能力。すなわち、死者や魂の声無き声を聞き、見えざるものを見、時に感じ取る力です」

「なるほど、いわば『死神の耳目』とでもいうべきか。まあ、正しくは加えて魂を感知する第六感もついてくるみたいだが…」

トオルは簡単に命名する。能力を把握するのに役立つと考えたか

らである。

「悪くないと思われます。続けます。他にも、マスター自身行われたので実感されたと思いますが、マスターには魂を浄化し、御方様の御許へと送り届ける魂送の能力があります」

「『浄化』と『魂送』は一緒くたにしたが、本来は別物か？」

「そうですね…。『魂送』は魂の浄化なしにできないので、『浄化』とセットで言いましたが、本来は別の能力です」

「やはり、そうか。しかし、浄化できない魂はどうするんだ？たとえば、この森の外にいる奴等とか」

森の外に溜まっているであろう神域に入れない（＝神域の力では魂送できない）者達のことを思い出し、魂送が不可能な場合を問うトオル。

「マスターの『浄化』能力は、神域より上ですので、外にいる者達もある程度は『魂送』できるものと思われます。しかし、マスターの浄化能力を超えた穢れた魂を持つ者もいるでしょう。その場合は、世界に魂を還す『滅魂』となります。これはマスターが、未だ使われた事のない能力ですが、行使自体は容易です」

それについても明確な答をすぐに返すミユキ。つくづく、優秀な妖精であった。

「使った事がないのに行使は容易？『滅魂』とはどのような能力なんだ？」

使った経験もないのに行使が容易だと言われ、訝しげにその意味を問う。

「『滅魂』は魂を輪廻（りんね）の輪に戻さずに、魂を滅ぼしその力を世界に還元する能力です。行使が容易と言ったのは、マスターはこれを意識的に使う事がないであろうからです」

「意識的に使わない？それは意識的に使えないということか？」

「いえ、そういう意味ではありません。正しく言うならば、意識的に使う必要がないということです。マスターの大鎌で斬られた者は、すべからく『浄化』あるいは『滅魂』の効果を受けるのです。すなわち、マスターに刈り取られた魂は、マスターの浄化能力が及ぶなら『浄化』を受け自動的に魂送され、及ばない程の穢れを持つなら『滅魂』されるというわけです」

つまり、『浄化』と『滅魂』は二者択一なのだ。正確には選べるわけではないが、どちらかが自動的に働くというわけだ。

「なるほどな…（現状ではそれでいいかもしれないが、将来的に意識的にＯＮ／ＯＦＦ及び選択できるように訓練すべきだろうな。心に留めておこう）。容易とはそういう意味か」

「はい、ですからマスターは殊更意識なされることはありません。あえて言うならば、死者や魂に対して慈悲と哀れみをもって、あたって下さい。それが能力行使の助けとなるはずです」

「了解した、心に留めておこう」

死者や魂に対して慈悲と哀れみは確かに重要だとトオルは思った。

実際、森の中での魂送も、死者の声に耳を傾けず機械的に当たるを幸いに刈り取っていた時に比べ、その声に耳を傾け、その思いに時に共感し、時に哀れみながら、鎌を振るった時の方が、遥かに効率がよかったことから、そのことを実感していたのである。なまじ己の意思を歪められて死んだせいか、彼には死者の無念がよく理解できた。それが彼の『死神』としての力を強化しているのだから、皮肉な話である。

「そして、マスターの特別な能力として『絶対精神』と『蘇生』があります。前者はマスターが受けた『支配』のような外部から精神的な作用を無効化する能力です。これはマスターに特別に与えられた能力ですが、その理由と『蘇生』については説明しません。マスターも知りたくないでしょうし、気分を悪くされると思いますので…。マスターが行使されたいと思った時に、改めてお聞きください」

『絶対精神』がトオルに与えられた理由は言うまでも無い、また、『支配』で操られて、神使の力の悪用を防ぐ為であろうことは明白である。そして、『蘇生』は彼の死因である。その行使方法など、知ることすらおぞましいだろう。

「…ああ」

自然と素っ気無くなってしまったトオルの短い答に空気が重くなる。彼が『蘇生』によって、命を落としたことを思えば仕方の無いことではあったが、明らかに雰囲気が悪い。

「それでは次に、マスターが賜(たまわ)られた神器について説明したいと思います！」

その空気を払拭(ふっしょく)するかのように明るい声で言うミユキ。

「ああ、頼むよ」

気を使わせてしまったなと己の不甲斐無さを情けなく思った。だからといって、ここで落ち込めば折角の気遣いを無駄にしてしまうので、トオルは内心で苦笑しながらどうにか一時的に折り合いをつける。

「まずは真紅の大鎌から説明致します。名称はマスターの自由にせよとのことでしたので、分かりません。そして、その肝心の能力は『在るべき死神の姿』です」

「『在るべき死神の姿』？なんだそれは？」

「そのままの意味です。マスターが思い描く死神を体現します。マスターは不思議に思われませんでしたか？なぜ、御自分がこうも見事に戦えるのか？」

「そういえばそうだな…」

元一般人で、祖父の勧めで幼少の頃から、辛うじて居合いだけはやり続けていたに過ぎない己が、中国拳法の達人も真っ青な体術を駆使し、アクロバティックな動きで縦横無尽に森を駆け回ったのだ。異常という他無い。

しかも、使った得物は持ち慣れた日本刀どころか剣ですらなく、身の丈を超える大鎌という規格外にして、取り回しの難しい代物だ。それを自由自在に苦も無く操ったというのだから、これも異常と言う他無い。

トオル自身、多少の疑問はもっていたが、それは神使となった為

だと思っていた。しかし、第三者から改めて指摘されると、その異常さが際立つ。そして、ミユキの言う事が正しいなら、それはあの真紅の大鎌のおかげだったというわけだ。

「マスターが思い描く『死神』を鎌を握った瞬間より、マスター自身の御体をもって具現化するのです。すなわち、あれはマスターが思い描く『死神』の技術というわけです」

「なんつう反則的な能力だ。そりゃあ、俺の主観だとしても『死神』が弱いわけないからな」

ミユキの解説を聞き、その反則ぶりに嘆息するトオル。しかし、一見強力な能力であっても、意外な落とし穴があった。

「確かに強力な能力です。しかし、お忘れなきよう。この『在るべき死神の姿』は、マスターが鎌を握っている時しか発動しません。すなわち、今現在は勿論発動していませんし、戦闘に際して自動的に起動してくれる類のものでもありません。くれぐれも、戦闘の際は鎌を出すことお忘れになりませんように」

「ああ、なるほどね。そいつは大きな欠点だな」

ミユキの指摘にその重大な欠点に気づかされたトオル。確かめるべく鎌を呼び出し、確信する。これは中々に厄介であると。

彼の誇る真紅の大鎌は実に2メートル近い大きさを誇るのだ。刃も長く、とても街中で担いで歩き回るというわけにはいかなかったからだ。これで彼がもっと歳をとり、体も大きかったらまだましだったのが、生憎と今の彼は10歳児であり、歳の割には大きいとは言っても、子供の域を出ていない。こんな規格外なものを担いでいたら、間違いなく詮索を受ける、というか捕まる。

すなわち、街中等、人の目のあるところでは鎌は出せないのである。それはつまるところ、トオルの身の危険に直結する。彼は鎌なしでは身体能力が異常な素人に過ぎないからだ。つまり、街中で鎌を出す暇もなく不意を打たれたら、どうしようもないのである。身体能力だけでどうにかできるような相手であればいいが、そうでないプロに対しては、それが命取りになる。そういう意味で完璧とは言い難く、強力ではあるが、大きな欠点のある能力と言えよう。

「こりゃあ自前でも対処できるように訓練しないと、ヤバイな」

「そうですね、万が一のことを考えれば備えは万全にしておくべきだと思います」

トオルが深く嘆息しながら言うと、ミユキも神妙な顔で頷いた。

「では、最後となります神器『闇の衣』について、説明致します」

「ああ、この服のことだろ？どんな能力があるんだ？」

一泊置いて、説明を再開したミユキに、その対象である漆黒の長衣の袖を示して尋ねる。

「基本的には、装着者の環境を常に快適に保つ効力があります。つまり、砂漠だろうが、雪原だろうが、環境によって、マスターを害することはできません。それに付随して、耐炎熱・耐氷雪等の効果があります。並のブレスでは、マスターには通用しません。また、魔法防御性にも優れており、下位の魔法であれば完全に遮断します。中位以上となれば、流石に減衰が精一杯ですが。そして、闇の名を冠するとおり、隠蔽・隠密機能を持ちます。マスターが意識してそ

れを使いたいと願えば、御自身の気配を完全に消し去れます。但し注意して欲しいのが、純粋な物理攻撃に対してはそれ程の防御性能を持ちません。いいとこ、鉄の鎧相当ですね。
この防御性能は、マスターの現状の御力におけるものです。マスターが闇を扱う能力に熟達すれば、これ以上の防御性能を発揮する事も夢ではありません。また、マスターの技量の関係上、現在は使用不可能ですが、変り種として『闇の衣』は変化機能を持ちます。外見を偽装することも可能ですし、服装のみを季節や場にあったものに変化させることも可能となります。後、付け加えるなら、マスターのマナを消費することで稼動する自動修復機能があります」

「うわ、これまた凄いな…って、修復機能は俺からマナを取るのかよ」

「『闇の衣』の性能を考えれば、それを失う事に比べれば安いものではないですか」

「まあ、確かにな。これ以上を求めるのは、流石に欲張りすぎだよな…」

ぼやくトオルに、それでも破格の性能であると窘(たしな)めるミユキ。確かにこれについては反論のしようもないので、あっさり引き下がるトオル。

「以上で、説明を終了します。何かご質問があればどうぞ」

「闇を扱う力っていうのは？」

「そのままの意味です。マスターはこの世界における闇を自在に操ることができます」

あえて説明を流された能力について問うが、詳細は語らないミユキ。トオルは、それじゃあ意味が分からんよと内心で突っ込みつつ、同時に闇を扱う力については、実際に試してみるほかないと心に決め、ここはあえて触れずに話を変える事にした。重ねて問うたところで、彼女は一句違わぬ答をかえすだろうことは予想できたし、こんなことでこの世界での唯一無二の味方と不和を生み出すのは本意ではなかったからだ。それに、可能性としては低いが、彼女自身そうとしか説明できないのかもしれないし、もしくはそうせざるをえない理由があるのかもしれないと判断したからだ。

「ふむ、それじゃあ肝心の神使の責務ってやつは？」

「ええと、今更説明する必要も無いと思ったのですが、理解しておられなかったのですか？」

「うん、どういう意味だ？まるで俺が知っていて当然のような口ぶりだな」

「はい、マスターは今に至るまでそれを忠実にこなしてらっしゃいましたから」

その答にああと思い当たるトオル。そういえばカヤもなんか言ってたなと。

「死霊達を魂送したことか、あれも魂の安寧（あんねい）と輪廻（りんね）の安定に尽くすことになるのか？」

「はい、その通りです。下界にて輪廻の輪に行かずに留まる魂を葬送することは、マスターの重大な責務です。同様に魂を穢す不死者（アンデット）

の抹殺もマスターの責務となります」

「不死者(アンデット)の抹殺ね…。それって、やっぱりヴァンパイアとかリッチとかを含むんだよな？」

不死者(アンデット)と聞いて、嫌な顔をするトオル。彼が記憶する限り、その類の高位のものはＲＰＧにおいてＢＯＳＳクラスの強敵や難敵であることが殆どだったからだ。

「ええ、そうなります。それにしても、よく知っておられますね、マスター。マスターのいた世界には魔法も不死者(アンデット)も存在しなかったはずですが、まさかマスターは遭遇した経験がおありなのですか？」

若干の驚きをもって答えるミユキに、トオルは苦笑して答える。

「そんなわけないだろ。もし、遭遇(そうぐう)していたら、ここにはいやしないよ。ただ、そういうものを描いたものは幾つもあったからな。それらではヴァンパイアもリッチも強敵だったが、やっぱりこっちでもそれは変わらないか？」

「はい、どちらも高位の不死者(アンデット)ですから。マスターも、今しばらくは戦う事を避けるべき相手だと愚考致します」

一縷(いちる)の望みをかけた問いだったが、やはりそんなに甘くなかったようだ。現状でも、十分反則な己でも戦うのを避けろと言う以上、相応の強敵であるのだろう。トオルは内心で深々と溜息をつかざるをえなかった。

そんな漆黒の死神の心中を余所に、熱心に授業を続ける白銀の妖精の案内のもとで、着々と森の出口へと近づく二人。漆黒と白銀の

主従が、あらゆる意味で、本当の実戦を体感する時が刻一刻と迫っていた。

ミユキの授業（後書き）

能力＆神器解説

『死神の耳目』：いわば、死神としての感覚のこと。魂等、本来不可視の存在を見る事でき、その声を聞き取ることができる。実際には、それに限らずその気配を感じることや、触れる事すら可能である。ゆえに、正確には耳目ではなく、死神の感覚というべきであろう。トオルにとって、霊魂が見え、その声を聞き取れるのが驚きで特徴的であった為、そう表現された。

『浄化』：魂から穢れをはらうことができる能力。霊魂や不死者（アンデット）の天敵ともいうべき能力であり、これが付与されているため、大鎌は対霊魂・不死者（アンデット）に対し、無類の力を発揮する。

『魂送』：カヤの御許に魂を直接送り届ける能力。本来、葬儀や神域を経なければ葬送されないのだが、この能力は問答無用でそれを省略する。実は、非常に危険な能力であり、この能力を発揮したトオルに殺された場合、蘇生の余地は全く無い。

『滅魂』：魂そのものを滅ぼし、その力を世界に還元する能力。その危険性は言わずもがなであり、この能力を発揮したトオルに殺された場合、蘇生の余地は全く無いどころか、魂を抹消され転生すら不可能になる。分霊箱を作り、本来それが滅失しない限り不死である存在などであっても、魂の一部でもこの力によって滅ぼされれば、死ぬどころか、永遠に世界から魂を抹消されることになる。

『絶対精神』：外部からのあらゆる精神的作用を受けない。トオルが『支配』を受けてその力を行使された為に、特別にカヤが付与した能力。この為、トオルは『魅惑』『混乱』等を引き起こす精神に

作用する魔術・現象が全く効かない。但し、デメリットもあり、『戦神の歌』などの士気・戦意高揚等のポジティブな効果をもたらすものも効かない。その為、『在るべき死神の姿』の効果により、本来死をもたらす死神として、戦闘や命を奪う恐怖を感じないはずであったが、この効果すらも弾かれており、自前の精神力で頑張る他なくなった。

『蘇生』：完全無欠な蘇生術。カードの時とは異なり、生贄も必要としない。必要なのは莫大なマナだけである。それすらもトオルは備えているので、何も問題は無い。しかし、トオルは自身の死因となった蘇生を心底嫌悪しており、使われることはまずありえないだろう。

『闇を扱う力』：詳細不明。

『在るべき死神の姿』：真紅の大鎌が持つ特殊能力で、トオルが思い描く『死神』を鎌を握った瞬間より、トオル自身の肉体・精神をもって具現化する。神業ともいうべき鎌の扱いと達人級の体術、そして『死神』としての能力を自由自在に使いこなす。ちなみに、トオルが現状で意識的に使えるのは『死神の耳目』だけであり、常時無意識発動の『絶対精神』を除けば、この能力を介して使用しているに過ぎない。但し、この時の記憶はトオルに残るので、それを元に自己研鑽することが可能。
非常に強力な能力であるが、真紅の大鎌の外見やトオル自身の外見年齢の幼さなどから、人の目のあるところではまず使えない能力となっている。また、真紅の大鎌はトオルの状態によって変化・成長する特性を持っており、この特殊能力も現状のトオルにもっともな必要なものとして現れているに過ぎない。

『闇の衣』：某魔王の絶対防…ではなく、装着者の環境を常に快適

に保つ効果がある。付随して、耐炎熱・耐氷雪等の効果がある。多少のブレスもへっちゃらで魔法防御性にも優れており、下位の魔法であれば完全に遮断する。中位以上には減衰効果がある。どう見ても布製にしか見えないにも関わらず、純粋な物理攻撃に対しても鉄製の鎧と同等の防御能力を持つ。また、隠蔽・隠密機能を持ち、装着者の意思に反応して気配を完全に消し去る。
つまり、これさえ着ていれば、襲撃や奇襲に怯えることなく、どこでも寝られる優れものである。また、トオルの『闇を扱う力』によって変化・成長する特性を持っており、この防御性能も現状のものである。

主人公の能力について語るのが今回の主題です。次の話の戦闘で、思い切りその能力を活用するんで、その前準備という意味合いが大きいです。ちなみに、今回紹介したので、全てというわけではありません。
万年筆と懐中時計は、元の世界とのつながりを示す心の拠所の一種と言う意味合いで持たせたもので、壊れない&インクがきれないくらいの効果しかありません。また、索敵指示の時に軍事的にやってしまった関係で、整合性を持たせる意味があったりします。

??（タロット）の能力

「くそ、なんでこんなことに！しかも、全然数減らねえし、どうなってるんだよ?！」

もう何度目か分からない悪態をつきながら、トオルは鎌を振るう。迫り来る死の恐怖を薙ぎ払い、生への渇望を示さんと。２メートル近い真紅の大鎌が月光を受けてほのかに輝きを見せて、同時に数体のゾンビがなす術も無く薙ぎ払われる。切り裂かれたゾンビ達はたちまちに動きをとめ、その形を失っていく。最初は驚いたその光景も、１０以上も続けば驚くどころか、動きを止めるにも価しない。それに今は、一瞬たりとも動きを止めるわけにはいかない。斬っても斬ってもわいてくる亡者の群れのど真ん中に、トオル達はいるのだから。

こんなこと…、ゾンビの群れを相手にする羽目になったのは、トオル達が神域である森の出口付近で小休止した後、神域をでてしばらくのことであった。当初、神域の周辺には救いを求めて死霊達がはびこっていると考え、ミユキの言を入れ万全の体制を整える為の小休止であったのだが、いざ神域外にでてみれば、死霊どころかいかなる生物も見受けられず主従そろって拍子抜けして、些か脱力していた。気合を入れて準備を整えたのに肩透かしだったのだ、仕方の無い事であろう。いや、本来なら気づくべきだったのかもしれない。魂が神の御許へと送られる道、『冥道』ともいうべき場所の周囲に、魂が一つも見受けられない不自然さを。

しかし、結果的に気づけなかった漆黒と白銀の主従に現実は甘くなかった。脱力し緊張が解けていた主従はみすみす奇襲を許してしまったのである。二人は、突如として異空間に放り込まれた。ミユ

キがそれを感知して、状況を主へと説明しようとした矢先に、彼らは凄まじい数のゾンビが自分達の周囲にいる事に気づいた。いや、気づかざるをえなかった。その時にはもう、彼らの目には歩み寄る亡者達が移っていたのだから。

そして、なし崩し的に戦闘に突入する。ゾンビは最下位の亡者とはいえ、初めて実体を持った敵に迷いがトオルに生じるが、それ以上に死んだはずの者達が動くおぞましさと、その外見の気持ち悪さ、そして何より死の恐怖と生への渇望それにが勝り、容赦の無い殲滅を彼に選択させた。以降、ひたすらに迫り来る亡者達を薙ぎ払っているのだが、一向に数が減る様子が無い。

しかも、トオルに確かめる余裕はなかったが、倒したはずの者達が混じっていることをミユキは確認していた。主の浄化&魂送&滅魂が付与された鎌で斬られているというのに、復活するのはありえないことである。まして、切り裂かれたゾンビ達はたちまちに動きをとめ、その形を失っていくことから、その能力は確かに効果を発揮しているはずである。だというのに、なぜ連中は復活できるのだろうかと彼女は強い違和感を感じ、考え込んでいた。

「私にも分かりかねますが、恐らくここが異空間であることと関係あるのだと思われます。」

ミユキは主の叫ぶような疑問に考えられる可能性を示唆するが、彼女自身理解が追いつかない状況に些か混乱気味だった。主同様に緊張を解いていたところに、突如異空間に放り込まれ、かつありえない現象を目にしているのだ。無理もないことであった。

「異空間?!道理で、草木一本も見当たらないわけだ。しかし、こいつら本当に亡者どもなのか?魂の声が聞こえないし、何より手応

えがなさすぎる！」

従者の言葉に感じていた違和感が勘違いでなかったことを確信するトオル。そして、同時に己が感じていたもう一つの違和感についても、気のせいではないという自信をもち、己以上の感知能力を持つ妖精に尋ねる。

「亡者ではない？…！！マスター、この者達には魂が感じられません！」

ミユキは主の思わぬ指摘に、そういえばと気づく。死霊やゾンビ等の亡者達は、自己の意思を確立している不死者（アンデット）と異なり、魂が剥き出しの存在であり、彼らの魂は常に救済を求めて声を上げているのだ。無論、言うまでもなく、常人には聞くことすらできない声なき声であるが、彼女とその主に限っては話が別だ。二人にとっては聞こえて当然のものであり、過去5日に行った魂送においても、それは常に聞こえていたのだ。だというのに、彼女達主従を包囲するように次から次へとわいてくるゾンビ達からは、声どころか魂の存在を感じとれないことに、ミユキは今更ながらに気がついた。

「やっぱりかよ！つまり、こいつらは亡者ではないってことか？」

ミユキの言葉に我が意を得たりと頷きながら、トオルは鎌を一閃する。真紅の輝きを放つ死神の斬閃にたちまちにその姿を失うゾンビ達。やはり、手応えはなく、魂送時に聞こえる感謝の声もない。その様に彼は確信する。こいつらは亡者ではない。もし、亡者であったとしても、通常のそれとは明らかに異なると。

そもこの世界における亡者とは、死霊やゾンビなど死んだ者を指す。しかし、彼らは魂を失ったわけではなく、この世界に留まって

いる者達である。肉体から分離した状態で留まっている者達が死霊をはじめとした霊魂達であり、死した肉体に留まったままの者達がゾンビである。不死者（アンデッド）は、こういった存在が、自己の意思を確立したもの、あるいは自己の意思を保ったまま、それに至ったものであり、グールやリッチ、ヴァンパイア等がこれにあたるわけである。ここで重要なのは、いずれの存在も魂を持ち合わせているということである。それが存在しない以上、通常のカテゴリにはあてはまらないと考えるべきである。

「はい、少なくともこの者達は純粋な亡者とはいえません。それに浄化、魂送、滅魂の効果を受けて尚復活していることを考えると、この者達は実体をもった影のような存在かと思われます」

「つまり、実体をもつ幻というわけか？道理で次から次へとわいてくるわけだ…。
ミユキ、これを操ってる奴がいるはずだ。そいつを探し出せ！」

魂を持たぬ者が、自己の意思で動けるはずがないので、それは当然の結論であった。それに着実に動きを制限するように包囲を固めるゾンビ達の動きは、確固たる意思が感じられる。すなわち、これを操る操者がいるのは明らかであったからだ。

「了解しま「あらら、もう気づかれちゃったか」…」

主の意に了解した旨を告げようとした妖精は、どこか場違いなのんびりした声に遮られ、同時に彼女は異空間から消失した。

「ミユキ？！……あんた誰だ？」

従者の突然の消失に慌て、トオルはミユキののっていた肩をみや

り、次いで周囲を確認するが、白銀の妖精の姿はどこにも見受けられない。それどころか、先ほどまで自分達を包囲していたゾンビ達の姿すらない。襲撃が嘘だったかのように静まり返った空間には、そのかわりといわんばかりに妙齢の金髪の女性がただ1人立っていた。

「初めまして御同輩、いえ、??の死神というべきかしら?私はルクレティア。貴方と同じ世界の人間にして、『<??>　死神』の初代所持者よ」

「俺と同じ?『<??>　死神』の初代所持者だと?……いや、そんなことより、ミユキをどうした!」

予想外の自己紹介にしばし呆然とするトオルであった。一瞬、それについて深く問いただしたい心情にかられるが、今はそんなことは重要ではないと思い直し、彼にとって最重要である従者の安否を尋ねる。

「あら、私の自己紹介に疑問はなし?余程、あのオチビちゃんが大事なのね…。できれば私も答えてあげたいところだけど、生憎と私は知らないわ」

拍子抜けしたように言うルクレティアだが、一方で感心したような色も見受けられる。自身に対する疑問を棚上げにして、何よりも従者の安否を尋ねたのが、彼女のお気に召したようである。

「なんだと!どういうことだ?あんたがミユキになんかしたんじゃないのか?!」

だが、そんなことは今のトオルにはどうでもいいことであった。

それよりもルクレティアの言葉の意味の方が重要であった。

「だから、そのままの意味よ。私はあのオチビちゃんに何もしていないし、どうなったのかも分からないわ」

疑われるのは心外だといわんばかりに答を返すルクレティア。その表情は平静そのもので、変化は見られない。だが、トオルはその答を聞いて、対照的に表情を苦々しいものとする。

「嘘じゃないか…。だとすれば、一体何が？」

「安心しなさい。オチビちゃんは無事よ。彼女がオチビちゃんを害する理由が思いつかないし、そもそもわざわざ自分で創り出しておいて、今更どうこうしないでしょ」

ミユキの身に何が起きたのか考え込むトオルに、ルクレティアは安心させるように、それでいて彼にとっては爆弾同然の答を落とした。

「ミユキをこの場から退場させたのは、カヤの仕業だっていうのか？！しかし、一体、何の為に？」

どこか信じられぬ様子で呆然と呟くトオル。

「『カヤ』ね…。彼女をそんな風に呼べるなんて、貴方は本当に特別なのね。流石は唯一の本物。私達、紛い物とは違うというわけね…」

そんなトオルに対し、ルクレティアは嫉妬の色を滲(にじ)ませて、苛立たしげに呟く。先程までの余裕ある態度とは違い、一変して表情は

厳しく、殺意すら放っている。

「俺が特別？一体、何のことだ？」

一変したルクレティアの態度に戸惑いながら、トオルは疑問を返す。

「ふふ、彼女を特別な名で呼ぶのを許されていることが、どんなに凄い事か理解しているかしら？それに、そんなことがなくても、そもそも貴方は特別よ。彼女から聞かなかったかしら…。貴方は、『神創のタロット』によって、生まれた初めての神使だって」

「確かに聞いたが…そうか、あんた、いや貴女は…」

ルクレティアの言にトオルは自然理解せざるをえない。己が、『神創のタロット』によって、生まれた初めての神使だと言うのなら、初代所持者であったという目の前の女性は…。

「理解したようね。そう、貴方こそは『＜？？？＞　死神』の１３代目所持者であり、唯一無二の主『？？の死神』。そして、私を含めた１２人は、神使になれなかった紛い物の主というわけ」

あまりにも異なる両者の在り様を明確に示したその言葉は、二人しか存在しないその空間に冷厳に響いたのだった。

白銀の妖精がその意識を覚醒させるた時、彼女がいたのは共同生

活五日目にして、すでに定位置となりつつあった主の肩の上ではなかった。そこは彼女が生まれた場所であり、懐かしさを感じさせる母なる大神の御許であった。

「御方様?！一体、なぜ?いえ、そんなことよりマスターは！」

あまりの事態に、普段の冷静沈着さを失い、それでいてなおも主の安否を真っ先に気にする姿は、従者の鑑(かがみ)といえよう。しかし、それを見る大いなる存在にとってはどこか滑稽で、笑いを誘った。自然笑みがこぼれる。

「ふふふ、そう慌てずともあやつは無事だ。安心するがいい」

「笑い事ではありませんし、安心などできません！マスターは私がいないと…。今すぐ、マスターの元へお戻し下さい！」

だが、ミユキにとってはそれは不快なものでしかなかった。今は無事だと言うが、安心などできようはずもない。主が戦えたのは、自分あってものだと彼女は理解していたし、主の心が平静を保っていられたのも自分のおかげであることを悟っていたからだ。そう、主の心は未だ弱いのだ。一人で立てる程の強さはないと彼女は考えていたからである。

「ほう、我の言を否定するとはお前も偉くなったものよな」

予想だにしなかった妖精の反発に、カヤは容赦のない威をもって応じる。たちまちに、ミユキはその動きを封じられ、言葉を紡ぐ事すら困難になった。だが、それでもミユキはきれぎれになりながらも、言葉を紡いだ。

「わ…た…しごときが…御方…様に…意見する…など、ご無礼…である…ことは…百も…承知…ですが、何卒…私…のね…がいを…おきき…とど…けくだ…さい…」

白銀の妖精は、その弱々しい様子とは裏腹に、眼光は鋭く強い意思を宿していた。

「ほう、それそれ程までにあやつが大事か。我が威を前に屈するどころか、意思を折らず言葉すら紡いでみせるとは大したものよ。何がお前をそうまでさせるのだ？」

屈しない妖精に内心で感嘆しながら、一方でさらに神威の圧力を強めつつ問う。

「……」

その圧倒的な神威の前に、今度こそ言葉を紡ぐことすらできなくなったミユキであったが、それならばとただ黙って母なる大神を仰ぎ見る。その目には強固な意思が変わらずにあった。

白銀の妖精がここまで頑張れたのは、けして主への忠誠心が理由ではない。それがないとはいわないが、むしろ逆の護ってあげなければという母性本能の発露ともいうべきものが、大部分を占めていた。

ミユキは精神が脆弱（この世界の者に比べて、戦闘や殺生への忌避感が強いという意味で）な主が、己自身とミユキを護るために必死に恐怖と戦い、けして逃げることなく戦っていたことを知っている。それには男としての見栄や、半ば開き直りに近い自棄（やけ）というものを多分に含んでいたが、彼はけして彼女を見捨てることはしなか

ったし、囮にしたり、八つ当たりするようなこともなかった。僅か5日ではあるが、その5日は彼女の生の全てである。主に時に頼られ時に護られ、心の拠り所とされるのは、けして悪いものではなかった。むしろ、次第に成長していく主の姿に喜びすら覚えたものである。それを自覚したとき、彼女はこう思った。主の行く末を、その生の全てを結末まで見てみたいと。それも、最も近い場所で…。

「ふふふ、ここまでやっても折れぬとは大したものだ。その意思に免じ、まだあやつの元へと戻すわけにはいかぬが、姿くらいは見せてやろう」

そんなミユキの心情を知ってか知らずか、カヤは今度こそ神威を弱め、心から称賛した。己が創造主に逆らうなど、創った当初の妖精からは考えられないことだったからである。

そして、その褒美として、虚空に手をかざす。

「マスター！」

虚空に映し出された主の現状に、従者たる妖精は思わず叫びを上げた。それを愉快げに見つめるカヤ。

――さて、第一、第二試験は合格といったところだが、最終試験はどうかな？

――お前と同じ適格者、しかも力の使い方は遥かに上の相手にただ1人でどう対処する？

全てを仕組んだ大神は、焦る妖精とは対照的に内心を表にださず、ただ悠然と微笑むのだった。

ミユキがトオルの姿を確認したとき、彼は再び危機的な状況にあった。

「くそ、またこれかよ！」

ぼやきながら、迫り来るゾンビ達を薙ぎ払うトオル。しかし、相変わらず手応えはなく、魂も感じられない。ルクレティアの仕業であることは明らかであったが、彼女に近づこうにも周囲を囲むゾンビ達がそれを許さない。幸いゾンビ達の動きは鈍く、彼をとらえるには至らないが、限がない。斬っても斬ってもわいてくるのだから。

正直な話、このままではジリ貧であった。『在るべき死神の姿』の効果のおかげか、肉体的疲労は全く感じない。しかし、何の強化も補助も受けていない精神の方は話が別である。肉体的には、永遠に戦い続けられたとしても、その前に精神が限界を超えるからだ。ましてや、ゾンビ達はその外見だけでも、死霊などより遥かに怖気（おぞけ）がたつ。死霊相手なら、今なら一昼夜でも戦い続けられるだろうが、ゾンビ相手ならその半分の時間が関の山だろう。しかも、明確に数が減る死霊に対し、こちらには限がない。あるかもしれないが、彼には実感できない以上、ないものと同義である。その不毛さは、否が応にも精神の磨耗（まもう）を加速させる。はっきり言って、このままでは敗北は避けられない状況であった。

「ふふ、凄いでしょう？これが私の『＜？？＞　死神』を用いて使える固有能力『影の軍勢（シャドウレギオン）』よ。効果は見てのとおり、取り込んだ魂を実体を持ったシャドウとして召喚し操れる。シャドウは一撃を食らえば消滅するけど、魂が私の手元にある限り何度でも無限に召喚できる。限界なんてあると思わないことね。もう、諦めちゃった方が楽になれるわよ」

そして、それに追い討ちをかけるように非情な宣告がなされる。この死の舞踏に終わりはないと。あるとしたら、それはお前の死であると。

「そんな感簡単に諦めてたまるか！大体、なんで所有者でしかない貴女が、こんな凄まじい能力を使えるんだ？」

必死にその誘惑を撥ね退けるように叫ぶトオル。最早、破れかぶれで答が得られないことを承知で、疑問すら呈した。

「うん？貴方、知らないの？いえ、本当に分かってないのね。まあ、いいわ。教えたところで、私の優位は揺るがないし、特別に教えて差し上げましょう。
貴方は、『神創のタロット』が神使を生み出す力をもっているのは知っているわね？」

「ああ！それがどうしたって！」

答えながらも、めまぐるしく場所を変えるトオル。会話の最中にも隙（すき）を窺（うかが）う。

「神々がタロットに与えたのはその力だけだった。しかし、そこで思わぬことが起きた。神の力を宿したことにより、元々タロットのアルカナの意味に対応した力が、所有者に発現したのよ。つまり、所有者はタロットに宿る神の力だけでなく、所有者個人の資質に対応した固有能力を使うことができたわけね。それが、私の『影の軍勢（シャドウレギオン）』であり、貴方が何の心得もない一般人にもかかわらず、見事に戦えている理由というわけ」

だが、そんなことはルクレティアも織り込み済みである。シャドウ達を見事に操り、接近さえ許さない。

「つまり、神使とは別の力として、『＜？？？＞　死神』に対応した固有能力があるということか…」

隙のない操作に内心で舌打ちしつつ、最終確認するトオル。

「そうよ。まさか、今まで気づいていなかったとはね。正直、驚きだわ。まあ貴方のは無意識発動型みたいだから、仕方のないことかもしれないけどね。
ちなみに私の『影の軍勢（シャドウレギオン）』は、死神が行く先々で人々の魂を刈り取る「死の行軍」からきているんでしょうね。それに私の自身の手を汚（いと）すことを厭う性情が合わさって生まれた能力よ。貴方のは何というべきかしらね？」

少し呆れながら、余裕を見せつけるかのように語るルクレティア。そうは言いながらも、実のところ彼女は苛ついていた。どう見てもジリ貧のはずのトオルが、悪態をつきながらも、一向に疲れた様子や諦めを表情に出さなかったからである。

これは、『在るべき死神の姿』の効果によるものであった。確かに精神的な効果は、『絶対精神』によって無効化される。しかし、肉体に対しての効果は有効なのである。すなわち、表情筋によってつくられる表情もその範疇（はんちゅう）であった。トオル自身に自覚はなかったが、彼が内心でどれだけ焦ろうが、慌てようが彼の表情に変化はない。彼が思い描く死神そのものに無表情のままである。それにミユキがいないことで、余裕がないこともあって、機械的に作業のようにシャドウ達を刈り取ってく様が拍車をかけ、ルクレティアに実情とは異なる誤解を与えていた。

「限がないか…。どうやら、この程度の有象無象がいくら集まろうと、貴方には通用しないみたいね。それなら、貴方に相応しい相手を用意してあげる！
お出でなさい、私の騎士達！パーシル！ランス！グレイ！ディード！」

その誤解は、ついにルクレティアに切り札を切らせることとなった。叫びと共にシャドウ達が姿を消し、彼女の周りに４つ人間大の闇の塊が発生する。

シャドウ達が消え去った絶好の機会を逃がすものかと、瞬時にルクレティアへと斬りかかるトオル。どんな力であろうと、その原因さえ断ち切ってしまえば怖くはない。そう考えた彼は、闇の塊が形を成す前にと決死の覚悟で彼女へその牙を剥いたのだ。

しかし、それは無情にもルクレティアに届かなかった。決死の覚悟で振るわれた真紅の斬撃は、闇の塊から生じた大剣によって阻まれた。

「なっ？！」

驚愕に声を漏らすトオルであったが、状況はそんな彼を待ってくれない。同じく闇より生じた槍が突きこまれ、寸でのところで転がることで回避する。さらに、そこに逃がさぬと飛んでくる３本の矢。２本まではかろうじて回避したが、１本は無情にも彼の肩を貫いた。灼熱の痛みがトオルを襲う。なんだかんだいいながらも、これまで攻撃による大きな傷を負ったことがなかっただけに、その衝撃は凄まじい。

しかし、それでもトオルは痛みに耐えて、立ち上がってみせた。彼にとってその痛みは、初体験でなかったからこそできたことであった。正確には、彼はもっと強烈な痛みを受けたことがあった。幼少の頃から怪我が絶えなかった彼は、実に１００針超える縫痕があり、自身の骨すら生で見たことがあるという変人である。骨折、火傷、刺傷、裂傷、全身打撲に至るまで、彼はおよそ外科的治療が必要な怪我を一度は体験していたのだ。ゆえに、痛くてもやせ我慢は得意である。

トオルは歯を食いしばり、刺さった矢をへし折って抜く。幸い鏃（やじり）は貫通していたので、傷を広げることにはならなかったが、ダメージは明らかであった。それに闇の衣を貫通して刺さったということは、鉄の鎧を射抜くほどの矢をほぼ同時に3本も放てる者がいるということである。それを悟り、相手を確認せんとルクレティアの方を見やり、彼は戦慄した。

ルクレティアの周囲に、彼女を護るようにして4人の男が立っていたからだ。

1人は、身の丈と等しい大剣を持つ浅黒い肌の戦士。

1人は、大盾と斧槍（ハルバート）を持った全身鎧に身を固めた重装の鎧騎士。

1人は、両手に短剣を持った身軽そうな軽戦士

1人は、弓矢を持ったエルフの狩人

しかも、いずれも手練である事が、雰囲気から分かったからだ。

「ふふ、どう？数では物足りないみたいだから、質で対抗してあげたわ。彼らは、私の生前の伴侶達。いずれ劣らぬ精鋭よ。これまでのシャドウとはわけが違う特別製のシャドウよ。貴方に彼らが倒せるかしら？」

ルクレティアの得意げな言と共に、忠実なる4人の男達は動き出

した。鎧騎士がルナフィアの守りを固め、狩人がその後方から矢を射る。戦士が大剣を振りかざし、軽戦士が迂回するようにトオルに突っ込んでくる。トオルにとっての地獄の始まりであった。

矢は正確無比な精度で襲ってくるし、戦士の一撃は直撃すれば致命傷だし、軽戦士の攻撃は素早く確実に急所を狙ってくる。反撃しようと最も隙が大きい大剣使いを狙っても、軽戦士が巧みにそれをカバーしてくるし、狩人には接近すら難しい。大元であるルクレティアには鎧騎士が万全の護りを敷いており、突破を試みようとしても、鎧騎士を倒す前に他の3人に殺されるであろうことは目に見えていた。彼らの連携は完璧だった。加えて、やせ我慢しているとは言え、肩の傷は痛むし、どうしても動きを阻害する。正直、どうしようもない状況であった。

――こんなところで死ぬのか？

――勝手に殺されて、勝手に第二の生を与えられて

――また、嫉妬だかなんだか知らないが、わけも分からない状況でまた…

――そんなこと認められるはずがない！

だが、それでも尚トオルは諦めなかった。いや、認められないというべきか。彼は無数の傷を受けながらも致命傷だけは避け、己の理不尽な死の運命に怒り抗おうと必死に考えを巡らす。

――特別製とはいっても、あの女が操っているのは間違いない

――つまり、奴らの相手を馬鹿正直にする必要はない。出し抜いて、あの女を殺せれば勝ちだ

――しかし、そもそも俺に殺せるのか？生きる為とはいえ、殺人を犯すことが…

――考えるな…いや、考えるべきだ。土壇場（どたんば）で躊躇（ためら）えば、死ぬの

は俺だ
――だが、まずは実行方法を考えるべきだ。殺せる殺せないは可能性を考慮してからでいい
――正攻法…無理。明らかに相手のほうが強い
――なら、何かの能力を使って、奴らを出し抜くしかない
――現状把握している能力では不可能。可能性があるのは、『闇を扱う力』のみ。未知数、却下
――なら、もう手は…。いや、待てよ。今、把握していない能力ならだどうだ？
――他ならぬ奴が言っていた。タロットの固有能力だ！
――『停止・損失・死と再生』に正位置「終末、破滅、離散、終局、清算、決着、死の予兆」
――逆位置「再スタート、新展開、上昇、挫折から立ち直る」あとは絵自体にまつわるもの
――白紙になったことから、俺は、タロット『＜？？？＞　死神』の全てを手に入れている
――いずれも使える可能性がある！この中で、使えそうなもの、必要なものはなんだ？

圧倒的劣勢に立たされているトオルを見て、ルクレティアは己の勝利を疑っていなかった。確かに、それは正しかった。数秒前までは。

「『在るべき死神の姿』だ」

「え？」

絶え間なく襲ってくる矢と斬撃を捌きながら、短く答を返す。今さら答が得られると思っていなかっただけに、思わず呆気にとられて間抜けな声をだしてしまうルクレティア。

「だから、素人の俺がこうして戦えている能力の名だ。『在るべき死神の姿』という。簡単に言うと俺が思い描く死神を体現できる」

一秒たりとも同じ場所にいないというくらい動き回っているのに、律儀に説明するトオル。それにルクレティアは不審を覚えずにはいられない。

なぜ、このタイミングで説明するのか。確かに強力無比な能力であり、説明したところで対策がとれるわけでもなし、これといったデメリットはないだろうが…。それでも彼女と違い余裕があるわけでもない。わざわざ自身の手札を敵に明かすことはないだろう。それに固有能力を知っているなら、なぜ彼女に疑問を呈したのだろう？固有能力は、神使だけしか使えないと考えていたのだろうか。

――なるほど、それなら説明がつくけど…。それでも、やっぱり説明した理由が不明ね。

ルクレティアは油断なくシャドウ達に命令を発しながら、思索にふける。しかし、どうにも説明がつかない。少なくとも、自分には思いつかない。そこで、改めて相手の言動を思いだして、ふと気づく。

――神使としての力とは別に力があることを確認してきた。

――つまり、この子は神使としての能力は把握していたということ？

――そして、この子は『在るべき死神の姿』が自分の固有能力とは一度も言っていない！

結論：『在るべき死神の姿』は神使としての能力であり、固有能力ではない

その答に至ったとき、ルクレティアはその結論が間違っていないことを最悪な形で確認することになった。突如、動きを止めた戦士と軽戦士の姿によって…。命令は発しているというのに動かない。何が起きたというのか？

「なっ、これは…？！」

「俺の固有能力だ。『停止』、俺が触れた万物を停止させる。」

あまりのことに愕然としたルクレティアに、先程までとは一変した落ち着いたトオルの声が届く。同時に戦士と軽戦士の合間をぬって、飛び込んできたトオルに鎧騎士が一瞬にして両断される。完全な連携を誇っていただけに、急遽生じた穴を補えなかったのだ。いや、彼らに意思があれば別だったろう。だが、彼女の命令なしには動けない人形同然の彼らにとっては、その一瞬は致命的だった。彼女の戸惑っている隙に矢は途切れ、鎧騎士も動きを止めてしまったのだ。

「『停止』？触れてないじゃない！どうやって動きを止めたって言うのよ？！」

半ば狂乱の体で叫ぶルクレティア。目前には、真紅の大鎌を振りかざした漆黒の死神の姿がある。狩人の矢では間に合わないし、戦士二人も動けるようになってはいたが、距離がありすぎる。彼女の死はここに確定したのだ。

「直接触れなければならないと言った覚えはない。まあ、冥土の土産に教えてやる。『影』だ。『影縛り』とか『影踏み』とかいうだろ？」

切り裂かれ、倒れ臥したルクレティアに、トオルは無表情で淡々と答を告げた。

「か、影？」

「そうだ、俺が持つ『闇を扱う力』で影を操り、連中の影を縛った。位置的に一撃で殺せる距離に二人がいなかったので、動きを止めた連中の間を縫って強襲。貴女が驚きで思考停止に陥っていたのが幸いして、鎧騎士を葬れた。後は貴女が立ち直る前に接近してしまえば、終わりというわけさ」

「私が思考停止さえしなければ…。いえ、そもそも敵う筈がなかったのよね。タロットの力、全てを手に入れた『？？の死神』に、紛い物の…死神である…私が勝てるわけもな…い…か…」

そう言って、事切れるルクレティア。その遺体は、しばし後に光の粒子となって、空間に溶けていき、４人の男達も姿を消す。だが、トオルにはそれを見届ける余裕はなかった。

「殺した…、俺が殺した。人をこの手で…。容赦なく…躊躇いなく……」

トオルはその場に頭を抱えて蹲ってしまった。

そう、トオルは別に殺人について割り切れたわけではなかった。彼は、己の心を『停止』させていただけなのである。彼が『停止』させたのは戦士二人だけではなく、己が心も対象だったのである。そうすることで、彼は躊躇うことも、迷いを抱くこともなく、容赦なくルクレティアを殺せたのであった。

そして、『清算』の時は訪れた。全てが終わった後に。罪悪感、殺人への忌避感、人殺しとなったことに対する後悔、殺した人への懺悔等、凄まじい感情の奔流がトオルの心中で荒れ狂う。一般人でしかなかったトオルは必死に自分に言い聞かせる。

「仕方がなかったんだ…。殺さなきゃ殺されてた…。襲ってきたのはあっちだ。これは正当防衛なんだ…」

言葉を重ねても、いや、重ねれば重ねるほど陳腐（ちんぷ）に聞こえてしまう。そして、本当に殺す必要はあったのかと、他の方法はなかったのかと、心が問いかけてくる。人殺しとなってしまった悲しみからトオルの目からは涙が止まらず、人殺しとなった己への嫌悪と罪悪感によって何度も吐いた。それはどうしようもないことであった。後悔しようが、何をしようが、彼が人を殺した事実は変わらないのだから。

このまま放っておけば、トオルの心は壊れるであろうことは明らかであった。だが、彼には彼を救わんとする者がいた。

「マスター！」

それはこの世界において、もっとも信頼する従者たる白銀の妖精であった。

「ふむ、あれがあやつの固有能力か。『停止』とは考えたものだ。それに影を使うとは、あえて『闇を扱う力』は教えなんだというのにな。よくぞ思いついたものだ」

「はい、流石はマスターです！」

感嘆するように言うカヤに歓喜し、主を称賛するミユキ。

しかし、すぐに二人の顔は暗いものへと変わる。トオルが蹲り、涙を流し吐くものがなくなって尚嘔吐する様子が目に映ったからだ。

「あちらの世界では、争いごとと無縁の一般人だったことは知っていたが、これほどまでに殺人を忌避するとはな…」

些か驚きながら、深く後悔するカヤ。必要なことではあったが、殺人を強いたのは他ならぬ彼女自身である。まさかこれほどのものとは予想だにせず、急ぎすぎたという感も否めず、己の軽挙を呪わずにはいられない。

「今は悔やむときではありません！私を早くマスターの元へ！あのままではマスターが壊れてしまいます」

「そうだな、すまぬ。…これをもっていけ」

ミユキの言葉に我を取り戻すと、カヤは懐から美しい装飾が施された神秘的な笛を取り出した。

「笛？これは？」

「我が子たる妖精神がその昔に謙譲してきた笛だ。その音色は聞く者の魂を癒し活性化させる。あやつに聞かせてやれ」

「ですが、私にはとても…」

笛は明らかに人用のものだ。己とと同じくらいの大きさの笛を吹くことは流石に無理があるというミユキ。

「第一解放を許す。あやつを救ってやれ」

「！！…よろしいのですか？」

第一解放、妖精が驚愕をもって、また確認するほどに重要なことであった。

それを躊躇(ちゅうちょ)なく許し、神器である笛まで与えるのだから、カヤは相当に責任を感じていたのであろう。

「構わぬ。今回のことは我に全責任があるのだからな」

「承知しました。必ずやマスターを！」

誓うように応えると、言うが早いかミユキは主の下へと飛んだのだった。

「マスター！」

ミユキが声をかけたとき、トオルは酷い有様であった。彼女の声も届いていないようで、己が罪に震えて涙を流し、ひたすらに許しを請う有様であった。

「マスター、今助けて差し上げますからね」

一刻の猶予(ゆうよ)もないとみたミユキは、躊躇わずその力を解放する。一瞬後には、いつかトオルが幻視した漆黒の6枚羽を持った白銀の髪が美しい女性がそこに立っていた。その女性は、懐から笛を取り出し、おもむろに奏でだした。

♪♪♪♪♪♪♪~♪♪♪♪~♪♪♪

優しい音色がトオルを包み込むように響く。そして、音色が彼に染み渡っていく。徐々に彼の震えが治まり、延々と続けられていた懺悔(ざんげ)と謝罪の言葉が止まる。そして、とうとう彼は顔を上げて、音源を見やった。

「…ミユキなのか？」

「はい、マスター。遅ればせながらお傍に戻りました。何卒、今しばらくは心安らかに」

なぜだか、トオルは目の前の女性が、ミユキであるとわかった。震える声で確かめるトオルに、初見で自分であることを見抜いたミユキは嬉しさを隠さず、同時に主をいたわるように抱きしめる。

「ミユキ、俺は…人を「知っています」…そうか」

「マスター、良いのです。もう我慢する必要などありません。泣いてください。マスターの感情を私に全てぶつけてください」

されるがままにミユキの胸に顔を埋めるトオル。その独白をミユキはあえて止めた。言葉にすることで、主の心が傷つかぬように。そして、これ以上殺人という罪業に主が囚われないようにする為に。

今さらではあるが、思えば主は元々限界だったのだ。強制的に異世界に召喚され、操られて魂を捧げさせられて殺された。そして、拒否もできずに神使にされ、戦いを強いられた。これで正気を保てというのが無理な話だろう。むしろ、今までもったのが不思議なほどである。そして、主をここまで追い詰めたのは、間違いなくミユキにも責任の一端がある。彼女はそれを自覚せざるをえなかった。

だから、ミユキは主に泣いて欲しかった。己の死の理不尽に、強制された運命の過酷さを嘆いて欲しかった。他でもない主自身に。でなければ、あまりにも主が救われないと彼女は思ったのだった。

――貴方の痛みを共有することはできないけれど
――せめて貴方の感情を受け止めさせて欲しい
――私は貴方の為に存在するのだから

ミユキの想いが届いたのか、トオルは堰(せき)が切れたかのように泣き、感情を吐き出した。この世界と運命に対する憎悪を、不満を、そして全ての理不尽を嘆いた。それは夜が明けるまで、トオルが泣き疲れて眠るまで続いた。ミユキは何も言わずに、ただただ主を抱きしめ続けた。片時も離れず、全ての災厄から主を護るように、主の悲しみを癒すように。

そのおかげか、白銀の妖精に見守られて眠る男の顔は、安らかなものであったそうな。

??（タロット）の能力（後書き）

今回は、異世界もの定番というべき、殺人への恐怖とその克服の話でした。本来は、タロットによる固有能力の話だったのですが、書いているうちにこんな方向へ。『死神』である以上、人の死は避けて通れませんし、復讐という目的の為にも必要なことですから。そこで、普通の人に殺人は無理なので、『停止』を使って無理矢理やり遂げたというわけです。当然、停止していただけで、感情がないわけじゃありませんので、後でその衝撃をもろに受けることになります。ちなみに、本当の意味での殺人は犯していません。ルクレティアはすでに死人であり、カヤがトオルの最終試験の為に再現復活させたに過ぎないからです。まあ、そんなこと知らないトオルにとっては、意味がないですが…。

しかし、ミユキさん働きすぎな感じです。案内役に教師に心の支えと八面六臂の大活躍です。元々、彼女はかなり大きな役割を果たす予定でしたが、それをすでに超えている気がします…。

異世界種族との初遭遇

「ようやく人里か…。遠い、遠すぎだって。もう少し、こっちの事情を考えて場所を選んで欲しいよな」

漆黒の少年が、不満たらたらな様子でぼやく。１０日以上、ひたすら歩き続け、ようやっと視界に村をとらえたのだから無理もない。

「た、確かにそうですけど、必要なことでしたから。ねっ」

内心で同意しながらも、白銀の妖精が顔を若干ひきつらせて、生みの親であるかの大神をフォローする。いわずと知れた漆黒と白銀の主従、トオルとミユキであった。彼ら二人は森を出てから、１０日余り歩き詰めで、ようやっと人里の近辺へと至ったのだった。

「必要なことか…。そうだな、そうかもしれないな」

トオルは、その言葉を噛み締めるように己でも繰り返すと、万感の思いを込めて同意する。確かに必要なことだったと。

実際、あれは必要なこととだったと、トオルは考える。思い出すだけでも恥ずかしいが、己がどこか現実としてこの世界を捉えていなかったのだ。復讐がなんに繋がるのか、その意味を全く考えずに、口先だけで復讐を口にしていた。覚悟もなく、意思もなく、流されてただその方が楽だったから、深く考えずにそれを目的としてしまった。この世界で生きるということを、その意味を軽視して。

その結果、トオルは森を出てすぐの戦闘で、それらを完膚なきまでに崩されてしまった。生きることの意味、殺す覚悟、己の目的等、何もわかっておらず、何も定まっていないことに気づかされてしま

ったのだ。そして、自分が強がっているだけ、分かっているふりをしているだけだということを認識せざるをえなかった。

その為に従者たるミユキの前で、酷い醜態を晒してしまったのは、一生の不覚であった。はっきりいて、赤面ものどころか、思い出すと死にたくなるレベルの己の情けなさ・不甲斐なさであった。おかげで、翌日目を覚ましてから、二、三日はミユキの顔を直視することができなかった。

あの姿はなんだったのか、あの笛はどうしたとか疑問は尽きなかったのだが、情けないところを見られて、今まで頑張ってはってきた見栄とか、男としてのプライドとか、そういったものがことごとく崩壊してしまい、恥ずかしいやら情けないやらで、トオルはいっぱいいっぱいだったのだ

そんなトオルを救ったのは、やはりミユキであった。主想いの白銀の従者は、何事もなったようにそれまでと同様の態度で、接してきたのであった。このことに彼は当初困惑したが、彼女の言葉や行為の節々から、己への思いやりを感じ取り、これ以上情けない姿を見せられないと奮起させることとなった。最初こそ、たどたどしく話す程度であったが、今現在では戦闘以前と同様に、いやそれ以上に親しく話せるようになっていた。己の最も情けない姿を見られたせいか、トオルはある種開き直っており、この妖精になら、何を見られても構うまいと考えるようにすらなっており、一方で主の弱い部分を見てしまったミユキは、トオルに対する庇護欲を増して、トオルを守らなければという思いを新たにしていたから、そのせいかもしれない。

主従の絆は変わらず、いや、むしろ強固になったというべきだろう。

そして、トオルにも大きな変化があった。彼は積極的にその力を

使いこなす修練を始めたのであった。積極的に魔獣や死霊達に挑みすらしたのだから、平和ぼけした一般人であった以前の彼からは考えられない凄まじい変化であった。

『死霊の森』は、神域というだけあって半端じゃなく辺鄙なところにあった。そのせいで、実に１０日以上歩かされたわけだが、１０日もかっかったのは距離だけが問題ではない。他ならぬトオル自身の行動にも問題があった。彼は、１日の６時間を睡眠に、もう６時間を移動に費やし、残り全てを修練にあてたのだ。それは神使としての能力はもちろん、タロットの固有能力まで多岐に至った。

中でも彼が最も重視したのは、魔獣を標的とした『狩』であった。最初は野生動物を狙ったのだが、彼の放つ死の気配に怯え、近づくことすらしてこない始末で、とてもじゃないが狩など不可能であった。予想だにしない力の弊害であった。ゆえに、そんなものお構いなしに襲ってくる魔獣を標的にしたのだ。これは狩を通して、戦闘技術を磨くと共に、何より言葉は悪いが『殺す』ということに慣れるためであった。

人族と魔族との争いが日常的に行われているこの世界において、『殺せない』とはある意味致命的な弱点だったからである。殺し殺されるのが普通であり、その覚悟のない者が生き残れるほど、この世界は甘くなかったのである。ましてや、トオルはこの世界では何の寄る辺もない人間である。村や町で平穏な生を送ろうにも、後ろ盾もなく、なにより致命的に先立つものがなかった。そして、本当に復讐を果たさんとするなら、絶対に必要な覚悟であった。

現代の普通の日本人よりは、怪我や血に対しての耐性は高いトオルであったが、『殺す』ということに関しての忌避感は、なんら変わらない。彼は人を殺すどころか、鶏をしめたことすらないのだ。思いがけず『殺人』を犯してしまった彼だったが、それだけで慣れ

る事などできるはずもなかった。ゆえに、『殺人』という同族殺しからランクを下げ、人に害をなす魔獣を殺すことにしたのである。

とはいえ言うは易く行うは難くで、当初は追い詰めても殺せないで逃がしてしまうこととなった。『停止』も使わずにいた為、当然といえば当然の結果であった。そこで翌日は『停止』を用いて、狩に臨んだ。幸い、これはうまくいき、1回目であっさり『殺す』ことに成功する。これ幸いと狩を続けることになるが、実際には狩った後が酷かった。『停止』をきった瞬間に襲い来る感情の波に、トオルは苦しめられることになったのである。嘔吐(おうと)や嗚咽(おえつ)は数え切れぬほどしたし、恐怖と罪悪感で全身が震えて動けなかったのは一度や二度ではない。彼は、これを克服するのに、実に5日の時を必要とした。

次のステップとしてトオルは原点に戻り、『停止』を使用しないで狩を行った。しかし、やはり『殺す』ことへの忌避感はいかんともしがたく、後一歩というところまでは攻撃できても、とどめをさすことはできなかった。結局、7日目の最初の獲物は、とどめをさせずに迷っている間に、魔獣の方が力尽きて事切れるという結果となった。そんなことを幾度も繰り返し、どうにかとどめを刺すのに成功したのはその日の修練時間の最後であった。彼は例によって『在るべき死神の姿』の効果で無表情ではあったが、泣きながら魔獣を殺した。

最後に、躊躇いなく殺すことを己に課した。殺せると思ったら、容赦なく殺す。それは現代人たるトオルにとって困難極まることであったが、あえてそれを課す。できなければならないとトオルは思った。殺すなら迷ってはならない、迷いは余計に苦しみを与えるだけだと彼は感じていたからだ。どうせ殺すなら、一瞬で痛みも感じさせずに殺すことがせめてもの慈悲だと彼は考えたのである。

結局、これを成し遂げるのにも時間かかり、実に5日の時を必要とした。全行程で13日かけて、どうにか彼は、少なくとも魔獣を迷いなく殺せるだけの精神と慣れを手に入れた。というと何か凄そうに聞こえるかもしれないが、この世界においては成人した者ならおよそ備えているレベルの精神でしかない。まあ、それでもトオルにとっては著しい成長だと言えよう。魔獣とはいえ『殺す』ことに慣れることが、幸か不幸かはともかく…。

そんなこんなで、今日は森を出て実に14日目。これまでの出来事や修練を思い、トオルが万感の思いを込めて『必要なこと』と認めるのは無理もないことかもしれない。

「私も人里は初めてです。どんな人達がいるのでしょう？どんなものがあるのでしょう？今から楽しみです！」

にわかに重くなりかけた空気を吹き飛ばすかのように、目を輝かせてミユキが言う。相も変わらず空気を読んでいる…といいたいところだが、今回ばかりは素かもしれない。白銀の妖精の顔には、隠しきれない好奇心と知識欲が現れていたからだ。

「そうだな、俺もこっちでは初めてだ。せっかくだし、ゆっくり観光していくか？何があるやら…って、そういえば先立つものが全くないぞ。観光どころか、食事すら…うん？食事…！！」

ミユキの楽しそうな様子に微笑ましく思うが、そこで致命的なことに気づく。そして、もっと重大なことに彼は今更気がついた。

致命的なこととは、簡単なことである。トオルは無一文なのだ。異世界人である彼がこの世界のお金など持っているはずもない。それどころかこの世界の貨幣制度の実態すら知らないのだ。当然とい

えば当然だ。
もっと重大なこととは、今頃気づいたのかよと突っ込みたくなることであった。

「俺、この世界に来てから一度も食事していないじゃないか！」

そう、トオルはこの世界に来て以来、食事を全くとっていなかった。正確には、食欲を感じなかったのである。どんなに歩いても、どんなに修練を行っても、疲労こそ感じたが、空腹を覚えたことはなかったのだ。

「今まで気づいておられなかったのですか？マスターは神使であらせられますから、通常の糧など必要としません。食事をとることができないわけではありませんが、基本的に必要ありませんし、嗜好品(しこうひん)みたいなものですね」

いくら主想いであっても、流石に呆れた様子でミユキが答える。

「ははは、いや～、この世界に慣れるのと、修練でいっぱいいっぱいでさ。空腹とか全く感じなかったから、気づかなかったよ。それにしても、我が事ながらつくづく人外だな…。ひょっとして、他にも常人との違いってあるのか？」

頭をかきながら、微妙に目を泳がせて弁明するトオル。自分でも、間抜けだと思っているだけに、力なくいわけがましい。一方で、これ以上何かないよなと、一応の確認をする。

「そうですね…後は、睡眠も本来は必要ないぐらいではないでしょうか？」

「え、マジで？でも、俺、普通に寝ていたよな」

「肉体的な意味で睡眠は不要と言うだけで、精神的な疲労は別の話ですからね。マスターの睡眠はそちらの回復に重点をおかれたものではないでしょうか」

なるほどなとトオルは首肯しつつ考える。

――確かに、いくら肉体的疲労は感じなくても、精神は話が別だ。

――機械じゃないんだから、どうしたって精神的疲労は無視できない。

――最初から神使だったならともかく、俺は元人間だ。

――精神の根源は人間なんだから、無理もない話か。

「そういうわけですので、食事についての心配はご無用です。路銀についても問題はありません。マスターが狩った魔獣の爪や牙、毛皮等を売れば、それなりの額になるはずですから。最悪、先程狩ったばかりの角猪の肉を代価にすればいいでしょう」

聡明にして優秀な教師たる白銀の妖精にぬかりはなかったらしい。ミユキはあっさりと解決策を提示する。

「なるほど、あれはその為だったのか…。うん？もしかして、森で薬草やら何やら採取させたのも、最初からそういうつもりでか？」

ミユキの答に今までのことを思い出し、トオルは納得する。同時に、従者の先見の明に驚愕しつつ、頭が下がる思いであった。

「そうですよ、神域だけあって貴重な薬草が目白押しですからね。採取しない手はありません」

当然のことのように肯定するミユキに、トオルはマジで頭が上がらないなこれはと内心で苦笑する。

「ミユキには助けてもらってばっかりだな」

「お気になさらないで下さい。この身は全てマスターのために存在するのですから、当然のことです」

自嘲するように言うトオルだったが、それを吹き飛ばさんかのように自らの存在意義を誇るミユキ。その顔には深い慈しみが感じられる真摯なものであった。

「そっか…。でも、ありがとうな」

「当然のことなのですから、礼など必要ありませんよ」

「いいや、それでもさ。俺はお前に本当に感謝しているんだ。だから、言葉でしかないけど、俺の感謝を受け取ってくれないか？そして、これからもよろしく頼むよ、相棒」

礼は不要と言ったミユキであったが、ここまで言われて主の感謝を無碍にするほど、彼女は無粋ではない。

「相棒（パートナー）などと恐れ多いですが、こちらこそよろしくお願いします。マスター」

漆黒と白銀の主従はそう言って笑みを交わすと、初めての人里となるであろう村に足を踏み入れたのだった。

ところがどっこい、現実はとことん優しくなかった。二人が村の入り口が見える位置まで来たところで、ろくでもない光景を目にすることになったのだった。

ろくでもない光景、すなわち魔族の襲撃であった。村は現在進行形で魔族の襲撃を受けていたのである。襲い来る人型の肌の黒い魔族の群れを、村の門番らしい槍を持った男二人と、偶然居合わせたのか冒険者らしき6人が必死に撃退しているのが見える。

「おいおい、本当についてないな。俺は疫病神にでもとり憑かれてるのか？…まあ、今はそれどころじゃないか。あの黒い奴は魔族だよな？なんていう奴なんだ？」

トオルは初めて見る魔族の姿に驚きながらも尋ねる。

「あれはゴブリンですね。大型なものがホブゴブリンで2、3混じっているようですが、指揮官という形のようですね。魔族としてはいずれにせよ弱い部類ですが、多勢に無勢です。防衛に当たっている人族の冒険者達は連携して巧く善戦していますが、如何せん村人であろう二人の実力が低いですね。このままなら、数に押しつぶされるのは時間の問題でしょう」

主の問に淡々と冷静に答を返すミユキ。実力を見抜き、戦況予想までついているあたり、本当に優秀な妖精である。

ところで、この世界における種族は大きく二つに分けることができる。一つが人族であり、もう一つが魔族である。前者は、ニムス

（人間のこと）・エルフ・ドワーフ・ホビット等があげられ、後者は、ゴブリン・ドレイク・バジリスク・トロール等があげられる。その最も大きな差異は魂である。生きる以上、他の生物の命を奪うことになるので、生誕時からすでに魂は『原罪』による穢れを持っている。魂の容量を１００とすると、この穢れが人族は基本的に１０以下、魔族は５０以上というのが普通である。これは創造主たる神及び信仰する神の影響によるところが大きいらしい。まあ、魔族を食べたりしない人族に対し、彼らは喜んで人族を食べるあたりの差がでているのかもしれない。

「うーむ、助力すべきだよな？」

「そうですね、今後のことを考えればそうするべきかと。ここで恩を売れば、村への滞在も容易になるでしょうし、マイナスにはならないと愚考します」

やる気なさげに意見を聞くトオルに対し、ミユキは利があると進言する。

「確かにそうだな。今の外見年齢のこともあるし、今後のことを考えたら実力を見せておくのは悪いことじゃないか…。よし、行くぞ。ミユキはサポートを頼む！」

「承知しました。存分に力を振るわれますよう」

ミユキの言葉に応えるようにトオルは真紅の大鎌を呼び出し、闇の衣の気配遮断＆隠蔽効果をＯＮにして、魔族を背後から強襲したのだった。

男は現状に猛烈に後悔していた。正直、ここまで酷いことになるとは思わなかったし、どこかで事態を甘く見ていたこともあるだろう。恩義があり金払いがいいとはいえ、やはり受けるべきではなかったと。

男は、腕のいい冒険者で、名を『ガルク・ラーハル』といった。相棒の神官『ディルス・マッケイン』と組んで、その冒険者生活は5年にもわたる。数々の修羅場を越えてきた彼と相棒の実力は確かなもので、冒険者ギルド直属ではないものの、所属する冒険者の酒場の看板冒険者として名を馳せていた。

そんな二人に今回の依頼がなされたのは、古い縁故によるものであった。依頼主は、彼らが所属する冒険者の酒場『銀月の雫亭』のある城塞都市『ガウレア』の領主レウス伯爵である。伯は、剛毅な武人でありながら、治世も優れた人物として民に人気がある。また、伯は冒険者の重要性に鑑み、冒険者に対する優遇制度なども提唱&領内で実施しており、冒険者にとってはありがたい人物であった。ガルク達もその恩恵を受けた者であり、特にガルクは一度伯によって命を救われており、多大な恩義のある人物であった。ゆえにその人物からの名指しの依頼など断れるはずもなかった。

依頼内容は、冒険者を志す伯の息子を含んだ貴族の子弟4人の面倒を見ることであった。伯が冒険者と積極的に交流・擁護しているせいか、伯の息子は冒険者というものに憧れをもったらしい。伯としては、跡取りである息子が日常的に命の危険がある冒険者になるなど、到底認められることではない。しかし、冒険者を擁護する立場をとっている己が、それを否定するような行動はとれない。悩んだ末の苦肉の策として出されたのが、今回の依頼である。

一回経験させて、現実を思い知らせようと伯は考えた。冒険者は憧れや並大抵の覚悟でできるものではないことを伯は熟知していたからだ。ゆえに、伯は熟練冒険者であるガルクに息子を含む４人の適性を判断させることにした。自分がいくら言っても、息子は聞かないであろうことが分かっていたからだ。それに適性があれば、今後のことを考えて、１年か2年、冒険者として経験を積むことはマイナスにならないと考えたのだ。もっとも、その場合でも分からないように護衛をつけるつもりでいたが。

そうはいっても、実のところ伯は息子に冒険者としての適性はないと考えていた。伯の息子である『ライル・レウス』は、伯の英才教育を受け、中々の剣の腕を持つ。しかし、反面勉学を厭い、政治等には何ら興味を示さなかった。今年で１４歳になり、そろそろ公の場へと出る時期が迫っていた矢先に、逃げるように冒険者になりたいと言い出したのだ。確かに憧れがあったのも事実だろうが、実際には社交界デビューを避けるための逃げの側面が大きいと伯は理解していたからだ。そんな逃げの姿勢で、覚悟すらないものに務まるほど、冒険者は甘くない。ゆえに伯は、ガルクに現実を思い知らせてやってくれと言ってすらいた。

とはいえ、それで跡取り息子を危険に晒しては元も子もない。そこで伯は、比較的安全な辺境の村『スノール』への手紙配達依頼を自ら出した。自分からの依頼ということを隠して。酒場の主人は、伯の依頼どおりそれを駆け出しのライル達４人に斡旋した。駆け出しへの依頼としてはありふれたものなので、ライル達は疑いもせずにそれを受けた。ガウレアの行政府からの依頼である。よく考えれば、父親からの依頼であることに気づけたであろうに、ライルは政治嫌いと貴族の子弟特有の世間知らずがゆえに、それに気づけなかった。この時点で適性としてはマイナスである。依頼の内容を吟味し、依頼主やその意味等について考えるのは、冒険者として必要不

可欠な要素であるからだ。

なにはともあれ、伯の思惑通り依頼を受けたライル達は、父親との約束どおり適性を判断してもらうガルク達を同伴して、依頼へと赴いた。

今にして思えば、会った時からいやな予感がしていたのだ。父親の差し金であるガルク達の存在が気に食わなかったのだろう。最初から、態度は悪く目上の者に対するものではなかった。それどころか、「依頼を受けたのは俺達なんだから、あんたらは黙って見てればいい」などとすら言ってきた。相棒と顔を合わせて苦笑したのをよく覚えている。これは中々精神的にきつい依頼になりそうだと。

辺境の村であるスノールへの道程は、ガウレアから徒歩で7日。一人前の冒険者なら5日でいける距離だ。当然、徒歩で行くと思いきや、ライル達はのっけからありえないことをした。あろうことか実家から自分の馬を持ち出したのである。冒険者となった以上は、貴族としての地位や権力・財力を用いないのが不文律である。それを初めから破ったのだから、ガルク達は言葉もなかった。

仕方ないので、ガルク達も馬をレンタルして後を追う。しかし、そんなのは始まりでしかないことに彼らはすぐに気づくことになった。ライル達は乗馬の経験はあっても、長時間の行軍の経験はない。当然、彼らは3時間もすればへばることになったからだ。お遊びの乗馬や、家の者による至れり尽くせりの狩とはわけが違うのだ。野盗や魔獣・野生動物等の襲撃も警戒しなければならないのだ。否が応にも、今まで守られてきた彼らは初めての経験に精神を磨耗させ、体力の消費を早めることになったのだった。

しかも、この時点で4人のメンバーの中で帰りたいと言い出すも

のがいた。気の弱そうな青年で、弓矢が得意との触れ込みであったが、たったの3時間で彼の心は折れてしまったらしい。この時は流石に残り3人は団結し、彼を励ましどうにか奮起させた。

馬での行軍は無謀と悟ったのか、徒歩に切り替えるというライル達。馬はどうするのかと問うガルクに、あんたらが戻しといてくれよと貴族様的発言をする。幸い徒歩で一日分の距離は来ていた為、今日はその場で野営させ、仕方なく相棒と共にガウレアまで馬6頭を戻しに行く。この時点で、ガルクと相棒は、適性なしと判断していた。

自分達だけ騎乗しているわけにもいかないので、急いで徒歩で戻るガルク達。夜半には、野営場所まで戻ることに成功するが、不寝番すら立てずに全員で寝こけているライル達4人に愕然とする。あれ程言い聞かせたのにもかかわらず、全員寝ているとは…。この有様で彼らが無事だったのは偶然に過ぎない。最早、呆れて言葉もなかった。結局、彼らを起こすことなく、相棒と共に不寝番をすることになったガルク。これからのことを思うと、ため息しかでなかった。

翌日、起きたライル達4人に説教しようとするが、無事だったからいいじゃんと聞く耳をもたない。結局、徹夜で不寝番する羽目になったガルクと相棒に、気の弱そうな少年と魔術師の少女はばつが悪そうに頭を下げてきたが、ライルともう一人の青年は平然として感謝すらしなかった。最早、ガルクと相棒は諦めの心境であった。

幸いにもそれからの4日の行程は何事もなかった。強いて言えば、ライルともう一人の青年が一度として不寝番をやろうとせずに寝こけていたことがあげられるが、先の少年と少女が協力してくれた為に、ガルク達も寝ることができたので問題ない。むしろ、不寝番を共にした二人は、ガルク達の言うことをよく聞き、また積極的に教

えを請うてきたので、二人は４日の間に格段の進歩を遂げていた。

また、二人との交流で彼ら４人の力関係を理解することができた。魔術師の少女『レアーネ・フィルズ』はライルの従者であり、気の弱そうな少年『ティム・サンドール』はもう一人の青年『ガラム・サンドール』の弟なのだそうだ。レアーネとティムが働くのは当然とばかりの態度で気にも留めなかったのはそういう事情があったわけだ。さらに話を聞くと、レアーネは父親が伯に多大な恩を受けており、それを返すために今回も同行を申し出たそうだ。ティムの方は兄に無理やり連れてこられたそうで、最初から乗り気ではなかったそうだ。それでも、そんな彼らが「ありがとうございました」「いい経験になりました」と言ってくれたことは、ガルクと相棒にとって救いになった。個人的にも二人とは親しくなれたので、悪いことばかりではないと思い直した。

だが、現実は過酷であった。幸があれば不幸があるもので、村まで後僅かといったところで、ライルとガラムがやらかしてくれたのだ。彼らは、街道沿いにある森で、休息をとるゴブリンの集団を発見したのだ。発見したのは、日に日に逞しくなっており索敵を任されるまでになっていたティムで、弓を得意とするだけあって目がよく、ガルク達よりも早く発見した。これには、ガルクも感心したが、感心しない行動をとる者がいた。ライルとガラムはそれを聞くや否や、数も確かめずにゴブリン達を強襲したのだ。

大きな態度をとるだけあり、ライルとガラムの腕は中々のものであり、その場にいたゴブリンをあっさり葬った。血に染まった剣と槍を担いで、意気揚々と森から出てくる二人に胸を撫で下ろしたガルク達だったが、彼らの背後から喚声をあげて森から出てくるゴブリンの群れを目にし、すぐに顔面を蒼白にすることになった。休息をとっていたゴブリン達は先遣隊であり、本隊はすぐ近くまで迫っ

ていたのだ。その数、実に３０を超える。

背後からの喚声にライルとガラムは後ろを向く。迫り来るゴブリンの群れを目にし、ガルク達の下へ慌てて逃げ出す。ガルクと相棒だけなら、ゴブリン程度何体こようが、うまく立ち回る自信があったが、今は足手まといを４人も連れている。しかも、何の遮蔽もない街道である。さらに悪いことに補助魔法すらかけていない。現状では交戦は無謀と結論づけるしかなかった。二人が来るのを待って、瞬時に逃亡の指示を出す。この時ばかりは全員がその指示に従った。

迫り来るゴブリン達に対し、殿を引き受けたガルクは、マナによって身体を強化。戦技『豪体』で一時的に爆発的な膂力を得ると、手に持った戦斧でゴブリン達を薙ぎ払う。一気に４体のゴブリンが上半身と下半身を無理やりに両断される。あまりのことにその足を止めるゴブリン達。それを好機とみたガルクは、再びマナによって身体を強化。今度は全身ではなく、喉と脚部を重点的に強化する。次の瞬間、ガルクの口から放たれる凄まじい雄叫び。『戦声』と言われる戦技である。これにより完全にゴブリン達は動きを封じられる。へたりこんでいる者すらいる。その合間をぬって、戦技『飛脚』で一足、ゴブリン達と距離を離す。それからさらに疾風の如く走り続け、とうとう先の４人に追いついたのだった。

だが、逃げ切ったのはいいが、現実は優しくない。スノールまで後僅かといったところで遭遇したのだ。十中八九、ゴブリン達の目標は、スノールだということだ。つまり、依頼を受けている関係で、スノールに入らなければならない自分達は確実に交戦することになるということだ。見て見ぬふりができないわけではないが、あれだけの数のゴブリンだ。辺境の村の防備では防ぎきることなどできないだろう。そうなれば村は滅び、依頼も達成不可能になり自動的に失敗。ガルクと相棒には何のペナルティもないとはいえ、目覚めが

悪い。多勢に無勢で助けをよぼうにしても、村との距離が近すぎる。援軍が来る前に、スノールが滅ぼされるだろう。

それに本来なら、後一日の猶予があったであろう襲撃を早めたのは自分達だ。いや、正確にはライルとガラムであるが…。あの森で休息をとっていたことをみるに、今日はあそこで野営をして、翌日に攻めるつもりだったに違いないからだ。発見しただけなら、村人を逃がすということもできたろうが…。それを余計なちょっかいを出したことで、ゴブリン達の戦意を高めてしまった。まず、間違いなく連中は自分達を追ってくるだろう。向かう場所など、この近辺ではスノールしかないのだから。最早、一刻の猶予もない。

ガルクはライルとガラムを手加減なしで殴りつけると、以後は自分の指示に従うように厳命した。直後は呆然としていた二人だが、すぐに怒りに頬を紅潮させ、ガルクにくってかかった。しかし、相棒が間に入って淡々と現状を説明するに連れて、顔面を蒼白にしていく二人。自分達がパーティーの危機を招いたのだとだとようやく悟ったのか、言葉をなくす。そんな二人の様子にこれなら大丈夫かと判断するガルク。

今は一刻も早く村に向かうべきだと判断し、全力で村に向かう。1時間余りでスノールに到着。全力で駆けてきたガルク達に不審そうな目つきを向ける門番2人。ガルクはすぐさま門番に事情を説明。村長に会わせてくれるように頼む。突然もたらされた村の危機に半信半疑ながらも、ガルク達の必死の様子を見て応じることにした門番達。1人が大急ぎで村長を呼びに行く。門番に連れられて、慌てた様子で駆け込んできた村長に相棒が聖印を見せて身分証明した後に理路整然と説明。戦える者を少しでも集めてくれるように頼む。

村長は一も二もなく了承すると、すぐに村内の戦える者を集めた。

しかし、戦闘経験がある者はほとんどおらず、ガルク達6人以外に冒険者も滞在していなかった。スノールは田舎も田舎で、特産物といったら、上質の糸ぐらいしかないという寂れた土地であるから無理もない。結局、ガルク達と肩を並べて戦えそうなのは、門番の二人だけであった。その門番達でさえ、ガルクどころかライルよりも劣る腕しかないのだから、村の戦力はおして知るべしである。他の者達には、柵を越えるのを防ぐ役目を与え、ガルク達は門の前に陣取った。

前衛は、ガルクを筆頭にライルとガラム。中衛に相棒であるディルス。後衛に、ティムとレアーネ。その両脇を門番が固めるという陣形であった。柵は木製で、門も同じく木製で大したものではない。自分達が抜かれれば、まず間違いなく村は終わるであろうことをガルクは悟っていた。ゴブリンの姿が見えたら、補助魔術を使うようにレアーネに指示する。相棒には言う必要はない。相棒は己の仕事を言うまでもなく、よく理解しているからだ。

そうして待ち受けるガルク達だったが、ついにその時は来た。隊列を組んだゴブリン達が整然とこちらへ向かってくるのが見える。それを見て、ガルクは内心で舌打ちせざるをえなかった。ああも見事に隊列を組まれては、1人で突っ込んでどうにかするということはできないからだ。そんなことをすればたちまちに包囲されるか、ガルクの突出の隙を突かれて他のメンバーが危なくなるだろう。群れを統括する指揮官がいることをガルクは見破っていたのだ。

一方で、ガルク達も座して待っていたわけではない。騎士神『クルスト』の神聖魔法『円卓の守護（プロテクションオブラウンド）』をディルスが前衛と門番にかけ、レアーネが真言魔術『魔鋭刃（シャープエッジ）』を同じくかける。前衛達は武器を構え、ティムは矢を番える。そうして、戦端は開かれたのだった。

そして、絶賛後悔中の今に至るというわけである。足手まといと断じたライル達４人は思ったよりもよく戦っている。ライルとガラムは必死の形相で己が得物を振るい、ティムは蒼白になりながらも矢を放ち、レアーネは牽制するように魔術を使っている。ガルクやディルスが時折カバーしているとはいえ、一応の連携はとれていたからだ。貴族の子弟だけあって英才教育を受けたのか、流石に個々の能力は高いらしい。問題なのは門番達だ。彼らが両脇を固めてくれているおかげで、自分達は前面の敵に集中できるわけだが、いかんせん腕が劣る。彼らはゴブリンと一対一なら負けないだろうが、複数体となると分が悪い。ガルクとディルスは巧みに戦って、彼らの方にゴブリンが複数体いかないようにしているが、それにしたって限度がある。

しかも、数が数である。３０を超えるゴブリンの群れだ。否が応にも疲弊することは避けられない。加えて指揮官らしきホブゴブリンまで３体もいる。連中が前面に出てこられたら、分が悪い。ライルとガラム２人がかりで、ホブゴブリン１体と互角だろう。いや、疲弊していることを考えれば、分が悪いといわざるをえない。ガルクなら、残り２体を相手にしても負けない自信がある。だが、すでに戦技を連続で３度も使ってしまっている。消耗が激しいのは認めざるをえない。現状でやりあえば、その相手で手一杯になるだろう。そうなれば、他のゴブリン達によって戦線は崩壊する。

つまるところ、ジリ貧であることを認めざるをえない。両脇を固める門番が倒れてもアウト。ホブゴブリンが出てきても、戦線崩壊してアウトである。そして、相棒はともかくレアーネの魔力切れは近いだろうし、ティムの矢だって限りがある。２人の援護がなくなれば、やはり戦線を保ってなくなるだろう。援軍でも来なければ、詰みであった。そんな現状把握の下、ガルクは絶賛後悔中だったわけである。

そんな時だった予期せぬ援軍が現れたのは。迫りくる絶望を切り裂いて、白銀の妖精を侍らせた漆黒の死神が襲来したのは。

異世界種族との初遭遇（後書き）

戦技＆魔術・魔法解説　（）内はＴＲＰＧ的に表現した効果

『豪体』：全身の身体能力を強化する戦技。膂力・スピード等様々な能力を増幅する。（行使したラウンド中に限り、全行動判定＋２ｏｒ与ダメージ＋１～＋１０　行使者本来の身体能力によって増加幅が変わる）

『戦声』：戦意と殺気をのせて放つ雄叫びによる威嚇する戦技。特殊なマナの波動を放つ。味方の戦意を高揚させ、敵の動きを萎縮させる。（味方の行動判定＋１、敵の行動判定－１＆抵抗に失敗した者は１Ｒ行動不能）

『飛脚』：下半身、主に脚力を強化する戦技。短時間ではあるが、驚異的な瞬発力、走力、跳躍力を得る。（６Ｒの間移動力２倍、地形による移動補正を半減）

『円卓の守護（プロテクションオブラウンド）』：騎士神『クルスト』の特殊神聖魔法。同一パーティ内のメンバーに神聖な守りを与える。（戦闘終了まで、防護点＋２、物理・魔法ダメージ－３　被術者がクルストを信仰している場合、さらにそれぞれ＋１，－１の恩恵を受ける）

『魔鋭刃（シャープエッジ）』：真言魔術の補助系統の魔術。武器に魔力による刃を与える。一時的に魔法の武器と同じ効果をもたせることができる。（１２Ｒの間武器攻撃力＋２、武器追加ダメージ＋２、魔法武器扱いになる）

ようやっと主人公以外の『人』がでてきました。いざ書いてみるとえらい長くなってしまい、途中できることにしました。当初の予定

では、戦闘終了までやるつもりだったのですが…。まだまだ未熟です。
ちなみに作者は、ＴＲＰＧやったことありません。ルールブックすらもってません。動画等で見たものを参考にしています。おかしいと思ったら、遠慮なく指摘ください。ＳＷ２．０の影響が濃いと思います。
ご意見・感想・批判等、遠慮なくお願いします。

冒険者

少女が戦場の異変を察知できたのは偶然だった。戦闘中であっても周りの状況に気を配る余裕のある熟練冒険者であるガルクやディルスと違い、駆け出し仲間達４人の中で唯一レアーネがそれに気づけたのは、本当に偶然の産物であった。魔術の連続使用により魔力切れを起こし、やれることがなくなってしまい、精神の回復に努めながら、戦場を眺めることしかできなかったからこそであった。

明らかな劣勢にも関わらず、いっこうに抵抗をやめないこちらに痺れを切らしたのか、後方で指揮をとっていたホブゴブリン３体のうち１体が、突如前進してきたのである。戦線の崩壊の危機を感じたが、今の自分には何もできないことに歯噛みするレアーネ。彼女が唯一できたのは、今も死力を尽くして戦っている者達に警戒するよう呼びかけることだけであった。

そして、レアーネが呼びかけた直後、それは起きた。あろうことか後方に残ったホブゴブリンが２体同時に、突如切り裂かれたのである。それをなしたのは黒い影。黒衣に身を包んだ黒髪の『漆黒』と表現するほかない少年であった。強敵が一瞬の内に葬られるというあまりの事態に己の目を疑うことすらしたレアーネだったが、その間も漆黒の少年は止まらない。身の丈以上ある真紅の大鎌を軽々と振るい、後方からゴブリン達を切り裂いていく。ゴブリン達も状況を飲み込めていなかったのだろう。抵抗らしい抵抗もできないまま、屍をさらすこととなった。一振りで３体以上のゴブリンが薙ぎ払われ、斬殺されていく。

漆黒の少年が中衛で群れの回復役を務めていたゴブリンの神官を３体まとめて斬殺するに至って、ようやくレアーネは己が見ている

ことが現実であると認識できた。そこへいくと大先輩であるガルクやディルスは流石で、ガルクはホブゴブリンを含む群れの動揺を敏感に察知すると、ここぞとばかりに『戦声』で威嚇&動揺を助長させる。これにより、後方からの思ってもみない奇襲に右往左往していたゴブリン達は、そのことごとくが動きを封じられた。リーダー格が一瞬で2体も殺されたのだから、無理もない。その隙をついて、ディルスは補助や回復のみ使っていた魔法を初めて攻撃に用いる。使われたのは、威力も高いが詠唱も長い騎士神『クルスト』の特殊神聖魔法『断罪の聖十字剣（ジャッジメントクルス）』。彼女が現実として認識できた頃には、詠唱は完了していた。放たれる断罪の一撃は。残ったホブゴブリンを中心に多くのゴブリン達を巻き込んで炸裂した。これにより大勢は決した。

少なからぬダメージを受けた残り1体のホブゴブリンは、ガルクにあっさりと斬られ、これにより動揺極まったゴブリン達は壊走し、彼女の仲間達の手でもあっさり蹂躙できたからだ。元より個々の力量ではゴブリンを凌ぐ者達ばかりである。苦戦したのは、ゴブリン達が組織だって数によって圧倒してきたからに過ぎない。指揮官を失い烏合の衆と化したゴブリンなど敵ではなかったのである。そして、何より群れの後方から迫り来る漆黒の影がゴブリン達を恐怖させた。その勢いはとどまるところを知らず、ゴブリン達全てがその屍を晒すまで止まることはなかったのであった。

そんなわけで九死に一生を得たレアーネ達であった。胸を撫で下ろして、気が抜けた仲間達とは対照的にガルクとディルスは緊張したまま警戒を解かなかった。彼らは漆黒の少年が敵か否か決めかねていたのであった。

最後のゴブリンを斬殺しおえたところで、血に汚れた鎌を一振りし血を飛ばした後、手の中から消す。そんな漆黒の少年を尻目に脱力して座り込む４人の冒険者と門番の姿が見える。そして、対照的に緊張を解かず、警戒の視線を投げかけてくる２人の冒険者の姿も。警戒の視線に相棒たる白銀の妖精が絶対零度の視線で対応しているが、漆黒の少年ことトオルはその警戒を当然のものと受け取り気にしていなかった。なにせ、どう見ても怪しいからだ。自分が相手の立場だったら、間違いなく疑うと思っていたし、己の外見年齢の低さや黒尽くめの格好がそれを助長させることを理解していたからだ。そして、何より彼にはそんなことを気にしている暇はなかったからである。

戦闘終了と共に『停止』を解いたトオルにとって、フィードバックされる感情の波に対応することの方が最優先事項であったからに他ならない。魔獣を殺せる程度の精神は手に入れた彼だったが、たとえ魔族という人族の天敵であっても人の形をしたものを殺すのは、やはりまだ抵抗があるし、嫌悪が捨てきれなかったからだ。彼は震え始めようとする手を必死に制御し、懐から美麗な笛を取り出す。そう、ミユキがカヤより与えられたあの笛である。かの笛は、ミユキからトオルに譲られていたのだった。

それというのも、トオルが精神の安定を損なう度にミユキが一々あの姿になって、笛を吹くわけにはいかないからだ。『第一解放』はそう易々とできるものではないのだから当然である。かつてそれが認められたのは、トオルの精神の崩壊という緊急事態だから許されたことであり、普通なら認められることではないのだ。よって、自然と奏者は彼自身となったわけである。

自身の安定の為に笛を吹くというのもなんだかなあと、当初は思ったトオルであったが、それは思ってもみない結果を生んだ。縦笛ならともかく、横笛など吹くどころか触ったことすらないトオルだったが、不思議なことに彼は自然と笛を奏でることができたのである。それも半端じゃないうまさで。笛自体の効果なのか、それとも神使としての能力故か、はたまた彼に才能があったのかは不明であったが、それは魂を癒し活性化させるという笛の音色の効果を増幅させる結果となり、結果的に彼の精神の成長を助けることとなったのだ。彼が『停止』なしでどうにか魔獣を殺せるようになったのも、この笛のおかげと言っても、過言ではなかった。

森を出て以来、何度奏でたか分からない。その頻度たるや、最早トオルにとってこの世界での趣味と言ってもいいレベルに達している程であった。一方で、奏でる度にうまくなり、次々と旋律が生まれていく。その音色はすでに趣味の域を超越しており、吟遊詩人と名乗っても違和感のないレベルになっていた。

そうしているうちに、トオルはいつしか自分の為だけでなく、殺した者への鎮魂としても奏でるようになっていた。この時も、己の心に怒涛の如く押し寄せる感情の荒波に耐えると共に鎮魂を込めて笛を奏でていた。彼にとっては、戦闘後の習慣と言っていいものであったが、それはこの場において、思いがけないことに彼にプラスに働いた。

まず、武器である真紅の大鎌を消したことは、交戦の意思なしと判断された。未だ警戒中であったガルクとディルスは武器を構えたままであったからだ。トオルが懐に手を入れた時は、にわかに警戒を強めたか2人だったが、取り出されたのが笛であり拍子抜けしてしまった。それどころか笛を吹き出すに至り、彼らは警戒するのを

やめた。あまりにも隙だらけで無防備だったからだ。

次に、笛の音の効果だ。トオル自身も気づいていなかったが、彼が鎮魂の意思をのせて奏でるようになってから、笛の音は魂を癒し活性化させる効果に加え、『浄化』と『魂送』の効果をももつに至っていた。これはトオルが無意識のうちに『浄化』と『魂送』を使っていたからだ。鎮魂の意思によってもたらされたそれはこの場においても効果を発揮し、彼以外の者によって殺されたゴブリン達の魂を浄化し、葬送することとなった。笛の音色が響くにつれ、その場に漂う魂が浄化され葬送されていき、それに伴い空気が清浄化していくのを、神官であるディルスは感じ取っていた。

また、笛の音の本来の効力である魂を癒し活性化させる効果によって、警戒中である熟練冒険者である2人を含むその場にいた者達の魂を癒し活性化させることで、戦闘で節くれだった精神を癒すと同時に弱まった肉体に活力を注ぎ込む役割を果たしたのだ。ガルクとディルスも笛の音を聞いているうちに、次第に敵愾心が薄れていき、一方で体の芯から温まるような活力を感じて、警戒することをやめた。

最後に、能力の隠蔽という意味でも笛の音色は役立っていた。ディルスは魂が浄化され葬送されていくことを感じ取っていたものの、魂の正確な数は把握していない。トオルが殺したゴブリンは即魂送されているのだが、魂を正確に認識できないディルスにそれは分からない。ゆえにディルスは、トオルの能力によって葬送されたのではなく、笛の音によって葬送されたのだと誤解することとなった。これは大きかった。なにせ、この世界の葬送は神官がそれなりに手順を踏んで行う儀式であり、神官の重要な役割であったからだ。

まあ、とにもかくにもトオルの笛の演奏は思わぬ効果を発揮した

のだった。

「いや、見事な笛の音でした。その若さで大したものです」

自身の心が全てを受け容れ、精神が安定するまで笛を奏でていたトオルが、笛を吹くのをやめるとそう声をかけてきたのは、ディルスだった。ガルクはその斜め後ろに立って、念の為に挙動を観察する。

「どうもありがとうございます」

「それに貴方の笛の音には、葬送の効果がありました。魔族に対してもそのような慈悲を与えるとは貴方は優しいのですね」

素直に礼を返すトオルに対し、ディルスは皮肉気に言ってくる。言外に自分で殺しておいてよくやると言いたげだ。

「死ねば人族も魔族もありません。輪廻転生の輪に入り、再びの生を待つことになります。魂が穢れ、世に害なす存在に成り果てる前にかの大神の御許に送ってやるのはせめてもの慈悲であり、世の為人の為となるでしょう」

「それはそうですが、あのように穏やかに逝かせてやるとは…。些か慈悲が過ぎるのではないですか？」

ちなみに普通の神官は、魔族に対しては『祓いの儀式』というものを行い、不死者となるのを防ぐ。これは言うなれば、魂を葬送するのではなく、肉体との繋がりを強引に断ち切り、魂をその場所から追い出すものである。ゆえに不死者となることはないが、死霊の類になることはありえる。

「死者に罪はありません。何者にも死は平等なのです。むしろ、無駄に留まらせて害なすようになったら本末転倒でしょう？」

「ふむ、なるほど…。お若いのに優れた見識をもっていますね」

トオルのよどみない答に感嘆するように言うディルス。実のところ、ディルスは本気で言っているわけではなかった。かつての彼ならば、本気で言っていたかもしれないが、５年にわたる冒険者生活が彼を変えていたのだ。人族だろうと嫌な奴はいるし、魔族だろうと好ましい者はいるということを、彼は実体験から知っていたし、下手に『祓いの儀式』を行えば死霊化する事も熟知していたからだ。ゆえに、トオルが葬送しなければ、彼が葬送してやるつもりであったほどである。そのように考えながらも、あえて皮肉じみた言い方をしたのは、トオルの人格をはかる為だ。得体の知れない目の前の少年を少しでも知る為に、あえて魔族排斥派じみたことを言ったわけである。

「いえ、死というものの大きさを多少知っているだけの若造にすぎませんよ」

「なるほど…」

どこか実感のこもった声で言うトオルに身近な者を亡くしたことがあるのだろうとディルスはあたりをつける。実のところ、自身の死の経験からきているのだが…。

敵ではないし、一応信用していいと思うとディルスは目線で語る。ガルクはそれに黙ったまま頷くと今度は自らが前に出た。

「一先ず礼を言っておくぜ。助けてくれてありがとよ。おかげでど

うにかなったわ」

「いえいえ、助けが遅れて申し訳ありません。それにあの状況では善戦していたと思いますし、困ったときはお互い様ですよ」

「そう言ってもらえると助かるぜ。俺はガルク・ラーハル、こいつは相棒のディルス・マッケインだ。不甲斐ないとこ見せちまったが、これでも冒険者歴は5年にもなる。お前さんは？」

「私は、トオル、トオル・カンナヅキです。若輩者ですが冒険者を志望しています、よろしくお願いします。こっちは、相棒のミユキです」

まだ幼さが残る少年だというのに一人旅、しかも気位の高い純妖精を連れているとは、こいつどういう人生送ってきたんだと疑問に思うガルクであったが、冒険者は原則的に過去を詮索しないのが不文律である。パーティーを組んでいれば話は変わるが、漆黒の少年は初対面でしかも命の恩人である。なおさら詮索などできようはずもなかった。

「若輩者か…。それにしては凄い武器使ってるんだな。ホブゴブリンを容易に切り裂いたあの切れ味に、跡形もなくしまったところをみると、魔法の武器か、魔剣の類だろ？」

それでも少しでも情報を得ようと当たり障りのない質問、というか普通疑問に思うだろうというところを突っ込んでみる。

「ええ、祖父の形見でしてね。今の私には分不相応だと思いますが重宝しています」

前半分は嘘で、後半分は本心から、トオルは答を返す。流石に神器だというわけにはいかないし、かといって欲しがられるのも困るので、相手が欲しいと思っても譲って欲しいと言い難いものを仮の由来とした。分不相応は本心だ。彼自身、『在るべき死神の姿』がなければ、未だ自由自在に真紅の大鎌を振るうことができないことを痛感していたからだ。

「形見か…。そうか、大切にしろよ。そういうものはいくら金積んでも手に入るものじゃないからな」

冒険者の子孫というなら、駆け出しとはいえ魔法の武器を持っていることは納得できないことはないし、それに半分とはいえ本心が入っていたせいか、トオルの言は真剣で切実な響きを持って聞こえたことも手伝って、ガルクはトオルの説明にあっさりと納得する。トオルが多少罪悪感を感じるほどあっさりと。どうやら自身が納得できるなら、あまりこだわらない性格のようだ。

「ええ、勿論です」

「ただ、先輩として言わせてもらえるなら、皆殺しは勘弁してほしかったな。連中がどうしてこの村に来たのか、その狙いを知るために1体、いやできれば2体は残してほしかったな」

「ああ、そうですね。申し訳ありません。慌てていたので、そこまで頭が回りませんでした」

トオルは謝罪しながら、考えが足らなかったと反省する。言われてみれば、なぜこんな辺境に魔族の一群がいたのかはかなり重要な問題だろう。情報源を確保せずに、問答無用で皆殺しにしてしまっ

たのは、考えなしと言われても仕方のないことであった。

「いや、謝る事はないさ。実際、お前さんが来なかったら、危なかったしな。こっちもこっちで情報源を確保する余裕もなかったからな。次からは気をつけろっていう忠告さ」

一方でガルクは安堵していた。目の前の少年がようやく年相応というか、駆け出しらしい反応を示したからだ。実際、駆け出しがよくやるミスであるから尚更だ。

「俺達は死体の処理をするから、お前さんは先に村に入って休んでてくれ。ここまで歩き詰めだったんだろう？」

先輩として思いやるように言うガルクにトオルは少し考えた後に応えた。

「いえ、お手伝いさせて下さい。魔族と戦うのは初めてでしたから、その際にどのように対応するのか知りたいですからね。それに己で殺したものはせめて弔ってやるのが、勝者として戦士の礼儀だと思うんです」

実際、今後の為に魔族の死体の対処など知っておく必要があった。ＴＲＰＧとかである剥ぎ取りはするのかとか、どうやって死体を処理するのかとかである。

「いい心がけだ。じゃあ、手伝ってくれるか？最初は見てるだけでいい。後は見様見真似で構わない」

「分かりました。お願いします」

ガルクとトオルはすでに剥ぎ取りを始めているディルスへと近づいたのだった。

剥ぎ取り及び死体の処理は思った以上に大変だった。特に剥ぎ取りは、トオルが道中で狩った魔獣の解体は段違いの難易度であった。ミユキから「命を奪った以上、それを無駄にすることなど許されない」と諭されて、何度も嘔吐しそうになりながらも魔獣を解体し、その角や肉などを収集したのだが、あれはまだ動物を捌くというレベルであった。だが、この剥ぎ取りは、死者の身包みを剥ぐというおよそ現代人には受け入れられない行為である。ガルクやディルスが当然のように顔色一つ変えずに剥ぎ取りを行っている以上、冒険者としては当然の行為なのだろうが、その行為にどうしても卑しさや低俗さを感じてしまうのだ。ここはもう平和な日本ではないのだから慣れなければならないと己に言い聞かせ、どうにか作業をする。盾や剣などはともかく、鎧が大変であった。なにせ相手は死んでいるのであるから、脱がすのが一苦労であった。しかも、トオルの大鎌で斬られたゴブリン達の大半は鎧が使い物にならなかった。鎌で鎧ごと両断したのだから当然といえば当然であった。そこへいくとガルクとディルスは優秀で、鎧の隙間をうまく突いていたり、傷つけないように斬っていたりと、とても追い詰められていたようには思えない見事さであった。彼ら冒険者にとっては戦利品も、貴重な収入源なのだから当然かもしれないが、すぐに真似できるような技術でもない。トオルはそういうことも以後は気をつけようと心にとめおいた。

魔族の死体は不死者となることを防ぐ為に焼くのが普通だそうで、武具を剥ぎ取り一箇所に集められた後、『葬送の焔』という魔道具

を持って焼かれた。あっというまに死体を骨すら残さず焼き尽くすその光景に目を見張るトオルに、ディルスはそれなりに高価な魔道具であることを苦笑しながら教えてくれた。

この時点で、ガルクとディルスはトオルを疑うことをやめていた。真面目に剥ぎ取りや死体の処理について学ぼうとする姿勢は好感が持てたし、いかにも駆け出しらしい疑問や態度であったからだ。まあ、とはいっても何より彼らの疑いを晴らしたのは、ディルスがこっそり唱えた『魔族探知』にひっかからなかったからであるが…。熟練冒険者らしい油断も隙もない対応と褒めるべきだろうか。

「生き延び依頼を達成できたことに乾杯！」

「「「「「「乾杯！」」」」」」

ガルクの音頭に同席した6人の声が唱和し、それぞれの手に握られた杯がチンと打ち鳴らされる。ここはスノール唯一の酒場。6人の冒険者と共に、村長をはじめとした村民に感謝されることになった。しかも、滞在中の食費等の諸費を村でもってくれることになり、内心で歓喜していたトオルだったが、ガルクに誘われて、彼らのテーブルに同席することになったのだった。ちなみにミユキは参加していない。好奇の視線がうざかったらしく、根掘り葉掘り聞かれるのも嫌ったからだ。

「いや、本当に今回はどうなることかと思ったぜ」

「ええ、全くです。トオル君が来てくれなかったら、危ないところ

でした」

しみじみと言い合うガルクとディルスに元凶であるライルとガラムは身を小さくする。現実に死の危険に直面したせいか、彼らは自身がいかに浅はかで、身の程知らずであったか思い知ったのであった。しかも、自身だけではなく、他者の命まで危険に晒してしまったのだ。いかに傲慢で自信家であった2人も、今回ばかりは反駁する言葉を持たなかった。

「いえ、そんなことは。大体御2人でしたら、どうにでもできたんじゃありませんか？」

暗にそれくらいの実力はあるだろうというトオルに、ディルスは首を振る。

「確かに、我々だけが生き残るだけなら十分可能でしたが、その場合村への被害は避けられなかったでしょうし、犠牲者も出たでしょう。君が来てくれたからこそ、村は無傷で怪我人こそでましたが犠牲者もなしで切り抜けられたのですよ」

「…」

そういうことではないと諭すように語るディルスに己の考えの未熟さを悟るトオル。あそこでの勝利は村を守り通す事であり、生き延びることも重要ではあったが、それは二の次だったのだ。でなければ、不利を承知で村に残って迎撃に出たりはすまい。

やはり、まだまだ考えが浅いと痛感し、言葉もなく頷くトオル。

「それにしてもトオルさんはお強いんですね。僕、びっくりしちゃいました」

そんなトオルを元気付けるように声をかけたのはティムだ。彼は今回一番成長したと言えるかもしれない。最初、「もう帰りたい」といっていたのが嘘のように逞しくなっていた。実際、ゴブリン達の迎撃においても目覚しい活躍を見せ、一矢で仕留めるような目立った働きはなかったが、仲間を的確に支援するその射撃は、大いにガルク達を助けた。

「いや、武器のおかげというところが大きい。正直、まだ武器に振り回されているんだよ」

怒涛の勢いでゴブリン達を蹂躙するかの如く斬殺していたのを見ていた周りから見れば、謙遜するかのように聞こえるトオルの言であったが、彼から言わせれば謙遜でもなんでもない。実際、『在るべき死神の姿』なしでは無傷であの場を切り抜けられたかは怪しいものであったからだ。

「そんなことない。本当に凄かったよ。それにしても、あれって魔法の武器なの？よければ見せてくれない？」

謙遜ととったのか、それを否定するかのように勢い良くティムの言葉に同調するレアーネ。彼女はホブゴブリンをまとめて斬殺しているところを生で目撃しているだけに、まだ未熟というのは納得がいかないのかもしれない。一方で、魔道に携わるものとして、好奇心を抑えられなかったようである。

「あの紅の大鎌か…そうだな、俺も見てみたい。よければ見せてくれないか？」

ガルクも気になってたらしく、同じように頼んでくる。トオルは

それに少し考えると、困った様子で周りを見回す。なにせ神器だ。そう易々と見せて回るようなものではないし、万が一にも己の素性に気づかれるのは避けたからである。

しかし、現実は非常である。頼んだ当人であるレアーネ、ガルクは当然として、ティムに居心地悪そうにしていた2人ですら好奇心を露にし、見たそうにしているではないか。一縷の望みをかけて、最も常識人であろうディルスに目をやるが、彼は申し訳なさそうな顔をしながらも、止めようとしない。つまるところ、ディルスも見たいのだろう。

ここまで期待されては、トオルとしても出さないというわけにもいかない。場をしらけさせることになるだろうし、特にガルクとディルスには頼みたいことがあるだけに無碍にもできないからだ。トオルは一つ深くため息をつくと、立ち上がりテーブルから距離を離すと、開けた空間で右手を一振りした。次の瞬間、真紅の大鎌がその手には握られていた。

「ほう、これが…」

一番好奇心を隠していたディルスがいの一番に飛びつく。その威容に目をやる。漆黒の少年にあまりに不釣合いなそれは、真紅の輝きを放ち、その鋭さから余りにも強い死の匂いを感じさせる。ただの魔法の武器ではないとディルスは直感した。自由自在に顕現・消失できることからしてそうだと思っていたが、改めて実物を見てはっきりと確信できた。これはそんな生優しいものではないと。神聖さすら感じさせられる具現化された『死』、そんな風にすら思えた。

「重くないのか？」

ガルクはその威容と少年の体躯とに違和感があったのだろう。純粋な疑問として尋ねる。

「ええ、俺にとっては羽のように軽いのですよ。少し離れてもらえますか」

その言葉に再度距離を置く6人。それを見届けた後、トオルは鎌を縦横無尽に空間に走らせる。その表情に無理や苦痛の色は感じられず、疲労さえ見て取れない。つまり、彼にとって、真紅の大鎌は本当に羽のように軽いのだろう。

「へえ、凄い物だな。それもその武器の効果なのか？俺でもそうなのかな」

純粋な好奇心からか、はたまた優れた武器への欲望か、ライルは不用意にも鎌に触れようとした。いや、触れてしまった。その瞬間、それは起きた。

「うわっ！」

ライルは何かに弾かれたように吹き飛ばされ、壁に叩きつけられる。これには誰もが呆然とせざるをえなかった。それは鎌の主あるトオルにしても同じことである。予想だにしない事態に誰も言葉を無くした。

「いきなり何をする！」

いち早く我に返り、トオルに食ってかかったのはガラムである。意外にも友情には厚い男だったらしい。

「いや、俺にも何が何だか…」

当惑した様子で答えるトオル。実際問題、彼だって予想だにしないことだったのから、責められても困る。

「いえ、今のはトオル君に責任はないですよ。むしろ、不用意に触れたライル君に責任があります」

トオルを擁護したのはディルスであった。

「なんでだよ?！ライルはあいつに吹き飛ばされたんだぞ！」

ディルスに激しく噛み付くガラムだったが、ディルスは動じない。

「トオル君の大鎌はただの魔法の武器ではありません。あれは魔剣の類です。恐らく主以外は拒絶するようになっているのでしょう。そういう魔剣を私はいくつか知っていますし、そもそも魔剣は主を選ぶものですからね。そういう機能があっても、なんら不思議はありませんよ」

「それに他人の得物に許可なく勝手に触れたんだ。本来なら、斬られても文句は言えんぞ」

ディルスの言を補足するように言うガルク。実際、冒険者にとって己の得物は、命を預ける大切な商売道具である。単に見せるだけならまだしも、触れられれば得物の材質や重量、かかっている魔法の効果などを知られることにつながるのだ。それは自身の手の内を知られることになり、そのまま命の危機に直結する。ゆえに持ち主の許可なく、他人の得物に触れば殺されても文句は言えない。これも冒険者の常識である。

「ただ触っただけで、なんで殺されなきゃいけないんだよ?!」

「じゃあ、お前は何か。お前の槍に無断で他人が触れても、何とも思わないのか?」

「そ、それは…」

反駁するもお前ならどうすると問われて、答に窮するガラム。助け起こされたライルも何か言いかけて、口を噤んだ。無断で触るということは盗難の可能性もあるし、気に入って譲渡を迫られる可能性だってある。見るだけとは違い、触るということはそれだけ多くの情報・可能性を発生させるのだ。トオルの真紅の大鎌が単なる魔法の武器でないということが知れたように…。

「ハア、こんなのは冒険者としての常識ですよ。この程度のことも知らずによく冒険者になろうとしたものです…。分かったらトオル君に謝罪してください」

ディルスはこれみよがしに大きく溜息をつくと、謝罪するようにライルに言う。度重なる失態にディルスもとうとう堪忍袋の緒が切れたのか、多分に皮肉と嫌味がきいている。ディルスの整った顔立ちにあいまって余計に辛辣に響いた。

「くっ!」

耐え切れず何も言わずに足早にその場を去るライル。その後をガラムも追う。トオルに一瞬憎悪の視線を向けて…。

２人が立ち去り、残った5人も宴会どころではなくなってしまった。レアーネは主であるライルに代わってトオルに謝罪すると、やはりライルの後を追った。ティムもやはり兄に代わってトオルに謝罪すると、兄であるガラムを追った。残されたのは、トオル、ガルク、ディルスの3人となった。

いや、駆け出し４人が立ち去るのを見計らっていたかのように、ミユキがトオルの肩の上に姿を現した。まるで最初からそこにいたかのように…。

「ようやく邪魔者がいなくなりましたね。これで建設的な話ができそうです。
まったくあの者達は無礼千万、身の程知らずも甚だしいです！」

開口一番、白銀の妖精は辛辣に言った。

「そう言ってやるなよ、ミユキ。彼らは駆け出しなんだ。色々未熟なのはしょうがないことだ。俺だって、そう意味では彼らと大して変わらないし、俺自身配慮が足らなかった。
そんなことより、今はもっと重要なことがある」

トオルが宥めるように言うが、ミユキは不承不承僅かに頷いただけだった。いきなり現れた白銀の妖精に目を奪われていたガルクとディルスであったが、すぐに立ち直る。仕事柄、突発的な出来事には慣れているのだ。流石は、それなりに名の知れた冒険者である。

「ようやくお話する機会ができたと思ったら、中々に辛辣ですねミユキ殿。

今の言葉から察するに、我々2人に話があるとお見受けしましたが、如何か？」

「察しがよくて助かります。マスターはゆえあって、旅をされているのですが、そろそろ路銀が底をつきそうなのです。そこで冒険者として生計を立てることを考えられているのですが、マスターは見てのとおりまだお若い。このまま単独で冒険者として仕事を求めたとしても、追い返されるのが関の山でしょう。かといって、マスターにはこの地での縁故もありませんから、他に仕事を見つけるのは困難です。
そこでお2人には、マスターが冒険者としてやっていけるという保証人になっていただきたいのです」

「なるほど、そういうことか…」

「確かに我々にしか頼めませんね」

駆け出し4人がいるときではなく、自分達2人だけのときに頼んできたのはそういうわけかと納得すると同時に、トオルが自分達に丁寧な態度であったのもその為だったのだろうと納得するガルクとディルス。

「それにしても保証人か…。お前さんには恩義があるし、腕の方も太鼓判を押してやれるから俺としては構わないが、お前はどう思うディルス？」

ガルクは少し考え込むと、相棒の考えを聞く。彼としては別に構わないと思うが、保証人という事の性質上、PTを組んでいるディルスの信用にもかかわってくる話であるからだ。

「確かに戦闘力だけなら十分に冒険者としてやっていけるレベルではありますが…。ですが、即答はしかねますね。冒険者として重要なのはそれだけではありません」

ディルスは慎重に答える。彼としても恩人からの頼みだから、できれば聞いてやりたいと思う。しかし、事が保証人となるとそう易々と肯いてやるわけにはいかない。確かに冒険者ギルドのシステムとして、『保証人』という制度があるのは事実だ。だが、それは往々にして用いられるものではないからだ。

そも『保証人』とは何か。冒険者ギルドが規定する冒険者となる資格は、年齢１４歳以上で、かつ罪歴がない者である。その例外として、一定以上の信頼を得ている冒険者が保証人になることで、罪歴から弾かれた者でも規定数の依頼をこなせば、冒険者としての身分が与えられるというものだ。たとえ人格に優れ実力があっても、罪歴があれば冒険者にはなれない。基本的にはそれでいいかもしれないが、それでは優れた人材の確保や再起・社会復帰という面からマイナスであろうと、その解決策として考えだされたものである。大体、冒険者になろうとする者には、食いつめ者や盗賊崩れも少なくはないのだから、非常に有用な制度ではあるが、保証人となった者の責任は重い。もし、規定数の依頼をこなす前に、保証された者が問題を起こせば、その責任は全て保証人が負う事になるからだ。物損等の損害、賠償責任等、諸々全てが保証人となった冒険者にかかることになる。しかも。保証した者が問題を起こせば、保証人となった冒険者の信用はがた落ちである。それは積み上げてきたものを失うことにつながるのだ。そして、『保証人』という制度は基本的に犯罪歴のある者に対して用いられるものであるからだ。今回のトオルのように年齢制限に使われたという話は非常に少ない。貴族の道楽で行われることはあっても長続きはしないし、冒険者として大成することはない。ましてや、一般人がそれを使ったということ

は聞いたことがない。

そんなわけで、ディルスが慎重になるのは当然であった。それにディルスはトオルの戦闘力は認めても、その人格までは信用していなかった。なんと言っても、素性が怪しすぎる。トオルが来た方向には人里はなく、あるのは『死霊の森』といわれる到底人が住めるような場所ではない土地だけだ。それに、人の手が入っていない地は危険な野生動物や魔獣で溢れているはずだ。そんな中をまだ幼さが残る少年が、無傷で単独で旅してきたなど誰が信じられようか。ましてや、少年の受け答えや所作からして、一定以上の教育を受けていることは明らかである。貴族の子弟である可能性も捨てきれず、下手なことをして恨みを買うことも避けたかったのだ。

「お願いできないでしょうか？」

真剣な表情で頼むトオルに、ディルスは悩みながらも口を開いた。

「トオル君、その答を言う前に君に聞きたいことが一つあります。君はこの国の貴族ですか？」

ディルスがこんな風に聞いたのには訳がある。ミユキの言い様からして、素性を直接に質したところで無駄だと悟っていたからだ。それに疑わしいというだけで、恩人の頼みを無碍にするのも気が引けた。そこで、許容できる身分の者かどうかだけを聞くことにしたのだ。貴族であっても、他国の者ならこの国を本拠地とするディルス達に悪影響がある可能性はまずないからだ。

「いいえ、私は貴族などではありません。この大地に肉親といえるものはなく、天涯孤独の身…いえ、ミユキがいますが、それ以外に縁者は存在しません」

漆黒の少年の答は、どこか哀切さを伴って聞こえた。切なそうにその表情を見やる白銀の妖精の様子から見ても、嘘はないとディルスは判断した。念の為にガルクの方に視線を向けるが、ディルスの判断を肯定するかのように彼も黙然と頷いた。

「分かりました、いいでしょう。保証人の件ひとまずお受けしましょう。
ですが、条件があります。私達とガウレアまでの道中を共にしてもらいます。そこで貴方の人となり、冒険者としての適正を見た上で、改めて判断させてもらいます。それでよろしいですか？」

――なるほど、中々どうして用心深い
――まあ、これぐらいの方が信用できるか
――大体、初対面の人間をいきなり信用しろというのが無理な話か
――それに俺が馬鹿をやらなきゃ、問題はなさそうだし
――一応、頼みは聞いてもらえそうだし、よしとするか

「それで構いません。引き受けてくださってありがとうございます」

トオルは内心で色々考えながら、心からの礼を言う。実際問題、彼にとって一番の難題が路銀の問題だったのだ。いかに食事も睡眠も必要のない身の上とはいえ、彼の精神の大本は人間である。美味しい食事だってしたいし、心地よいベッドで寝たいのである。だが、現実問題として、今の彼は１０歳である。いいとこ１２歳くらいで、この世界における成人である１４歳には見えない。その上、縁故もなくこの世界のことに未だ不慣れな現状では、一般的な仕事などでは雇ってもらえる可能性は非常に低いし、そもそも彼の目的から考えて居つくような職業につくことはできない。かといって、冒険者を目指そうにも、冒険者の店には肉体年齢を判別する魔道具があり、

誤魔化す事は不可能であり、資格で弾かれてしまう。『闇を扱う力』に習熟すればそれも可能かもしれないが、現状では不可能だし、そもそも文無しなのだ。そこまで待つ余裕はない。
そういう意味で、条件付とはいえ、保証人を引き受けて貰えた事をトオルは非常に喜んでいたのだ。顔には出さなかったが…。

「言っとくが恩人とはいえ、贔屓はしない。これは俺達の信用に関わる話だからな」

「もちろんです。お手数おかけしますが、改めてよろしくお願いします」

引き締めるように言うガルクに真摯な態度で応え、改めてトオルは頭を下げたのだった。

冒険者（後書き）

戦技&魔術・魔法解説　（）内はＴＲＰＧ的に表現した効果

『断罪の十字剣撃（ジャッジメントクルス）』：騎士神『クルスト』の特殊神聖魔法。司祭級の信仰心と精神力が必要。指定した対象（生物に限る）から半径１５ｍ以内の敵に神聖なる十字剣による一撃を加える。対象の穢れが多ければ多い程、威力が高まる。回避も抵抗も不可能で、高位の魔族や不死者に非常に有効。但し、一日に一度しか使えない。（固定２０ダメージ＋穢れ１につきダメージ＋０．５）

非常に遅くなりました。本当は紫紺の邪眼の方を更新する予定だったのですが、原作が今にも終わりそうだったので、様子を見てということになり、こっちを更新しました。あちらは少し練り直しの必要性も感じているので、更新が遅くなるかもしれませんが、途中で放り出すつもりはありません。

１０歳児が冒険者になれるかということで、考えた保証人制度ですが、いかがだったでしょうか？中世的な世界でも流石にこういう荒事には制限があるだろうということで、設けた年齢制限ですが、以外に曲者だなと書いていて痛感しました。あまり常識に囚われすぎるのもファンタジーの良さをなくしてしまうので、気をつけたいと思います。

ご意見・感想・批判等、遠慮なくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7266q/

タロットの死神

2011年4月17日09時16分発行